

フルギヤがあつた。かう見ると、ルカの記事「フルギヤ及びガラテヤの地」といふのは、即ちガラテヤ領域中のフルギヤ區を指すものといふ判断ができる。たゞフルギヤの一部分丈がガラテヤに合併されて、同じくアジヤのフルギナなどといふ地方もあつたために、「フルギヤ及びガラテヤの地」といふ二つの名を稱へる必要が起つたのである。

ルカの地理によると、「ガラテヤ領フルギヤ」はアンテオケ、イコニオムを含んだ。デルベとルステラはルカオニヤの中に在る。キケロはイコニオムをルカオニヤに屬すると云つてゐるが、ゼノフォンはフルギヤに屬するものと云つた。使徒行傳十四の六によると、ルカは、イコニオムがルカオニヤに屬せずして、フルギヤ境の中に在ると考へた事が判る。

「南ガラテヤ説」によると、パウロはデルベ、ルステラを訪れた後（使徒行傳十六の一）、フルギヤ、ガラテヤの地方、特にイコニオム、アンテオケを経て進んだ。始め彼は、この方角に来て、アンテオケ迄も行く氣ではなく、アンテオケよりも遙か東方で、アジヤに入る大道に合し様と豫定したらしい。一寸地圖を眺めると、イコニオム、アンテオケ間の距離は、イコニオムとアジヤの最近地點との距離の約三倍もある事がわかる。然し「聖靈にとゞめら

れ」て、遂にアジヤ入りを思ひ止まり、ガラテヤ領内の、フルギヤ地方を旅しつゝあつた。

この立場によれば、パウロは、ガウルの子孫の地たるガラテヤを訪れるのでない故「ガラテヤ書」といふのは、彼が第一回傳道旅行に築き上げたデルベ、ルステラ、イコニオム、アンテオケの諸教會に宛てられた書簡であつた事が判断される。彼が、讀者を呼ぶに「ガラテヤ人よ（ガラテヤ三の一）」と呼ぶ所以は、單に彼自身がロマ市民であつたために、ロマ式の呼び方に慣れてゐた許りでなく、それは又當時一般に、ルカオニヤ、フルギヤの人々を、一とまとめにしてガラテヤ人と呼び慣はした慣習によつたものであつた。同書四の十三にパウロの曰ふ「病」は、多分第一回傳道旅行に關聯して記されてある様に、海岸地方で感染したマラリヤ熱であつたらしい。その療養の爲に、平均三千五百呎以上の高所に位する南ガラテヤの町々は好適の地であつた。その上この書簡中（特に二の九、十三）屢々バルナバの事を話す所を見ると、この地方の人々が、先の旅行により、バルナバと非常に親しくなつた事も表はしてゐる。

とにかく、パウロは、旅程をつゞけて行くうちにイエスのみ靈の導きを受けて、西と北の



方向に進路を轉じた。この導きが、一體どんな形をとつてなされたかは明示されてゐない。多分パウロは色々な障害に遭遇し、それを通して、聖靈、彼に語り給ふたであらう。このことは「禁せらる」とか「許し給はず」などといふ言葉で、しかと察せらるゝのである（使徒行傳十六の六―七）。或は又パウロは心中に、未來の成功の「まぼろし」をみて、その中にみ靈たまの召しと導きとを得たとも考へられる。彼がピテニヤに赴かむと試みるや、再びみ靈はそこはパウロの赴くべき目的地に非ざる事を告げた。多分尙遠くへ進まんとする彼の希望の一面には、第一回旅行の際に度々蒙むつた様な迫害の少ない地——例へば、大袈裟な、組織立つた反對運動を起さるゝ様な會堂のない、大きい、重要な都市に、行きたいなどといふ考へもなかつたとは云へないであらう。ピリビに猶太人の會堂なく、又こゝの信者が、後日、パウロに一番忠實な教會を建設したことを考へ合せると、さういふ見方にも一理ある事が分る。

## 二 ビリビ

イエスのみ靈は尙もパウロを導いて、終に小アジアの西の涯、トロアスの港に迄至つた。

パウロは、こゝにも停止しなかつた。幻に彼は一マケドニヤ人現はれて「マケドニヤに渡りて、我らを助けよ」としきりに願ふのを見た。この幻についてのパウロの心理状態は、使徒行傳十六の十に、不意に用ひらるゝ、「我ら」といふ復數第一人稱によつて、想像ができる。之が、使徒行傳中、最初に復數第一人稱代名詞の用ひられた所である。之と同じ代名詞の挿入された場所を仔細に調べてみるとまづ、この物語りの記者は、最初に「我ら」と書いてゐる所で、パウロと一所になり、共にピリビまで旅して、そこでパウロを助けたといふことが分る。使徒行傳十六の十七以降、即ちピリビより先きの方の記事によるとこの代名詞は、出て來たのが不意であつた様に、又不意に止んで了つてゐる。更に同書第二十章の五、パウロが第三回の旅行の時、同じピリビで再び「我ら」の使用が始められる。前後の關係より按ずるに、記者は多分ピリビの住人で用件を帯びてトロアスに行つたか、或は始めよりパウロに會ふつもりかでトロアスを訪れて、パウロに、マケドニヤ傳道を願つたものらしい。この懇ろなる招待が、パウロの宿望と一致して、やがて幻となつて現れ、遂にパウロをして萬難を排して、マケドニヤに渡る決意を促さしめたのであつた。



パウロの、此時の計畫は、餘り遠大であつたので、我らはこの「マケドニアの人」とルカとが果して同一人物であつたか否かを定めるのに、たとへ幻の中の人が人間の形を具へてゐたとしても、一寸困難を感せしめられる。とまれ、パウロが此の幻に、重い意義を付した事により、我らは、幻の人が誰であつたにせよ、それはマケドニア傳道の必要そのものの權化であつた事を知るに苦しくない。

更に「我ら」の用法について一言せんか、之は使徒行傳中左の四ヶ所に用ひられた特別の叙述で、明かに、ルカが自ら目撃した事實を日記に留め、そのまゝ、こゝに寫し取つたもので、歴史家にとつては尤も重要な直接資料である。(緒言、資料について参照)。

(一) 十六の十一十七

(二) 二十の五—十五

(三) 二十一の—十八

(四) 二十七の—二十八の十六。

話は戻つて、こゝにパウロ、シラス、テモテ及びこゝで新たに加はつたルカの四人の伴侶

は、今や定まつた目的の下に、トロアスを船出した。ネアポリスに船を捨てて陸路九哩、一行はピリピの町に到着した。之はパウロが第一回旅行に見た、何れの町よりも開けてをつた。こゝは、彼が第二回の旅行中、最初に腰をおちつけて、傳道した所である。パウロの活動の中心地は、一回毎に、より大きいものへと進んで行つた。彼の旅行の趾を歴史的に順次に辿つて行く事は、とりも直さず、彼の事業發展の順序を辿り行く事である。テサロニケはピリピよりも重要な都市であり、コリントはその何れよりも、遙かに大いなる都會であつた。更に第三回の傳道旅行で三ヶ年を費やしたエペソは、前二回の旅に滞留した、どの都會よりも繁華であつた。ロマは最後にして、最大の都であつた。

ピリピはその當時、ロマ植民地であつた。ルカはこの一事を誇りとしてゐた。ブルタスとカシウスは、ヂウリマス、シーザーを暗殺して、東方に走り、ピリピにて、紀元前四二年アントニオと若きオクタヴィオとに破れた。この若きオクタヴィオこそは、後のアウグスト大帝であつた。この勝利を記念するために、アウグスト大帝は此町をロマ植民地となし、ロマ政府と同じ政治組織を許し、更に全市民をロマ市民とした。恰もロマ市の雛形を、この地に



移し植ゑた様であつた。

ルカはこの市を指して、地方最初の市と云ふが、之は實際上、眞ではない。同じ地方のアムフィポリスはピリビより先に、市に位づけられてゐた。要するに之は、ルカが生れ故郷であつたのでお國自慢でかう記したと見れば差し支へあるまい。ルカの説によればピリビは地方で最初の市であつた。尤も之は決して、ピリビが此地方で最初のロマ植民地となつたといふ意味ではない。ルカは生れた市の歴史と、勢力と、將來とを考へつつあつたので、この市に丈この様に特別な讃辭を呈したのである。

ピリビには、猶太人の會堂はなかつたが、市内に住む猶太人は、安息日毎に、市外に在る一定の祈りの場所に集合してをつた。その場所を河に近く選んだといふのは、多分、律法の命ずる、色々な「潔め」の必要からであつたらしい。ルカは度々こゝを訪れたものであらう。彼も亦確かに、神を畏るゝ敬虔なギリシヤ人であつた。

ルデヤといふ婦人はテアテラ地方ルデヤ市生れであつた。この市は小アジャ七都市の一つで、後に「黙示録」の中に表はれてくる。彼女は相當の物もちで、ピリビに店をもつてゐた。

復活のイエスと神秘的な靈交により、皆、睦まじい新生活に入ると云ふ、パウロの福音は、強くルデヤの心を打つた。彼女は、單に、公然信者となつた許りでなく、大膽にも、自らの家を、集り場所としてパウロ一行に提供した。それは聖徒の一行に尤も必要なもので、彼らはどの位、この親切な提供を感謝したか分らない。恐らく之は、ルカの家より大きくあつたものであらう。でなければ一行がどうして、ルカの家よりも、ルデヤの家を選んだかといふ理由が立たない。

之よりルカの日記は、神の國の建設に、婦人がよく働いた事を誌してゐる。ピリビに於ける第二の注目すべき事件も亦婦人に關してゐる。ルカは其の二つの著書、即ち第三福音書と、使徒行傳の中に、他の新約記書の凡てを合したもののよりも、多く、婦人の力が基督教に貢献したといふ記録を保存してゐる。勿論パウロも亦屢々、彼の教會内に於ける奉仕の徳の著しい婦人の名をあげてはゐる。ピリビの二人の事はピリビ書四の二に記し、ガラテヤ書三の廿八には、福音には男女の區別なしと云ふ。全體として初代教會の婦人に對する態度は、猶太教祈禱書に比較すると截然たる差がある。後者によると、禮拜者が、堂々と、婦人に生れな



かつた事を神に感謝する祈禱などが見受けられる。

ルカの記事の第二記事で、パウロ一行がト筮の靈に憑れて、ト筮をなす婢女に會つた事が書かれて在る。之は普通、吐言、術を行ふ女の事を指したもので、一體にその技術は、人々によく知られてゐないので、術者の出だす一種の聲音が恰も靈より發せられるものゝ如く思はれた。この女は、この術によつて、主人に多くの利益を得しめてゐたが、心の中は善良な女であつた様に思はれる。同時に自ら、奴隷生活の屈從の身の上のみじめさをかこつてゐたらしい。そこに表はれた、パウロとその一行の説く、キリストの信仰による、福音の自由を聞いたので、彼女の心は悦びに躍つたであらう。前後の分別もなく彼女はパウロ一行の後を追ひ「この人達は、いと高き神の僕である」と叫びあるいた。然し未だ自分の務めと、其の主人より自由になるわけには行かなかつたが、かういふ事のつゞいた後、ある日、パウロは彼女を振り返つて、キリストの名により彼女の心をばその束縛より解いた。

彼女の主人達は、最早、利を得る望みの無くなつたのを見て、パウロとシラスとを捕へ、法廷に曳き出だした。この時の處置は餘程不公平なもので、パウロの心に深い悪印象を與へ

たらしく、その事は、彼が、この次に滞在したテサロニケの人々に送つた書簡に委しく認めである。即ちテサロニケ前書二の二にパウロは「前に我らは汝らの知ら如く、ビリビにて苦難と侮辱とを受けた」と書いてゐる。この女の主人達と云ふのは、單に女より利益を奪ひ去られたためにのみ、怒つたと云ふよりも、むしろ、他の奴隷までも、このやうにして奪ひ去られはしないかと畏れたのであつた。そこで彼らは、當時、國內到る所にはびこつてゐた所の、反猶太人熱の民族的反感を巧みに利用した。而も、この年はクロデオがロマより猶太人を全部追放したといふその年にあたつてゐた（使徒行傳十八の二）。やがて彼らは群集を率ゐて法廷に闖入して示威運動を試みた。事勿れ主義のロマの下役どもは、その威に怖れて、最上の策は、公衆の前で、パウロとシラスを所罰して、獄に下すに在ると考へたらしい。コリント後書十一の廿五に、パウロの曰ふ「三度び鞭にて打たれ」といふ、その中の一つは、之であつたに違ひない。

パウロとシラスとは、獄の中に投せらるゝと直ぐに、側の囚人共に福音を説き始めた。囚人共は、パウロがその前半生に於いて律法と因習に捕はれて、暗黒と罪惡とに苦しんだが、



一旦ダマスコ途上に主の幻に覺されて以來、自由と、光明と、正義の中に住む悦びとを比較した。活ける證を聞いた時、彼らを縛る足械も、牢屋の闇も、その堅壁も、皆忘れて了つたであらう。かくて牢屋の中は時ならぬ祈りと讚美の聲に満ち渡つた。

この時、テモテとルカも拱手傍觀してはゐなかつた。彼らは強硬に、市の長官達に面會せむ事を願つた。パウロとシラスがローマ市民であるといふ報知は、之らの役人にとつては大いなる驚きであつた。知らずにやつたとはいふものの、こんな場合に彼らがやつた狼狽の様も察せらるゝ。折しも、地震があつて、牢獄のどだい石を揺り動かし、パウロとシラスのために、門が開かれた。地中海沿岸の地震は珍らしい事ではない。上役人らが、使徒達放免の使を送つた時、使者らは、囚人許りでなく、獄卒までもパウロの救へによつて悔い改めてゐるにも拘はらず、使徒達はそこを動かさずして、上役ら自ら來りて、彼らを護衛して出獄すべき事を要求したので、驚いてその旨復命した。之は役人らの爲した輕卒なる行動に對する當然の贖ひである。又同時に之は、パウロとシラスが囚人達の前に、その無實を證明する爲め許りでなく、實は悔い改めた獄卒どもを保護せんための心づかひであつた。もし後日、上役が、

獄卒どもの改信を知つた際には、使徒達を逃したなどと稱して、彼らを罰し、その職をさへ奪はむとするおそれがあつた。

第一世紀時代のバピラスの記録をみると、當時の獄中生活や、絶望しきつた囚人どもの心持の一斑がうかがはれる。パウロやシラスが、この様な囚人一統に與へた感化は、常にそこより起る、泣き聲や、不平の聲に比べては何といふ對照であらう (Flinders Petrie, Pap. III, 35, 36 参照)。

パウロとシラスは牢屋を出ると早速、ルデヤの家に歸り、そこで弟子達と熟議の結果、役人らの願を容れてこの町を立ち退く事に決めた。パウロの計畫では、すべての町を残らず正義によつて征服し様といふのではなかつた。種子が丁度、靜かに選ばれた土壤に蒔かれる様に、福音も亦、中心地になる樞要な場所に植ゑられねばならなかつた。

後の引照によれば、すでにピリビには、之で、十分に福音の種子の蒔かれてをつた事がわかる。ピリビ書は新約聖書中何れの書簡にも勝つて、パウロの愛情と感謝とにあふれてゐる。ピリビの教會はパウロに一番忠誠を盡した教會で在つた。例へば、ピリビ教會員はパウロの



テサロニケ傳道を助くるために二度までも、テサロニケのパウロに金銭を送つたといふ事がピリピ書四の十六に記されてゐる。又パウロがコリントに滞在在中にも、金を送つて彼を助けたことがコリント後書十一の九に在る。最後にパウロがロマの牢屋に投せられた時にも、彼らは溢るゝ許りの同情を、少からぬ贈り物として、パウロに感謝の辭に苦しむ程の満足を與へたといふ(ピリピ書四の十八)。

### 三 テサロニケ

アムビポリスとアポロニヤは、かなり繁華な町々であつた。ピリピを出たパウロが、かういふ町々を通りながら立ち寄りなかつた理由は、彼が一日も早くマケドニヤの中心地に到らむとする焦燥な氣持をよく表はすものである。ピリピより約九十哩、テサロニケは、紀元四十四年、マケドニヤ總督の住所で且つ政廳所在地であつた。「サロニキ」の軍事上の價值は、最近歐洲大戰中の軍事報告によつて屢々われらに知らされた。この町は歴史上又、重大な事蹟に富んでをった。ヘロドトスやタシテスによつて「テルメー」の名で屢々引用され、クセルクセス大王は希臘侵入の途、こゝに留つた。紀元前三一五年カサンダーによつて再建せら

れ、テサロニケの名が與へられた。それは歴山大王の妹の名に因んだものである。キケロはその流誦の一部をこゝに送つた。終にロマは之を自由市として市の自治制を許した。海より之を望めば、ゼノアに似て、灣に臨んだ一大圓形劇場の形に追られて、壯大な美觀である。

この町に於ける、福音の始めについて、パウロはテサロニケ前書に、かなり長く、詳細に亘る説明を與へてゐる。第一章第九節に彼は如何なるさまをして市に這入り、人々をして偶像を捨てて神に歸せしめたかを説いてゐる。之によるとテサロニケ信者の大部分は異邦人で、決して猶太人でも又は敬虔なるギリシヤ人でもなかつたらしい。何故ならこの二者は決して偶像崇拜者ではなかつた。猶太教の影響は、教會内に殆ど無かつたので、パウロはその書簡にも、その存在を念頭に置かないで書くを得た。

テサロニケ前書を読んで行くと、パウロはその第二章第一節にピリピで受けた侮辱的待遇とテサロニケの人々が、彼を心より歓迎し、福音を快く受け入れて信仰に入つた事實とを鋭く對照してゐる。彼らの信仰は、その後加へられた迫害や、苦難にも少しの搖ぎも見せなかつた(一の六、二の十四參照)。更にパウロの言によれば、彼のテサロニケ滞在は、かなり



長く、少くとも數ヶ月に亘つた様に思はれる。之は彼が、信者達と一所に天幕造りに従事して暮したなどと云ふによつても知られる。かくてパウロは晝夜激しく働いたが、滞在が長くなつたので窮乏を感じるに至つた。この時ピリピの信者達は、パウロの窮乏を聞くや直ちに救ひの金を送つた。その後、再びパウロの困窮を聞くと、悦んで二度目の補助金をも送つて来た（ピリピ書四の十六参照）。遂ひ延び／＼になつた理由は個人的にも亦、公けにも關係する所が在つた。パウロはその事を「汝らは知る、われらが父のその子に對するが如く各人に對し」た（二の十一）とも又「なんぢらは、我らの發するものとなりたり」（二の八）とも云つてゐる。

かくの如くパウロ自身の言葉は、テサロニケの數ヶ月、主として異邦人の間に於ける傳道の成功を回想せしめる。この點に關する使徒行傳のルカの記事は確かに不完全なるを免れない。ルカの記事丈であると、パウロは三回の安息日（使徒行傳十七の二）以上、この市に留まつてゐない事になる。又彼はテサロニケの敬虔なギリシヤ人の多くの群について語つてはゐるが、パウロの一行が猶太人の會堂より分離して、結局異邦人のみに向つたといふ事實に

就いては何も記してゐない。最初の三週間の出來事を描き出した後、ルカは直ちにパウロの出發と關聯した事件を持つて來てゐる。この點に於けるルカの不正確さと、「我ら」部分に於ける記述の正確さとを比べると、まるで、別人の様に見える。これとりも直さず「我ら」部分はルカが自ら目にし、又共に手をつけた事件について記したものである所以であらう。然し唯一つの點は著しく正確である。彼はテサロニケの上役人らと呼ぶに「ポリターク」の稱號を用ひてゐる（ロマ治下、西アジア都市の知事の稱號）。之は聖書中は他にはなく、唯今日碑銘によつてのみ豊富に證據立てられる。

市内の猶太人らは、嫉妬に動かされ、又猶太人の優越權を維持せんがために群集を唆かした。ロマの法律は信仰の自由を許してをつたので新來のパウロ一行に對する批難は、宗教的でなくして、政治的のものであつた。即ち彼らの言ふ所によれば、パウロとシラスの一行は、口に心の王國を説きながら、その實、政治的革命を暗示しつつあるもので、ロマ政府に對して柔順なる人民の秩序をかき亂さうとするものであるといふのであつた。パウロとシラスはピリピに於ける苦い經驗があつたので、群集と争ふ事を避けて、靜かに、この市を去る計畫



を立てた。

興奮しきつた群集が、パウロ一行の宿れる家を襲つた時には、彼らはすでになくして、群集はヤソンを捕へた丈で満足せねばならなかつた。ピリピの信者が集りをした家の持主、ルデヤが物持ちの婦人であつた様に、このヤソンも亦相當に人望のあつた者らしい。やがて、ヤソンはロマの皇帝の他に、地上に今一人の王あり（使徒行傳十七の七）と稱する革命家を宿したといふ科により咎めを受けたが、結局ボンドを積んで釋放された。多分このボンドはパウロとシラスが市外に出るといふ保障として取られたものであらう。ヤソンに之以上の迷惑をかける事を恐れたので、一行はその夜テサロニケを出立した。

彼らはこゝにも亦、種子を蒔きつけた。そして暫くの間は、ピリピに於けるよりも、ずつと早く芽が出て成長するもの様にも見えた。僅か數ヶ月経つた後、パウロはテサロニケ前書二の一に、この傳道の空しくなかつた事を述べてゐる。同じく二の十四には、信者達が、迫害に堪へ忍びし事を賞し、その殊勝さを、猶太に於ける最初の信者達の受難に比べてゐる。同書四の九、十、特に一の七、八には、彼らの信仰生活の進歩をば、特別の言葉でほめ且つ

勵ましてゐる。「汝らはマセドニヤ及びアカヤにある、すべての信者の模範となれり……神に對する汝らの信仰のことは、諸方に弘まりたるなり」と。使徒行傳二十の四には、吾らは二人のテサロニケ人が暫くの間パウロの伴となつて旅した記事があり、廿八の二には、この中の一人はバレスチナよりロマへの航海にパウロと共に乗船したとある。

#### 四 ベ レ ヤ

ベレヤに到着すると、パウロの一番に氣の付いた事は、當地の猶太人が、今までパウロが訪れた何れの土地にも勝つて親切であることであつた。彼らは直ちに福音を受け入れた。その態度はパウロにとつては、非常な悦びであつたに違ひない。かりにパウロがエルサレムより遠くに出たのが、異邦人のためでなく、狹義の律法觀に超越した猶太人を探し歩いてゐたとしても、彼は失望する必要はなかつた。羅馬帝國內に散在する胸の廣い世界的な猶太人は、必ず彼の使命を歓迎し、又その眞理を受け入れるであらうと豫期したパウロの考へは正しかつた。この以後パウロは、テサロニケ猶太人に見舞はれた以外には、外國に移住散在してゐた猶太人よりは何ら烈しい反對を経験しなかつた。コリントでさへも、少數の者の反對は、



迫害を醸すに足らず、終に彼が一年有半の傳道を終つた時には、反對などは更になく、却つて非常な成功を収めた。

マケドニヤでパウロを苦しめた猶太人は、テサロニケ在住の者共許りであつた。彼らは前の成功に勵まされて執念深くパウロ一行のあとを追つてベレヤに到着した。こゝではかなりの反抗を惹起した。テサロニケと同様、批難の的は、パウロがロマ以外に「他の王」と「他の國」どの來臨を預言するといふのであつた。パウロの知人らは、彼の身邊に危害の加へられん事を恐れて町の外まで護衛して送つた。シラスとテモテのみは留まる事ができて、新しい信者達を激勵した。

パウロのベレヤ滞在は、數週間に満たなかつたであらう。併しその割には多くの人々が悔い改めて新しい信仰に歸依した。ルカはピリピに於ける婦人の悔改者について語つたと同じく、テサロニケに於いても（使徒行傳十七の四）、ベレヤにても（十七の十二）、又はアテネ（十七の卅四）に於いても、福音宣傳に力を致した、婦人の功績を傳へてゐる。パウロによつて植ゑ付けられ、一時シラスとテモテによつて育てられたベレヤの教會は、後日、恵ま

れた教會と成つた。數年の後パウロがエルサレム地方救恤の金を募つた時、ベレヤの教會は且ぐに應じたと云ふ。教會員の一人はパウロに従つて行つたといふ事が使徒行傳二十の四に記されてゐる。

### 参 考 書

1. Ramsay, St. Paul the Traveller, pp. 213-36.
2. Kent, Work and Teachings of the Apostles, pp. 104-5, 112-19.
3. Gilbert, Student's Life of Paul, PP. 107-25.
4. Conybeare and Howson, Life and Epistles of St. Paul, chaps. VIII, IX.
5. Farrar, Life and Work of St. Paul, chaps. XXV, XXVI.
6. Bible for Home and School, "Acts", pp 154-67.
7. McGiffert, A History of Christianity in the Apostolic Age, pp. 234-56.
8. Bacon, the Story of St. Paul, pp. 147-63.



## 第八章 アテンスとコリント

### 一 アテンス

使徒行傳十七の十六―卅四。テサロニケ前書三の一、二。

### 二 コリントの一年有半

使徒行傳十八の一―十七。コリント前書一の十四―十六。二の一―五。

三の一、二。九の十二、廿二。コリント後書十一の八、九。テサロニケ

前書三の六、七。ビリピ書四の十五

### 三 テサロニケ教會に宛てし二書簡

テサロニケ前、後書通讀の事

### 四 エペソの短期訪問

使徒行傳十八の十八―廿二、

### 五 ガラテヤ教會に宛てし書簡

ガラテヤ書通讀の事



## 一 アテンス

ペレヤを船出したパウロは、新らしい信者の友達に護られて、オリムプスの山を遙かに望みつつギリシャ海岸に沿うて南下し、やがてアテンスの港についた。ペレヤの人々はこゝより元に引き返した。テサロニケ前書三の一に、パウロの言ふ所は、アテンス滞留の終り頃に關するもの様であるが、同じく之は、アテンス到着の、直ぐ後に起つた事とも考へられる。ともかくも、パウロは一人アテンスに留まつた。

アテンスの町は、暫く留つて働く場所としては恰好の所で、パウロの注意を惹くに足る物が十分に在つた。運動、競技、美術、哲學さては宗教の根源地であつた。壯大なスタジアムには、有名なギリシャ獨特の競技の絶ゆる間とはなく、それらの建物は、今日も尙修復せられて、昔しながらの面影を傳へてゐる。パウロは少なからず、運動、競技に興味を有つてゐたので、彼の書簡の中には、拳闘や角力、競技の訓練、競走、賞牌の獲取などの引例が、有効に用ひられてゐる。

アテンスは世界中で、尤も美術的に築かれた町であつた。優美な彫刻の立像、美麗に飾ら



れた宮殿や公共の建物が、殆んど町全體を神仙譚の中に現はれた町に化せしめた。殊にアコロポリスの冠であるバルテノンの神殿は建築の粹を極めたもので、その廢墟でさへも、昔日の趣をしのばせて今日比較すべきものを見出だし得ない程である。

アテンスは又、哲學の中心として有名であつた。ソクラテス、プラトーン、アリストテレスが、人生の意義、靈魂不滅、神の性質などに就いての考へ方や、推論法に大いなる刺戟を與へ、又色々な哲學上の學派も出來た。中にも、エピクロス派（使徒行傳十七の十八）といふのは、神々の存在を、全然否定はしないが、同時に、感覺が知識の唯一の基礎であるとし、神々は人事とは全然無關係であると主張した。ストイク派は又、すべて人は、各自の内に神性の閃きあり、従つてある意味に於いて人は神と血族であるとなした。

哲學の中心であつたためか、アテンスは同時に種々の宗教や、宗教的信仰の集る所となつた。古くから在つた、ゼウスの宗教はすでに、ギリシヤ人の信仰をつなぐ力を失ひ、オツムパス山の十二の神々も亦昔の様な活きた眞實さを與へなかつた。然しこのために却つて他の宗教が入り込む隙を得て、祭壇や、禮拜の色々な儀式は、そこを訪れる人の目を驚かすもの

があつた。町中で一番大きくして、高い宮の一はスリヤ王、アンテオカス・エビファネスによつて建てられた。この王はアンテオケに居を据ゑた。その爲に町はアンテオケと呼ばれ、パウロの傳道旅行はこのアンテオケを出發點とする。アンテオケとアテンスとは全然無關係の町ではなかつた。この事はパウロがアコロポリスより遠くないこの宮を訪うた時に直ぐ判つたであらう。それと正反對にこの二市の間には實に密接な交渉があつた。従つてパウロが齋らさむとする使命も二市間に深い關係あるものであつた。

パウロは始めより、ここに永く留るつもりではなかつた。使徒行傳十七の十六によれば、パウロは此所にクリスチャンの團體をつくらうなどといふ考へは少しもなかつた。唯シラスとテモテの來着を待ち合せてゐたのである。多分この町には、大きい仕事の基となる丈の猶太教の會堂がなかつたかも知れない。或は又、ここには特に、彼に敵意を有つ猶太人がゐて、邪魔するであらうといふ、十分の證據があつたかも知れぬ。一番尤もな理由は、パウロは、久しい前より、コリントを以てギリシヤに福音を宣べ傳ふるに尤もいゝ中心であると考へてゐたのであらう。マケドニヤに於てもパウロは、アムファイポリスの様な重要な都市に説教も



せず通過した。パウロはアテンスに、シラスとテモテを待つて、共にコリント傳道を開始しようと思つたらしい。

かくして待つ間に、パウロは、アテンスの町が偶像で満たされてゐるのを見て、痛く憤慨した。そこで彼は、暫くの間を利用して、こゝにも真理の種子を蒔かむと決心した。例によつてまづ彼は、會堂に入つて、猶太人及び「敬虔なる人々」に向つて語り始めた。市場でも亦機會ある毎に、人々と論議した。この時、哲學者のある人々が、その中にはエピクロス派もストイク派もあつたが、パウロの教へに耳をとめて他の人々にも告げ知らした。ある者はパウロの「イエス」と「復活」の話を聞いて、二つの力又は二つの神と考へた。彼らは、ふだん聞きなれてゐた、アチス、アドニス若くはアイシス・オサイラスといふ様な神々と同位に思つた。使徒行傳十七の十八、「神々」と云ふ語は、當時の哲學者達が、イエスのみ靈はソクラテスが説いた「神の靈」と同じ内住の聲と考へた事を教へてくれる。第十八節はソクラテスの使つたと同じ語が用ひられてある。

彼らは、パウロに願つて、アレオバガスの會議の前で、その福音を公けに示さむことを乞

ふた。その昔し、未だ異教に嚴酷な頃、この同じ町が、當時のギリシヤ宗教に新らしい「神」を入れたために、ソクラテスを責めて鳩毒を飲用せしめて死刑に處した事と比べたら、何といふ對照であらう。パウロにとつては又とない機會であつた。ルカの記録は、パウロの演説を二分間にも満たぬ、一と口に書き記してゐるが、その中にも尙吾らは實際にパウロが話したであらうと考へられる重要な言葉の端々が表はれてゐる。「知らざる神に」と刻まれた祭壇といふのは、その當時、何も珍奇のものではなかつた。商業の計畫が成功した時、個人的危険より免かれたなどいふ場合、人は、どの神に向つて、彼の感謝と満足を表していいかわからない時がある。一九一〇年、小アジャ、ベルガマムの發掘に際して、一つの石が掘り出された。その上に「知らざる神々に」と讀まれる碑銘が在つた。この様な碑銘は、パウロの議論を始めるのに、此上もない好材料となつた。

然しこの祭壇は、本書第一章にあるやう、より深き望みと、研究を興へんとするパウロの強い論點によき緒を興へただけであつた。通俗的ギリシヤ哲學や宗教等は、人の手によつて造られぬ宮に住み給ふ靈の救世主を感得し、發見することに力めてをつた。引用された語句



「我らはまたその裔なり」といふのは、パウロの生れ故郷タルソに近く住つたギリシヤ詩人、アラトスの詩の一句である。この演説の中にキリストの名は表はれてゐないが、この省略は多分、演説の終りの方で「昔しの無知と今悔い改めに導かんとする聲」とを對照した強い結句より推して、大した意義ありとは思へない。

その當時ギリシヤの各都市に流行した、各種の宗教の教へに慣れてゐた、聽集は、パウロの教へは、その新らしい仲間に加はる様招待されるものの様に了解した。この社會に於いては、神靈の力が、すべての會員を力づけて、死や審判の上に立たしめ、此世でも來世でも、神と共にある神秘的な生活を意味するのであつた。ある人々は、今一度パウロに願つて、この問題を委しく説かしめんと希つたが、アテンスには敬虔なるギリシヤ人は少なかつた。今やパウロの周圍にある人々は、その有つてゐる倫理、宗教的感覚が、絶えず目新しい教へに慣れきつて了つた者のみであつたので、何ら根強い反響は起らなかつた。アレオバガス會員の一人と他に少數の悔改者は得たものの、パウロは之以上働いても、それは時間の空費であると考へた。そこでシラスとテモテを待ち合する豫定を變更して、單身、コリントに向けて出

發した。

## 二 コリントの一年有半

コリントには二つの港があり、一つは東に、他は西に面してゐる。それはロマ及びイタリヤより、小アジア、スリヤに通ずる主要道路であつた。この地峽の岩石を掘鑿して通す三哩半の運河は、ヂュリヤス・シーザーの時に、工事が開始され、ネロ之を續行し、終に紀元一八九三年に完成したものであるが、パウロの時代には、コリント市政改善の一問題として盛んに論議せられ、又熱心にその完成を希望せられたに違ひなかつた。當時は木製の鐵道によつて限らない貨物が運搬された。かゝる商工業の要地は、ロマ中何處にも匹敵する所がなかつた。

紀元前一四六年、ロマに反抗したアカイヤ聯合の先鋒となつたために、市の大部分は破壊されたのでその後約百年許りは、まるで廢墟に少し氣の利いた町に過ぎなかつた。それが再建されて紀元前四六年、ヂュリヤス・シーザーによつてロマ植民地となされた。パウロの時にはもう、大商工業發展の最中であつた。住民は各民族を網羅し、富は増加し、同時に又



富と商業の殷盛は、悪徳と物質主義の隆盛を齎らした。

アポロ殿堂の主要なる部分は、ロマ軍の掠奪を免かれ、又一部分は、一八五八年の大地震にも、被害を蒙らなかつた。残存する七つの圓柱は、殆んど二十五呎の高さあり、その礎の所では直徑六呎餘に達する。次に、上に向つて細味を帯びた圓柱や、特種の形をなせる建築法を見たるパウロは直ちにそれが古代の神殿であつたことに氣付いたであらう。事實それはパウロが到着した時よりは、六百年も古へのものであつた。恐らく半ば壊れたこの聖殿こそは、アテネの「知らざる神に」と銘せられた祭壇が與へたと同じく、好い説教の緒を與へたであらう。

今一つコリントの名物がある。それは、アクロ・コリントと呼ばれる巨大な巖の山で、その頂千八百呎の高所には、難攻不落のコリント城寨が屹然と聳え立つてゐた。東西に馳する遙かなる眺めは、パウロをして、この土地が、再び揺り動かさるゝ憂なき福音宣傳に絶好の場所であるといふ感じを新たに印象付けたに違ひない。コリントと其不斷に變る住民より、彼の福音は、船乗りや旅人らによつて、東西、到る所、地中海の港々に運び行かれた。従つ

て、今まで訪れた諸地方の中心地よりも、こゝに長く滞在する事は、それ丈の價值ある事に考へられた。

長期滞在の爲には、まづ住宅と職業とを求めらるゝ必要がある。幸運にもパウロは、同じ猶太民族で、同じ職業をもつポンタスのアクラとその妻のプリスキラとを見付け出した。史家スートニオの曰ふ所によればロマ皇帝クロデオが、すべてロマの猶太人を、彼らが「クレストス」といふ一派の煽動者によりおだてられて騒擾を起したために、ロマより追放したと云つてゐる。この「クレストス」と云ふのは多分「キリスト」を一般に、そう間違へて呼んでゐたものであらう。ロマより追放されたアクラとプリスキラとは、イタリーの外で、ロマより一番近い大都會に居を定めた。パウロが彼らと一所にコリントに留まつてゐた時、彼らはパウロにとつては、非常な助けとなつた。殊にシラスとテモテが着かない前は、パウロにとつては又とない力頼みであつた。多分アクラ、プリスキラは、ロマにもクリスチャンの在る事や、市の状況を時に觸れては語り聞かしたであらう。之は益々パウロの決意を固めて、機さへ熟したならば、一日も早くロマに上りたく感せしめた。



パウロがコリントで説教した、會堂の扉の上にあつた、頭書といふのが今日も尙保存せられてゐる。コリントの博物館に行くと「ヘブライ人の會堂」と書かれた石が保存されてあつてその荒削りのままの面粗末な素人らしい書體より察すれば、之らの猶太人は、コリント市上流階級の人々でなかつた事が分る。之はパウロの云ふコリント前書一の廿六「肉によれる智き者、おほからず、能力ある者多からず、貴き者多からず」なる句に有意義な解釋の材料を與へる。

やがて、シラスとテモテがマケドニより來着して、パウロの心中に希望を齎らした（テサロニケ前、三の六、七）。パウロは單に二人の伴侶と助けを求めた許りでなく、實はマケドニヤ各教會の状態を一日も早く知りたかつたのである。テモテがベレヤよりアテンスに來て、再びそこよりテサロニケに送り返されたか（之はテサロニケ前三の一、二、に記さる）、或はベレヤに残されて、テサロニケを訪ね、それからコリントに來りてパウロと合するやうに命せられてゐたか（之は使徒行傳の記事による）、今ここで問ふ所ではない。何れにしても、シラスとテモテとはコリントに來り合したので、パウロの元氣は大いに力づけられた。恐ら

く、テモテがテサロニケに在るうちに、シラスはビリビに赴き、そこよりパウロに宛てた心づくしの贈物を携へ來たのであらう。この事はコリント後書十一の九、ビリビ書四の十五にパウロの記す所となつてゐる。

シラスとテモテの到着後、パウロの説教は、著しくその力を増した。狭量な猶太人らは驚いて反對した。そこでパウロは、猶太人の會堂を捨てて「神を畏るゝ人々」の間に温かい歓迎を見出だした。テトス・ユストは自分の家を集りの場所として、パウロに提供した。それは、會堂の隣りに在つて、便利にできてゐた。人々はユストを稱して、「神を敬ふ者」と云つてゐたことが使徒行傳十八の七によつて分る。會堂司のクリスポも、元來心の廣い人だつたので、この新らしい仲間に加はつた。コリント前書一の十四に、パウロは、この人の事を記して、彼自ら洗禮を授けた、極く少數の人々の中の一人であるといつてゐる。

一年有半の間、コリントに於けるパウロの仕事は順調に成功した。二十萬人の自由市民と、多數の奴隸をもつコリントの市は、大都會通有のあらゆる惡徳に満ちてゐた。實際、その時代の判斷に従つても、市の道德の標準は特に低く「コリント人の如く住む」といふ事は、ア



リストファネスの時代より、ギリシャ語でも、ラテン語でも等しく「不倫」を表はす意味に用ひられた。又、ギリシャ文化獨特のデモクラチックな精神は、不斷に移動する市の住民の間に極端にまで浸みこんだ。同時に、西方、ローマよりは、そこに流行しつつあつた「劍士の技」——古ローマに於いて、公衆の觀覽に供せんがために劍又はその他の武器を用ふる様練られ、觀衆の前で眞劍試合をして、生命のやりとりをする、殘酷な見世物也——その他の惡風流れ入り、東方からは、ギリシャのアフロダイト崇拜を惡くもぢつた「アスタート崇拜」の不純な東洋的迷信が這入りこんで來た。泥酔、酒宴は普通の事で、パウロがローマ書第一章に、神を知らざる人類の有様を書いたのは實にこのコリントの實狀であつた。「もろもろの不義、惡、慳貪、惡意にてみつる者……また嫉妬、殺意、紛争、詭計、惡念の溢るる者、……すべての惡を企つる者……違約する者」など實に言語に絶えた有様であつた。

コリント人の實生活と、パウロの示す高尚なる新理想との對照は、雲泥の差があつた。パウロの指導の下に、之らの人々のうちの特志のものは、忙がほしい船積みや激しい労働の隙を求めては屢々相會して、高尚な生活に近づかんと、互に勵まし合つた。パウロは彼らを戒

しめて、その肉體は、とりも直さず神の靈を宿す宮である事を教へた。この意味はある多くの人々に誤解されて、一種恍惚の状態になつて我を忘れるとか、又はギリシャの御神託の様に、一種妙な叫び聲を發する様になる事か、それらが、み靈の最高の表現である様に考へられた。かゝる誤解もあつたが、パウロの倦む事を知らぬ指導によつて、信者の一團は、多く得る所あり、又未だ信者にならぬ者も、キリスト教の教へに従つて生活する様になつたであらうといふ事はたしかであつた。パウロは絶えず、肉についてはキリストと共に死し、神との靈交によつて新生活に入りキリストと共に甦み返らむ事を説いた。コリント前書第十三章の同胞の愛を説く偉大なる詩こそは、パウロが絶えずコリント人の前に示したる最高の理想の到達點を暗示するものである。「愛は寛容にして慈悲あり……非禮を行はず、己の利を求めず……人の惡を念はず、不義を喜ばず……おほよそ事忍び、おほよそ事望む。」と。

パウロは最初、多分コリントに之程長く留まらうとは考へなかつたかも知れない（テサロニケ前書三の十一、二の十八参照）。然し仕事の困難さと、責任の重さとがたうとう、彼の滞在を長くして了つた。彼はその努力を途中で廢棄する男ではなかつた。何故ならば、嘗て



ダマスコ途上で見た主が、夜再び幻の中に表はれて彼を勵まして「おそるな、我なんぢと偕にあり」と言はれるのを耳にしたから、一年と六ヶ月の終りに、それはたしか、新地方總督着任の時であつた、猶太人の一味は、今こそ、パウロの運動を止めるために、斷乎たる方策をめぐらすに絶好の時であると考へた。この時すでにパウロの運動は、猶太教の會堂にとつては畏るべき敵手となりつつあつたらしい。

然しながら、新總督は、有名なストイク學派の哲學者セネカの兄弟であつた。又前後の勢は、パウロがルステラで遭難した時分とは、まるで違つてゐた。第一、彼はすでに猶太人の壓迫の圏外にまで旅して來てゐるので、ここでは却つて見事な勝利を得た。ガリオは反パウロ派の訴訟をとり上げなかつた。その上、猶太人らが頑強にその主張を枉げなかつたので、ガリオは彼らを審判の座より追ひ出して了つた。更に、熱狂せる猶太人らがパウロ迫害の頭であつたソステネを捕へて、ガリオの面前で、早い頃パウロがビリビでやられた様に、打ち叩いた時も、素知らぬ風して、かゝる宗教上の嫉妬には全く侮蔑の意を表した。この、會堂司ソステネは狭量な信仰をもつ猶太教徒で、さきに司のクリスポが悔い改めてパウロの門に

走つた後に据ゑられた男であつた。

ガリオの地方總督時代の日付を定める事は近世考古學上、興味ある問題である。之まで、パウロが旅行したうちに、ロマ史に關聯して、彼の生涯の出來事に正確な日付を與ふるに足る様な記録は一つもない。ガリオの地方總督赴任についてさへ、ヴェント氏は一八九九年、マイヤー・コムメンタリーの改版にガリオが地方總督であつたといふ證據は使徒行傳以外にはなしと云つてゐる。一九〇八年ダイスマン教授は、その著 *"Light from the Ancient East"* に書して、ガリオの任に在つた期限を定む可き碑銘はないと曰ふ。所が一九〇八年四月、パレスチナ發掘研究會報告 (*Palestine Exploratum Fund*) によれば、ギリシヤのデルファイ附近で四個の石の破片が発見された記事を載せてゐる。之ら四個(その中、一つはすでに一八九五年に發表された)を合してみると、クロデオ時代の皇帝の書簡の一部分であることが分つた。第一の片には、クロデオの名と、稱號があり、第二の片には、クロデオ在世中、皇帝として第二十六回目の祝賀の辭が現はれてゐる。第三の片にはガリオの名を含み、第四の片は、地方總督といふ稱號の一部分を含んでゐる。



之らを総合して、ロマ史の事實に照して解釋を下せば、ガリオは五一年の夏より、五二年の夏まで地方總督であつた様に見える。ガリオ赴任の時より一年六ヶ月を逆に數ふれば五〇年の始めが即ちパウロがコリントに到着した日付となるのである。偶然之は、オロシウス第七章第六及び第十五節に、ヨセフアスの言を引用した所、即ちクロデオが即位九年（四九年）ロマより猶太人を全部追放したといふ記事と一致する。アクラとブリスキラは極く最近に、ロマよりコリントに来てをつた、と、ルカは使徒行傳十八の二に記してゐる。（この碑の文字と、日付について尙ほ詳細を調べたい人は Deissmann—St. Paul, Appendix II; American Journal of Theology XXI [1917], 299 の最後の章句を参照あるべし）。

### 三 テサロニケ教會に宛てし二書簡

テモテはテサロニケよりコリントに來た時、パウロが急に殘して來た信者の群の狀況を報告した。それは或る點に於いてむしろ意外のしらせであつた。パウロは兼ねて、テサロニケの信者に向つて、キリストによる新生命と、聖靈の賜物とは、彼らをして、死に打ち克たしむるものである事を教へて置いた。又、永遠の生命と、愛と兄弟の愛を主とする、來らむと

する王國が、近く地上に打ち建てらるべき事をも力強く説き聞かして置いた。自然彼らは、パウロの説く如く、やがて來らむとする新らしき國に、全部打ち寄つて樂しき生活を樂しむ得ると信じた。所が、仲間のある人々が、急に死んだので、さういふ人々は、最早來らむとする幸福を共に味ひ得ないと思つて少なからず悲嘆にくれた。多分彼らは、キリストの來臨が長びいて、誰も、その榮光に俗する事ができなくなりはいまいかと、不安な氣持をもち始めた。

コリントに於ける傳道が妨げられぬ範圍に於いて、パウロはテサロニケの信者に向つて書簡を書いた。もつと正確に云へば、彼はこの手紙を書きとらせ乍ら、感極まつて、床板の上をあちこちと歩き廻つてゐたであらう。パウロは神經質の人で、平常速記専門の人によつて、その手紙を書き取らせたものである。恐らくこの手紙は、パウロがギリシヤ人教會に宛てた最初のましまつた手紙であつたらしい。彼は最上級の言葉を使つて、ギリシヤの市に於ける福音の成功がどれ丈深い感銘を彼に與へたかを記してゐる。之はガラテヤ書を除く他の「パウロの書簡」の冒頭に在る様な形式的の感謝の辭ではなかつた。多分パウロは、彼の福音に



應じて與へられた歓迎に、心より純な満足と驚きを経験したであらう。

まづテサロニケ前書を見ると、挨拶と、満足の旨を表はした後（一の十一）、彼は一點の私心なく、すべてをささげて、テサロニケ信者のために努力した有様を書き（二の一―十二）、再び彼らがパウロの福音に應じたことを感謝し（二の十三―十六）、必ず彼らを訪ねたい希望あることを表し（二の十七―二十）、テモテの報告により深く安心した事を記す（三の一―十）。この部分は祝福によつて終る（三の十一―十三）。手紙の後半に於いて、パウロは彼らを激勵して、益々高尚、純潔な生活を送らんことをすゝめ（四の一―十二）、特に、すでに死せる人々の復活を信じて疑ふ勿らんことを教へ（四の十三―十八）、主の來臨をみまもり且つ不斷の用意あらんことを勸む（五の一―十一）。更に進んで、一般信者としての心得を説いた後（五の十二―廿二）、祝福と、本書簡が兄弟ら一同の前に讀み聞かされんことを願つて擲筆してある（五の廿三―廿八）。

パウロはきはめて丁寧に「兄弟の愛につきては、汝らに書き送るに及ばず（四の九）」と書き送つてはゐるが、彼の書簡は、教會にとつては非常に歓迎されたであらう。彼の「死せる

者」に關する慰めの言葉は、本書第一章に引用されたバピラス文書と面白い對照である。バピラスの一書によると「私は、あなたの御息の御逝去の事を知つて、丁度私の子が亡くなつた時と同様に悲しみました。かういふ事に對しては、人間は何にもできるものではありません」と云ふ。かういふ悲觀的な慰めの手紙が、テサロニケ人の間に取り交はされてゐる時に、パウロは復活の榮光溢るゝ希望の福音を説き、信者達には、「望みなき他の人々の如く嘆く勿れ」と戒しめてゐる。

第二の書簡は、第一のものより二、三ヶ月おくれて書き送られた。二書共に大凡そ、紀元五〇年以内のものであらう。第一の手紙の影響は、パウロが豫期したよりも強かつたために、却つてそのために色々な矛盾と誤解とを生じた。少くとも或る部分の人々は、極端に走つて、神の國が間近に迫つてゐるので、働いたり、生活費を稼ぐ必要はないと定めて了つた。彼らは信者達の守る「晚餐」で十分に飲食物を得る事が出来、又一般に教會内の兄弟たちの情けによつて僅かに生命をつないだ（テサロニケ後書三の十一）。

そこで第二書に於いてパウロは、まづ、色々な迫害の中にありつつも尙彼らの信仰と愛の



進歩せし事を謝し(一の十一十二)、直ちに本文の主なる問題に移る。信者達は「主の日すでに來れり」と思つてはならぬ。その時まで、ある一定の時間が経たねばならぬ(二の一十二)。そこで一同、堅く信仰に立ちて動搖せぬやうに戒しめ(二の十三十七)、又彼らのために數語の祈りを捧げた後(三の一五)、パウロは彼らに告げて、不秩序の行爲に我を忘れることなく、靜かに各々の仕事にいそしむ様忠告する(三の六一十五)。結末として、彼は自署した彼の心よりの祝福と祝禱とを、心をとめて讀む様に注意を促してゐる(三の十六一十八)。

この後書が、確かにパウロの書簡であるか、どうかは、時々、問題とされる。前書に、キリスト再臨の近づける事を高調してあるにも拘はらず(四の十五十七)、(五の二)、後書には、主の再臨の前にはある時限の存在する事を力強く述べてある(二の二、三)。そこで、之はパウロの死後、再臨の期日について、パウロの誤まつた考へを訂して彼の評判を悪くならぬ様にし、且つは一般の誤りをも訂正しようと試みたとも推せられる。然し又、之は、パウロが自身、間違つた意見や、正しくない態度を訂正したので、その點に於いて、後の筆者

と同様自己の誤りに對しては嚴格であつたともいふ。この議論を始め、尙他にも多くの議論があるが、どれも、この第二書がパウロの筆でないといふ十分の證據には足りない。

この二つの書簡は、パウロが前書五の廿六に願つた通り、教會のすべての兄弟らの前で讀まれた、その後、教會の會計係りか、他の役員の手に渡され、その人は之を安全に保存する爲に、帳簿や、領收書など一所に、藏ひ込まれたが、パウロの死後、彼の書き物を集めようと各教會を巡つた人に發見されて、更に寫しとられたものである。

#### 四 エペソの短期訪問

上記の如く、コリントに於ける猶太人の示威運動が、紀元五一年の夏、ガリオの地方總督來任後、直ちに行はれたものとすれば、パウロがコリントを去つて東方に歸つたのは、同じ年の秋の始めであつたと推定される。エペソを暫くの間でも訪問したといふ事は、後に、ここに三ヶ年の間も留まつて傳道した事と思ひ合せると、頗る意義深いものが在る。パウロは、途すがら、一寸、立ち寄つた丈ではあつたが、エペソの人々は、彼を歓迎し、尙停つて道を説かん事を勧めた。



アジヤの都會では最大の市、而もパウロは未だその足を踏み入れないエベソに、彼は福音宣傳の大いなる前途を描きつつ、今は只故郷へ向ふ旅程を急いだ。コリントでパウロを宿した、アクラとプリスキラの二人は、彼と共にエベソまで来たが、ここで、パウロは後事を二人に托して、出發する事となつた。ルカはたゞの二句を以て、パウロの東方への旅と、再び傳道に戻つた旅の物語りを、片付けてゐる。エルサレムの港カイザリヤに上陸して、パウロは、母教會に敬意を表する爲に、エルサレムに赴いた。多分、暇を割いては姉妹の家庭を訪れたり、舊友や、信者達に、彼の經て來た傳道旅行の概略を語り聞かせたりしたのであらう。

やがて再びコリントに立ち歸つて、ここに第二回異邦傳道の旅程を完全に終つた。この間の距離は優に二千哩を超えた。四九年の春アンテオケを出で、五一年の終り頃の冬か、翌年の始め頃、再びコリントを訪ねるまで殆ど三年の日子がこの旅行に費やされた。そしてキリスト教傳道に大切なる三大中心地、ビリビ、テサロニケ、コリントを選定した。

#### 五 ガラテヤ教會に宛てし書簡

前章に述べし如く、この書簡を受けとつた人々は、パウロが第一回傳道の折に、ガラテヤ

地方の、ロマ領の南部一帯に建設した各、教會の信者達であつたと見るのが至當の様である。之らの教會、即ちデルベ、ルステラ、イコニオム、ビシデヤのアンテオケは、第二回傳道旅行の折、パウロは再び訪れてその信仰を固うしたのである。この書簡の四の十三に、彼は、前回に説教した事を語つてゐる。それによつて見れば、パウロは、前後二回丈、此地方の信者を訪れた事が判る。そしてこの二つの訪問の間には、かなりの時があつた事も、彼の説明によつて判る。従つて「ガラテヤ書」は、彼が第三回の訪問の少し以前に書かれたもので、前後の関係より察すれば、本書は五二年頃アンテオケより發せられたものであらう。

本書簡は、割禮の問題に就いて、之ら諸教會の間に起つた一大危機を救はねばならぬ場合に、筆とられた。多分之はパウロが、自分で造り上げた教會の内に起つた最大の危機であつたであらう。エルサレムで敗れた律法主義の猶太系信者共は、このガラテヤ地方にまでも、その力を及ぼした。彼らは死物狂ひで、前に第六章に掲げたエルサレム會議の論争點を捉へては、人々の心を騒がしつゝあつた。

之より先、ガラテヤ地方一帯の信者らは、パウロの教へに基づいて、律法に囚れぬ、自由



の福音を信奉してゐたのである。パウロは、本書簡五の七に「汝らはよく來れり」といつて賞めてゐる位である。然し肝心の指導者が居なくなれば、信仰を失ひ易きは明白である。この機に乗じて、律法派はあらゆる智力をしぼつた。彼らは、新たな信仰の成功を知つてをつた。そこでこの仲間をば、律法派の榮の爲に、會堂に併合し様と決心した。彼らのいふ所によれば、パウロの自由福音は、單に猶太教固有の教に背くのみならず、明かに一般の道德の標準を低下するものなりとした。

パウロは、彼の新しい信者達が、律法派の云ふ所に惑はされ、折角苦心して説いた彼の福音より、離れ去りつつある事を聞いて、形勢急なるものある事を悟つた。彼は律法派の者ども、エルサレム會議の後でも尙、彼の事業に妨害を試みつゝありと知るや義憤に燃えてこの書簡を書いた。その鋭い語氣と、力づよい文意の効果とは、パウロ自身の他の何れの書簡よりも又、他の何人の書簡にも勝つたものであつた。その文言のある箇所は、今日われらの了解できね程適切にガラテヤ人のみに限られた點はあれども、誰でも、この書を読む者は、紙背にひそむ、パウロの強烈な性格を感じない人はあるまい。それは實に、大なる矛盾を訂

さんとする、純なる證あかしであり、争鬭の間より響く正義の聲であつた。

始めの二章は、他に得られぬパウロ自傳の一片である。勿論パウロは、自身の事について、書きたい望みは少しもなかつたであらう。然し律法派の人々が、パウロの使徒としての資格を疑ひ、ガラテヤ人に向つて、たゞ十二使徒のみがイエスと共に住ひ、従つて眞の福音を知る者であつて、パウロの福音は又聞きに過ぎない。もし十二使徒の教へと異なる所あらば、パウロの教へは全然間違ひであると説いて廻つた。そこでパウロの答は、生涯のうちに起つた顯著なる宗教經驗の事實をあげて、彼の説く福音の根源を明かにする必要があつた。彼の悔い改めの經驗及びその前後の事情（第一章）、エルサレム會議に於ける彼れ獨自の立場（二の十一—十）、ペテロを叱責した事實（二の十一—廿一）、之らすべては、パウロの福音が、人々より授けられたものでなくして、直接、單獨、キリスト直傳の權威あるものなることを表はしてゐる。

第三章及び第四章に於いて、彼の筆鋒は、個人的の問題より「福音そのもの」に關する問題に轉ずる。律法派は、その論點を、創世記十七の七及び他の章句中、神は、來らむとする



祝福をば、たゞアブラハム及びその子孫にのみ制限し給ふといふ所に置いた。然し之に對するパウロの答は「アブラハムは神を信せり」といふのであつた。之は猶太教の聖典が、明白に教へるやうに彼の「義」であつた。換言すれば、神に對して、アブラハムの様な信仰の態度を持つる人は、皆、聖書に云ふ眞の「アブラハムの子ら」であつて決して割禮を受けたもの（即ち猶太人のみ）に限つた事はない。創世記そのものが、この事に於いて明瞭な説明を與へてゐる。乃ち「天下の民、汝によりて祝福を受けん」と。この約束は、明かに全世界に向つて有意義である（三の一―九）。更に律法に従へば、すべての人は、律法通りに生活しなければ呪はれてゐる、従つて聖書は「正しき者は信仰によつて生く」といふ（三の十一―十四）。又アブラハムとの契約は決して律法をぞだいにしてゐない證據は、律法なるものが、アブラハムの死後、四百三十年迄は存在しなかつた事實（三の十五―廿二）によつてわかるし、その上、この契約が律法によつて置き換へられたなぞの事はまるでなかつた。

律法派の人々は、すぐ次にパウロが述べた「律法は、たゞ、小學生のために、監督、教師の役をするだけで、發育しない者を導く役に立つのみ」であるといふ言葉を聞いたならば、

皮肉な刺を感じたであらう。要するに割禮は決して人間の宗教を表はす、成人した方法ではない。今や信仰に進んだ故に「われらは最早教師の下にある要」はなかつた。「われらは成人」したので最早「子供」ではなくして「神の子」となつた（三の廿三―四の十一）。彼は更に人々の忠實な信仰心を喚び起して、決して狡猾な律法派の教師どものために、かき亂されぬ様注意した。ルステラで、神々の使マキユリーとして、みんなに拜まれた出來事を思ひ起したかパウロは、彼らに迎へられた時「神の使」として尊んだあの感激に満ちた言葉を、一同に想ひ起さしめた（四の十二―廿）。そして、書簡の上半を、サラとハガルの喩へ話によつて終る（四の廿一―卅一）。

終りの二章に於いて、パウロは信者達が「福音の自由」を堅く信じ（五の一―十二）、それを束縛に戻すことなく、御靈の果實なる愛、喜悅、忠信、節制を求め（五の十三―廿六）、善き行を爲すことに倦まざらんことを奨める（六の一―十）。更に、手づから物した大文字の一項を加へ（七の十一―十八）、律法派に對して最後の警告とし、彼の身に佩びたるイエスの印し（多分ルステラで石にて打たれた時受けし創痕ならむ）に關した言葉を以て全書簡を結ん



である。

本書の内容は、實にキリスト信者の、自由を説きキリスト教史上に一新紀元を齎したものである、パウロは新らしい、断々乎たる勇氣を以て、ルステラや同地方の町々の信者が、人間らしい誤りに陥り易きを見て「自由」こそは宗教上尤も重要な要素なる事を教へ、ただ成文律に従ふ事は未だ低級の信仰状態で、キリストの信仰に生くる者は、命令や、禁止などの形式的律法より遙かに超越してゐる事を説き聞かした。彼は、自らの深い経験と、信念とより、之らのことを語りつつあつたのである。ルーテルが「キリスト教の自由」といふ論文に「よき行爲は善き人を造らぬが、善き人は善き行爲をなす」といつた時と、場合こそ違へ、類似した眞理を表はしてゐる。パウロの偉大なる説教は第一に「御靈」であり、次は「御靈の果實」であつた。

#### 参 考 書

1. Ramsay, St. Paul the Traveller, pp. 237-61.

2. Kent Work and Teachings of the Apostles, pp. 125-32; 135-42; 108-9.
3. Gilbert, Student's Life of Paul, pp. 125-41.
4. Conybeare and Howson, Life and Epistles of St. Paul, chaps. X-XIII.
5. Farrar, Life and Work of St. Paul, pp. chaps. XXVII, XXVIII.
6. Bible for Home and School, "Acts", pp. 167-76.
7. Jones, St. Paul the Orator, pp. 80-106.
8. McGiffert, A History of Christianity in the Apostolic Age, pp. 256-73; also pp. 217-30.
9. Bacon, Story of St. Paul, pp. 163-73; 236-65.
10. Burton, Handbook of the Life of the Apostle Paul, pp. 45-57.
11. Goodspeed, Story of the New Testament pp. 1-13.
12. Moffat, Introduction to the New Testament, pp. 64-107.



## 第九章 エベソ

### 一 エベソ到着

使徒行傳十八の廿三、同十九の一。

### 二 「洗禮のヨハネ」の弟子達

使徒行傳十八の廿四―十九の七。

### 三 三ヶ年の活動

使徒行傳十九の八一―廿六、同廿の十八―三五。

コリント前書四の十一―十三。

### 四 エベソ出立

使徒行傳十九の廿一―廿の一。コリント前書十五の卅二。同後書一の八、九。



## 一 エベンソ到着

多分、ガラテヤの諸教會に手紙を出して間もない頃であつたらう、パウロはアンテオケを出て、第三回目の異邦傳道の旅に上つた。途すがら、きつとタルソの家にと晩位は泊つたであらう。それから再びガラテヤ地方を横ぎつて旅路を急いだ。勿論フルギヤの町々、イコニオムやアンテオケにも通りすがりに寄つて行つた事が確かである（使徒行傳十八の廿三）。此の度は聖靈によつて、アジャに道を説く事を禁せられる事もなく、パウロはその地方の中心に、まつしぐらに進み入つた。

エベンソの市は、最大にして、尤も富み、又尤も勢力ある都會で、こゝにパウロは教會の基を据ゑた。此市に於けるパウロの成功は、彼の激しい努力の最高點であつた。エベンソを首府とする、アジャの地方は、ロマ帝國內でも尤も富める地方の一つであつた。パウロの時代より六百年前には、クロススは、サルデイスに彼の莫大な財を積み貯へた。スミルナ、ミレトスは又、文化、商業上、重要な中心地であつた。

エベンソは、その優秀なる點を、市の位置する自然の利に負ふ所少なからぬものがあつた。



ミーンダ河はその名の示す如く紆餘曲折して、海に達する數哩の所で急に水路を轉じ、南方に向ひ、海岸と並行に數哩流れてゐる。その結果、内地や東方よりミーンダ谿谷に沿うて下つて來る豊富な商取引には、河口のミレトス港まで下るよりも、小さい峠を越えて海岸に在るエペンに出た方が餘程容易で便利な事が分る。今日の鐵道もミーンダ河に沿うて、敷設されてあるがその基點をエペンに置いてゐる。エペン自身又カイスタ河といふ相當に舟楫の便を有する河に位してゐるので、二重の利便を具へてゐたわけである。

市はアテンスと同じく、極めて美的に造られ、美しく舗かれた道路、大きい公けの建築物など數多く在つた。小アジア最大の劇場は市の中央に位し、その廢墟は今日、一番完全に保存されてゐるもの一つになつてゐる。その客席は、一小丘の側面を一部切り割つて、列をなして設けられた。建物は西に面して、一哩程離れた港を廣々と見渡してゐた。この劇場より港に達する一直線上に、美しい並樹で飾られた大通りが走つてゐた。そしてこの大通りの兩側に、講堂、圖書館、や各種の小神殿が立ち並び、堂々たる建築ぶりは、今日も尙廢墟のまま、この舗道の兩側に残つてゐる。パウロが後に使用を許された、ツラノの講堂といふのは、きつとこの路に沿うて建てられてあつたに違ひない。

劇場の前に、今一つ、南北に走る大通りが在つた。この劇場前の市場で、二つの大通りが相合する廣場で、反パウロ示威運動の群集が集つたのである。この第二の大通りの北寄りに、ギリシヤ式競技場が設けられ、その大きさは、端より端まで八分の一哩あり六千人を容るるに足りたと云ふ。ここか或は劇場内の土俵の上で、囚人共は野獸と戦はされた。その事をパウロは比喩的に云つて、彼はエペンで戦ふべく餘儀なくされたと記してゐる（コリント前書十五の卅二）。

デイアナの神殿は、市の商業中心地よりは、離れて設けられた。その境内は、古へより神聖とされた。その御神託は殆ど、ギリシヤのデルファイの御神託同様に有名であつた。この古への、神聖なる場所に打ら建てられた神殿は、結構、壯麗人目を驚ろかすものがあつたので、世界七不思議の一つとせられてをつた。その建物は、パウロの時には少くとも五百年の歲月を経たものであつた。それはギリシヤ人によつて建てられ、アルテミスの女神に献げられたもので、後之はロマのデイアナと同一の神と見做された。階段により兩側より登らるる



神殿の床は長さ三百五十呎。幅百五十呎もあつた。圓柱はこの壇より更に六十呎の高さに達し、遙かの海上まで見えた。

この古代ギリシヤ禮拜を中心として、色々の傳説が傳へられてゐる。昔し神殿に侍いた、尼僧の話は多分ギリシヤ神話にある、アマゾンの女らの話の起原に關聯したものであらう。宮に在つた女神の像は、パウロの時代には、直接天より降れるものと言はれてゐた（使徒行傳十九の卅五）。この傳説に従へば、之は女神の唯一完全なる似顔であるといふ。そこで、禮拜や、御神託を伺ひに集ひ來る數千の巡禮達は争つて、聖像の寫しを持ち歸つた。一番貧乏な者は土燒の像を、少し金まわりのいゝ人々は大理石像、すつと金持ちの連中は銀の像を買ひ求めたであらう。デメトリオは、この金持ちの階級を主なる顧客としてゐたものと見える。

神殿は、神聖にして犯すべからざるものとしてあつたが爲に、禮拜以外にも、色々な目的の下に使用せられた。金や寶物を多く所持した者は、この神殿を以て、エベソ中で一番安全な場所とした、そしてその財貨をこゝに預けて保管を托した。パウロの時代には、神殿は全

く、安全貯藏庫となつてゐた。その上、境内は不可侵とされてゐたので、亡命者や逃走者などは、貴族も平民も、こゝを以て安全なる避難所としてをつた。此點について神殿の評判は遠く、廣く傳へられてゐた。されば、コロサイなる主人ビレモンの許より逃れて、後悔い改めて、パウロによつて送り返された奴隷のオネシモが一時、この中に逃げ込んだのも、いはれある事であつた。エベソの生活は、色々な神殿の活動によつて、多方面に亘つて影響される事が多かつたので——巡禮、旅客、逃亡人、僧侶、預人、下僕、案内人、像造り、銀行家——人呼んで、天より降りし像の宮守と稱した（使徒行傳十九の卅五）。

## 二 「洗禮のヨハネ」の弟子達

ルカの語る所によれば、パウロがエベソについて、最初の活動は、バプテスマのヨハネの弟子達の間で在つた。この宗派は、多分パウロは以前の旅にも屢々出會つたであらうが、エベソでは特に勢力があつたらしい。弟子達は、ヨハネを以て、信仰の開祖であると宣言した。勿論イエスとその教へのある部分には、敬意を拂つたが、恐らく彼らは、イエスを以てヨハネの主なる弟子であり、解釋者である位に言つたものらしい。従つて、彼らは、ヨハネをイ



エスよりも大なりとして、その説教を中心として彼らの宗教を建設した。

吾らの有する知識に由れば、ヨハネの説教は、將に猶太人の上に來らんとする、審判を宣した丈である。彼の主要なる警告は、單に猶太人にのみ與へられたが、前後の關係よりして、他の外國人も一樣に、彼の描く審判の繪の中に含まれてゐたと見る事もできる。この來らんとする審判を見て、ヨハネは悔い改めを勧めた。何となれば悔い改めは、悔い改めぬ者の上に来るべき刑罰を救ふ唯一の便りであつた。悔い改めの後、彼は倫理生活の清淨を命じた。

これは、必ずや、ヨハネの弟子らの使命であつたに違ひない。そして、吾らの史料の許す範圍に於いて、彼らはこの教へをば主として、否、専ら猶太人にのみ説きつゝあつたと考へられる。この來らんとする審判の教へを信ずるといふことは、必ずしもキリスト教信者の間に、「み靈の賜物」として知られし熱狂的な、恍惚となる様な経験を伴ふものではなかつたと想像せられる。彼らは又、イエスのメシヤである事を信じなかつたので、勿論イエスが救ひ主として天より歸らるゝ事をも信じなかつた。ヨハネ福音書に、繰り返し云ふ、バプテスマのヨハネはキリストに非ずといふ所は、弟子達がヨハネをキリストと見做してゐたといふ證

據にならぬこともない。然し、ヨハネの弟子らは「黙示」を信じて、ヨハネの再來を信じたと考へられる證據はどこにもない。彼らは、イエスにせよ、ヨハネにせよ、再來の信仰は少しも有たなかつた。その運動は、明らかに預言的、倫理的で、キリスト教運動の有した熱情と、「黙示」の信仰は全然認められない。

此の「バプテスマのヨハネ」宣傳運動は初代キリスト教にとつては中々悔り難い競争者の一つで在つた。双方共相手の預言者たる事を認めたが、互に己れの開祖を以て優れりと主張した。ヨハネ福音書は、パウロの死後、長い後に書かれたが、いつもバプテスマのヨハネの事を語る時には、特に注意して彼はキリストに非ず、預言者にして、イエスに劣り却つてイエスの優れる事を證した人であるといふ事を述べてゐない場合はない。使徒行傳物語、ヨハネ福音書の更らに委しい説明、後にできた他の文献を併せて見ると皆一樣に、ヨハネの宗派が、極く初めよりキリスト教と相並んで行はれ少くとも數世紀間存在したといふ事を證明してゐる。

中にもアポロはエペソに於ける、ヨハネ宗派の主なる宣傳者の一人であつた。彼は當時、



學問の大中心地であるアレキザンドリヤで教育された人だけに雄辯家で、自由自在に舊約聖書を引いては彼の討論に一層有力さを加ふる事が可能た。プリスキラとアクラ——彼女の名は、恰もこの一家の指導者である様に、よく夫の名より先に呼ばれる——は、パウロの不在中、マボロと親しくなり、遂に彼をキリスト教の立場に改宗せしめた。

恰もこの二人の友の仕事を完成するかの如く、パウロはエベンに到着するや否や、ヨハネの弟子達の間に行き、できる丈多く彼らを悔い改めに導かんとした。多分パウロは和らかな、宥める様な調子で、ヨハネの悔い改めの洗禮は消極的には好いが、イエスの名により聖靈の賜物を受くる洗禮の積極的な力を缺いてゐる事を説き聞かせたであらう。彼は十二名の者をキリスト信者の仲間に入れ来る事ができた。然しその宗派は前記の如く、強固な、活動的な團體として残存した。

この様に、パウロはエベンに於いても、他の到る所に見し如く、多数の競争者と競争の裡に努力せねばならなかつた。古くより存在する神話や、偶像崇拜は、強く堡壘を築いてその中に在つた。ダイヤナの神殿は世界七不思議の一であつた。神話の信仰の衰へた者共に向つ

ては、猶太教は、もつと靈的にして、眞に倫理的な禮拜を教へた。もし猶太教が、哲學的傾向のある人々の要求する、ある神秘的要素を缺ぐ所には、色々の密教が、現世に於いて神との交はりを試くのみならず、未來に亘る靈魂不滅を説いた。特にパウロの傳道と密接なる競争の立場に在つたのは、二つの改革された猶太教の宗派で、一つは極めて微かながらキリスト教化されたパリサイ宗で、律法的キリスト教とも謂ふ可く、今一つは、前記ヨハネの説教に従ふ一派であつた。

### 三 三ヶ年の活動

エベンは、パウロにとつて最大の機會で在り、又最大の効果を擧げた。使徒行傳廿の卅一に、偶然表はれた引照により、彼の滯留が「三ヶ年」であつた事がわかる。尤も之は、單にパウロが、ここに二年以上留つたといふ丈かも知れない。之は、吾らが記録を有する限りに於いては、パウロが一番長く留つたところである。バプテスマのヨハネの弟子達の間、最初の傳道をした後、三ヶ月は猶太人會堂に費やし、あとの二年間はツラノの講堂で毎日講義した。



パウロは、使徒行傳十九の十に言ふ通りに、エペソを以て、福音を、全アジャ中に擴める中心たらしめた。又ロマ書十六の五に「わが愛するエバネト、彼はアジャにて結べるキリストの初の實なり」と書いて、アジャで得たる第一の悔改者の名を不朽ならしめた。この男はきつとエペソの住民であつたらしい。然しパウロはエペソを以て唯、地方の中心であると考へた丈である。福音はミーンダ河の谷を上つて、コロサイまでも達した。そこではビレモンが信者と成り、後日、彼はパウロより個人的の書簡をさへ受け取るの光榮に浴した。

コロサイに赴いて教會をうち建てた、同勞者エバフラスの名は、コロサイ書一の六、七にパウロが掲げてゐる。多分黙示録の七書簡が宛てられた小アジャの七教會は全部、この時、パウロ及びその支持者達によつて創められたものであらう。コリントの船乗りや、商人達が、遠くの國々に、福音を運んで行つた様に、エペソでは、デイヤナの神殿に集つて來る無數の巡禮達が、福音の種子を運んではアジャの町々や附近の地方に歸り、宣傳の基を開いた。

會堂に三ヶ月を費した後、パウロの赴いた、ツラノの講堂は、多分午前中、哲學や科學の教育のために用ひられたものであつたらしい。この地方の暑い陽氣では、早く仕事が始めら

れて、一日の仕事の重荷は午前十一時迄には終るのが例であつた。そこでパウロにとつては、午後の比較的、閑散な時をば、容易に彼の説教なり、講義に用ふる事のできたのである。このプログラムは、同時にパウロをして、手前中、アクラ、プリスキラと一所に天幕製造の商賣に従事する時を興へた。恐らく、この學校の頭であつたツラノはパウロの福音に好意を感じて、講堂の使用を許し、彼の傳道を援助したものでらしい。

パウロの傳道の大なる部分は又、日没より、夜にかけて、彼が自ら一軒々々個人訪問をした折になされた。エペソの長老達に興へた書簡中彼は、特に、この事に主なる注意を拂ふ様に云つてゐる。「謙遜の限りをつくして主に事へ……益となることは何くれとなく憚らずして告げ……家より家に、ユダヤ人にもギリシヤ人にも共に證し……夜も晝も休まず涙をもて汝らおの／＼を訓戒せり……この手はわが必要に供へ、すべての事に於いて汝らもかく働きて、弱きを助けんために例を示せり……（使徒行傳廿の十八―廿五）」と。

かくてパウロは民衆の友として知らるる様になり、惱める者、親しき者に別れて悲しめる者共にキリストの苦難と、その復活の悦びの榮光を語りきかせて之を慰めた。彼は、屢々、



自ら激しい労働によつて得た金をも、貧乏で不幸の者に恵んでやり、又同様に病に罹れる者、精神沮喪せる者などに、力と勇氣を與へた。惱める者があつても忙しくして訪れる時のない折には、彼の用ふる襟巻とか半巾とか、パウロの權威を表はすものとせられたものを送れば、その悩みが取り去られた。それ程彼は一般の人々に慕はれ、或時は殆ど偶像視されてゐた。

スケワの七人の子供の話は、之ら諸國遍歴の猶太人呪文師らが、宗教的に祖先の道を捨てた許りでなく、地理的にも一所不住のさすらひ人であつた事を語る。彼らは、魔術と稱する悪法を用ひ、一定の呪文を誦しては悪靈を呼び寄せ、目に見えぬと稱する病を治し、祝福を齎らす力ある神々の名を呼んで、それによつて諸の病苦を癒すなど、人々をたぶらかして莫大の金を儲けたものらしい。最近發見されたバビラス文書の中には之ら呪文の一定の公式みたやうなものを、澤山に見る事ができる。その中には、形式が特に猶太式のものも數多くある。猶太式の呪文中左記の様なもの、丁度使徒行傳十九の十三の記述に符合する様である。それは悪靈を追ひ出す爲にイエスの名を魔法の呪文として用ひたものである。

「悪魔を追ひ出だす有名なる呪文。呼出の祈禱は、憑かれたる者の頭上にて、發言せらる

べき事、彼の前にオリヴの枝を置き、背後に立ちてかく呼ばはるべし「尊き哉、アブラハムの靈、尊き哉イサクの靈、尊き哉ヤコブの靈、聖なる者、み靈なるキリスト・イエスよ、……此の男より、サタンの汚れし悪魔出でさりて、汝の前に逃れ去るまで、悪鬼を追ひ出だし玉へ、オ、悪鬼よ、汝、如何なるものなるにせよ。我サバルバルバテオツ、サバルバルバテウツ、サバルバルバテイオネツ、サバルバルバファイ 神により汝に命ず。出でよ悪鬼、汝惟なるにせよ、此の男何某より即刻、即刻離れよ。今！、出でよ悪鬼、我汝を解く能はざる鑽石の鎖をもつて縛り、黒き渾沌の裡に投じて、全き破滅に歸せしめん」

[Milligan, Greek Papyri, No. 47]

漂泊の猶太人、少くともその中の二人は、彼らが尤も新らしい神の名を含む最新式の呪文を唱へた所、意外な結果を惹き起した。二人が呪文を試みた所の男は、多分その前にパウロの事を聞き、パウロの精神や同情心について多少の理解を有つてゐた者らしい。パウロの利己心を濕へぬ人助けの精神と、之ら呪文師らの金儲け主義との比較、更にパウロが説明したであらう偉大なる醫者の話と、之ら呪文師らの單調なる魔法の吟誦との對照は、この悪靈



に憑かれたる男を怒らして了つた。彼がこれらの呪文師を打ち拉いで追ひ逃したといふ話はそれからそれへと傳へられて、キリスト信者の仲間に行き、次いで猶太教の會堂に、やがて市内のギリシヤ人の間に擴がつて行つた。

魔術書類の焼却が、その結果であつた。ルカは使徒行傳十九の十八にある、キリスト信者は信者でありながら、之ら魔術の呪文を用ひつつあつた事を記してゐる。他の多くの人々は、此事件によつて全く悔い改め、彼らの魔術書を持つて來た。更に他の人々にして、特にキリスト教悔い改めの經驗を有しない者までも、一般に、魔法の力に信仰を失つてしまつた。銀五萬、約十萬弗あつたならば、さういふ書物や巻物數千を求めた事ができたであらう。それ丈の書物が、衆人の前で焼かれた時は、そのお祝ひは決して小さなものではなかつたに違ひない。之は魔術にとつては、ピリビの呪文師の一少女が悔い改めた事よりも遙かに大いなる打撃であつた。ピリビと同様、エペソに於いても、パウロの蒙むつた最大の迫害は、一般民衆の、宗教心を利用して、私利をむさばらんとする輩の手によつて成された。

多分ルカはエペソでは、パウロと一所にゐなかつたものらしく彼の日記の引用は、次の章

まで始められてゐない。彼は、パウロの成功については語る所多いが、パウロの遭つた困苦については云ふ所が少ない。彼がどんな苦しみに堪へたかを知る爲には、彼自ら書いた書簡に行かねばならぬ。エペソに在る時彼はコリント教會員に書を送り次の様に云つてゐる「それは活動のために大いなる門、わが前に開け、また逆ふ者も多ければなり」と（コリント前書十六の九）。同書十五の卅二によれば彼は「エペソにて獸と闘ひたり」といふ。エペソを出でて間もなく、彼はロマ書十六の四にアクラとブリスキラがパウロのために彼らの生命を堵したと記し、それより三句目には、「彼と共に囚人」たりしアンドロニコとユニアスの事も記してゐる。

「聖パウロの獄舎」は今日、エペソに残る廢墟中尤も有名なものの一つである。一體パウロは、エペソで、眞に牢屋に這入つたものであらうか。初代のキリスト教會の傳説によれば、さうであつたと云ふ。その上エペソを出た同じ年パウロはコリント後書一の一八以下に彼はアジャにて受けたる「患難」を記し「壓せらるること甚だしく、力耐へ難くして生くる望を失ひ、心のうちに死を期するに至れり。……神はかかる死より我らを救ひ給へり」と。云ふ。



同書十一の廿三には彼がたび／＼獄に入れられた事を記してゐる。ルカの記録によれば、此時まで、パウロが投獄されたのは、ただビリビで極めて短時間のものがあるのみである。してみると、エペソでは少くともパウロの獄屋入りの経験のどれか一つが嘗められたといふのは、あり得べき事である。

使徒行傳記事がパウロの成功談を語り、パウロ自身の書簡が、彼の嘗めた困苦を語る如く、この二つよりも新らしい今一つの史料が、當時のキリスト教悔改者の精神や、習慣をみる上に興味深い光りを與へる。アジャにつづくピテニヤ地方總督が、紀元百十年ロマ皇帝に向けて發した上奏書中、同地方のキリスト信者を、どの位、嚴しく迫害すべきかといふ事を尋ねたものがある。總督は、若きブリニーといふ人でこの書簡は彼の遺簡集第九十六號である。今その概要を摘記すれば、一般の形勢を述べた後彼は次の様に筆を走らせて行く、

「基督信者として、私の前に引き出だされし者共について、私は次の様な處置をとりました。まづ彼らが基督信者であるや否やを訊問し、然りと告白したる時は、更に二度若しくは三度同じ質問を繰り返し、所罰を以て脅やかします。それでも尙右信徒たる事を主張し

てきかざる時は、そのまま所刑の場所に引き行かす様命じます。彼らの告白する所の如何に拘はらず少くとも彼らの執拗さと、不屈の頑固さは當然罰せらるべきものと信じて疑ひませぬ。中に、ある者は、ロマ市民であります故に、私の判断では、ロマに送らるべきものと考へます。……密告者によつて告發せられたる者らが、彼らの犯したる罪若しくは過失として肯定せしものはすべて、彼らは一定の日、未明に集合し、神なるキリストに向ひ、讚美、應答の歌を歌ひ又、誓ひを以て彼らの團體を結ぶ丈であります。この目的は惡事を爲さんがために非ずして、反對に盗み、強盜、姦淫を行はず、又信仰を破らず、乞はれたる時に預金返還を拒まぬための由に、承知されます。之らの順序を終へた時一旦集りを散じ、再び集つて食事を共にする事を習慣としてゐます。この食事は質素にして何の害を意味せず一般に如何はしき迷信の有するものとは全然異なるものであります。」

キリストに對する不屈の忠誠、未明の集會、讚美應答の歌、不正、不純より遠ざからんと相互に繰り返す誓ひ、決して約を違へまじとする決心、相互の兄弟としての愛を表はす共同の食事、すべて之らは、パウロが此地方に齎らした新宗教の中心を指すものである。それか



ら、魔術書を焼くまでに至らしめて同じ精神が同じブリニーの書簡に、前とは少し違つた、今少しく進んだ形を以て表はれてゐる……「諸々の神殿は殆ど空となされ……神聖なるべき儀式は長い間止められ……犠牲の獸に用ふる秣は殆ど買ひ手なき有様となれり」と。

かくて、エベンは、アンテオケとロマの中間に於いて最大のキリスト教中心地となつた。後ここを中心とする七つの教會に向けて、黙示録の書簡が書かれた。ここでは又、特にパウロの薫陶を受けた信者達のためにヨハネ福音書も書かれた。この福音書には、パウロの見方、彼の好んで用ひた言葉、教訓が色々な形となつて表はれてゐる。

#### 四 エベソ 出立

パウロにとつて、結局エベソを立ち退いたが得策と思はせる様な、公けの反對が、猶太人や神殿付の僧侶からでなしに、パウロが來たためにその商賣を失ひかけた人々によつて惹起された。デメテリオは前にも云つた様に、普通よりも高價な銀細工の像や小宮を造つて商ひとした。彼は像造り同業者を煽つた。之は全く、組織立つた労働組合の悪用であつたとは蓋し至言であらう。ロマ帝國は多くの點に於いて、普通に考へられてゐるよりも遙かに近代的

であつた。碑銘や、パピラス文書によれば、常に労働組合の存在を語る許りでなく、信用組合の存在さては政府の命によつて物價の調節さへも行はれた事を語つてゐる。エベソでは、碑銘によると、特に毛織物業者組合、測量家の組合の存在した事が分る。

之ら銀細工人共が煽つて上げた群集の勢は、豫想以上に成功して、終には發頭人らも之を制御することができなくなり、「ここに會衆大いに亂れ、大方はその何のために集まりたるかを知ら」ざるに至つた（使徒行傳十九の卅二）。群集が、パウロの同業者二人を捕へたといふ事を聞いたので、パウロはその救助に行かうと決心した。彼獨特の熱心なる言葉を以て説いたならば、集民を取り鎮め得たかも知れない。然しながら、信者の人達が萬一を慮つてパウロを止めた。彼らは、もしパウロが群集の中に行つたら到底生きて還るまじと危ぶんだのである。

群集の考へによれば、アルテミス女神と神殿の主なる敵は猶太人に在りと爲したるは明白である。彼らには、パウロと他の猶太人らのする如くキリスト教信徒の猶太人と、さうでない猶太人との區別はなかつた。この運動は反猶太人示威運動であつた。猶太人アレキサンデ



ルが辯明を許されなかつたのは、むしろ幸であつた、もし彼がやつたとすれば、猶太人の明りを立てんがために、できるだけ罪をパウロとその信者の上に歸せんとしたに違ひない。二時間に亘つて群集は「おほいなる哉、エペソ人のアルテミス」を叫びつづけた。

時に書記役（或は市長ならむ）現はれ、一同の愛市心に訴へ、同時に、ロマ政府が騷擾について非常に嚴格なる所罰を與ふる事、従つてこのまま騷擾を續ければ禍を彼ら自身招きつつある事を述べて僅かに、群集を鎮めた。何れにせよ、今やパウロにとつてはこの市を出る事が得策となつた。かねてこの事は考へつつあつた事なのでパウロは早速出發を急いだ。この上留まる事は、唯信者の群に無用の迫害を齎らすに過ぎなかつたであらう。

然しながら今、町を去り行くパウロの魂は甚だしく重かつた。外見上は少くともエペソのデイヤナが勝つた様にも見えた。殆ど之と同じ頃パウロはコリントの教會が將にその開設者であるパウロをば斥けようとする危機に在るといふ悲報を受け取つた。間もなく彼がコリントに發した手紙に「キリストの苦難われらに溢る」と書いた。そは實に當時の實感をありありと表したものであつた（コリント後書一の五）。彼の働きは、ここに於いて全部水泡に歸し

たであらうか。吾らは當時のパウロの心事を想ふ時、ただ一瞬でも、その後につづく數世紀間の帳りが掲げられてパウロをして彼の努力の結果と、ロマ帝國中に植ゑつけた種子が終に最後の勝利を博した果實とを心ゆく許り打ち眺めさせたいと、思はざるを得ない。

### 参 考 書

1. Ramsay, St. Paul the Traveller, pp. 262-82.
2. Kent Work and Teachings of the Apostles, pp. 173-79.
3. Gilbert, Student's Life of Paul, pp. 142-56.
4. Conybeare and Howson, Life and Epistles of St. Paul, chaps. XIV-VI
5. Farrar, Life and Work of St. Paul, chap. XXXI.
6. Bible for Home and School, "Acts," pp. 176-87.
7. McGiffert, A History of Christianity in the Apostolic Age, pp. 273-90.
8. Bacon, The Story of St. Paul, pp. 174-81.



## 第十章 エペソよりコリントに

### 一 パウロとコリント教會との文通

コリント前書全部。コリント後書全部。數回に亘る文通の證據としては、前書五の九、七の一。後書二の四、九、七の八、十二、參照、同時に、次の章句を注意して讀まれたし、前書一の一、二の五、第十三、十五、十六章。後書各章を次の順に讀まれたし、第十、十三、九、二、七の二―十六。

### 二 マケドニヤ經由コリント迄

使徒行傳廿の一―三。コリント後書一の十五、十六、二の十二、十三、七の五―七、十一、十六。

### 三 ロマの信者に與へし書簡

ロマ書全部、特に次の箇所注意あれ、十五の廿二―廿三、三の廿一―



卅、七の七一八の二、八の十八―廿五、卅一―卅九、第十六章。

四 コリントよりエルサレムに

使徒行傳廿の三―廿一の十六。

一 バウロとコリント教會との文通

バウロとコリント教會員との間に交換された、往復の手紙の研究は、バウロ傳研究中尤も興味ある問題である。コリント前書はバウロのエペソ滞在の終り頃に書かれたものである事は、十六の八に「われ五旬節まではエペソに留らんとす」とあるによりて分る。然し之は決してバウロの始めての書簡ではなかつた。前書五の九には「われ前の書にて汝らに書き送れり」とあつて、彼が以前すでに手紙を送れる事を表はしてゐる。不幸にしてその書簡は僅かに一部分しか残つてゐない。然し之がすべてではない。コリント教會員も亦バウロに書を寄せたらしく、前書の七の一にバウロはその事を云つてゐる「汝らが我に書き送りし事につきては云々。」と。

更に、バウロは度々、コリントに於ける悔改者達の進歩について、言葉での報告を受け取つてゐた。吾らは、この報知を持つて來た數人の名前を擧げる事ができる。或る一つの場合には、それはタロエの家のものであつた（前書一の十一）。他の折には、「アカヤの初穂」ステパノの家族で、ステパノはバウロ自ら洗禮を施した（前書十六の十五及び一の十六）。ス



テパノは一所にポルトネットとアカイコとを伴ひ來り、コリント教會は彼らに托するに、パウロ宛の特別の贈物を以てした、この事につき前書十六の十七にパウロは感謝の意を表はしてゐる。

然しながら、コリント教會と、パウロとの關係は、報告と書簡とに限られはしなかつた。まだエペソにゐた時、パウロは親しくコリントを訪れた事もあつた。その證據には、後書十二の十四と、十三の一には「今われ三度なんぢらに到らんとす」と彼自身記してゐる。又彼はテモテを差遣した。前書四の十七、及び十六の十とは、多分パウロは、二回異なつた場合にテモテを遣はした事を意味するものであらう。テトスも亦コリントに派遣されて、パウロが後書七の六を書いた時には悦びの報知を以てコリントより歸り來つたのである。

この様に、絶えず活潑な交渉のあつた理由は一つにはコリントとエペソが接近してゐた事、一つには、長い間精力を費やした所丈にパウロが個人的に親しい感じを抱いた事にもよるであらうが主として之は、コリント教會内に發展し始めたパウロ排斥の危機に負ふ所があつた。それはパウロの生涯にとつてはガラテヤの危機に次ぐ最大のものであつた。然し彼の確固たる信念と、優しさとは終に最後の勝利を得しめた。

コリント教會に起つた障害の沿革について、ルカは黙して何をも語らないが、われらはパウロの書簡に據つて完全に知る事が可能なる。

(一)前書五の九―十一の中に、吾人はパウロが前の書に就いて語れるを知る。それは主としてキリスト信者が不道德の人々と交つていいか否かといふ問題に關したものである。この手紙をコリントの人々は誤解した。彼らは、この手紙を以て、キリスト信者は、未だ悔い改めざる罪人と交はつては不可なりと解釋した。前書五の十一にパウロは、前の書の意味を説明して、それは、キリスト信者は、仲間の裡で不倫の行を爲す者の存在を許してはいけないと云つたのであると云ふ。よく注意してみると後書六の十四―七の一は、正しく此問題でも同じ誤解を起し易い事が明かに分る。更に六の十三で急に終結してゐる思想が、七の二に再びつながつて、繼續されるといふ事もよく注意して見ねばならぬ。従つてこの章句は、どう見ても問題の手紙の部分とは關係のない頁であるといふ事が判断せらるる。どうしてこの部分が後書内に保存せらるる様になつたかについての説明は、後で後書を論ずる時に譲る。



(二)パウロの短かい手紙に答へてコリントの教會員達はかなり長い手紙を書いて、信者としての生活ぶりや、禮拜の方法などについて色々の質問を送つた(前書七の一)。この手紙には、結婚の問題、偶像に供へられたる肉類を食べる事について、信者の集りに於ける婦人の行儀、主の聖餐を守る適當の方法、様々なる「み靈の賜物」の價值、更に復活の問題に關する質問が含まれてゐた。この質問の手紙がついたと殆ど同時に、クロエの家のものも來つて、コリント教會が數派に別れて相争へりといふ報告を齎らした。(前書一の十一)。

(三)その返書としてパウロは、今日云ふ、コリント前書なるものを書いた。書き終つた時パウロにはこの手紙が非常に長く且つ精鍊されたものと見えたに違ひない。實際この書簡は、書いた人の多方面の性質を表はすもので、彼は同じ書簡の中に六章に亘る叱責の文句を書いた一方には、第十三、第十五章の如き、美の極致とも謂ふ可き名文をもつてゐる。

前書の、始めの四章は教會内の黨派の争を取り扱つてゐる。そこに起つた事件を知る事は容易である。エペソを立つたアポロがコリントに着くや(使徒行傳十八の廿七)、彼が舊約聖書を引用するに當つて、預言の引用も、その比喩的解釋に於いても、比類稀なる才能を有し

てゐた事は直ちに知れ渡つた。ギリシヤ人は知慧を求むとはパウロの言つた至言である(前書一の廿二)。アポロの學識、雄辯及び公衆に對する一種の權威とはコリント人に満足を与へた。間もなくある部分に、彼はパウロよりも偉いといふ聲を上げた者があつた。ギリシヤ人の見方よりすればアポロの「智慧」は、或はパウロに勝るものがあつたかも知れない。ギリシヤ史を讀む人は皆氣の付くやうにギリシヤ人は天性黨派を好む人種である。勿論アポロは、この黨争を導く事を拒み、パウロが前書十六の十二を書いた頃は一所にエペソに歸つてゐたが、教會内の黨争は漸次に、激しく、互に一層敵意を有つ様に成つて了つた。

同時に、コリントには、いつよりもなく、自づと、エルサレムの首たる使徒達、殊にペテロの感化に従ふ一派が現はれた。果してペテロがコリントに來たかどうかは頗る疑はしい。然し、アンテオケに於けるパウロとペテロとの争ひが一般に知れ渡つてゐたことは確かである。コリントに於けるペテロ派といふのは、恐らく、主として、猶太人及び改宗して猶太人となりし者より成り、律法の一般的遵守を信じた一派であつたに違ひない。

では第四の派があつたかどうか。コリント前書三の廿二にパウロは唯三派しかとり立てて



云はない、「或はパウロ、或はアポロ、或はケバ」と。同書一の十二には四派の存在を語る「汝らおの／＼、我はパウロに屬す、我はアポロに、我はケバに、我はキリストに」と。尤も「我はキリスト」にと稱する人々は、穩健派で、教會の爭議を統一調和せしめようと試みる一派であつたとも考へられる。然しそれよりも、もつとあり得べき事は、そこには第四派があつて、或人々によつて導かれ、その人々は、その權威をばイエスとの直接關係即ち、イエスと知り合ひであつたといふ様な所に置いたらしい。後に反パウロ運動の全體を率ゐた者は、實にこの第四の黨派であつたらしく見える（後書十の七、十一の廿三）。更に「キリストに屬す」といふ標語を用ひた之らの人々は多分エルサレムからコリントに來た者であつたらしいといふ事は、コリント後書（十の七、十一の四、十三、廿二、廿三）の引照が彼らにかかつてゐる事によつて十分に證據立てられる。すべての點より總合するに、彼らは、猶太教の教義を主とする一派で、律法は一般に、猶太人、異邦人の別なく、すべてのキリスト信者により必ず遵守せらるべき事を主張し、同時に、イエスの生前には個人的親交のある人であつたらしい。

之らすべての黨派的精神に答へて、パウロは、簡潔にして、非哲學的なる、十字架につけられしキリストの福音を描き出だし、彼らの間に道を傳へし、彼の説教の謙遜さを省みん事を警告してゐる（一の十一—三の四）。彼も、アポロも、その他の者も、神の下に一つなる大事業に従事する勞働者に過ぎざる事を説明したる後（三の五—十七）、彼は、一同が争を止めて、心を合せ、彼らと共に長い間、私を捨てて献身的に奉仕したる者を、變りなき誠實を以て支持せん事を乞ふ（三の十八—四の十六）。かくてパウロはテモテを遣はし、一同に警告を發して、彼も亦、速やかに來らん事を告げる（四の十七—廿一）。

黨派の問題を離れて、パウロは第五章第六章には、彼の許に報告せられたる教會員の不倫の行爲や一般的悪行を叱責してゐる。特に彼は、繼母と結婚したと云ふ男の事件を甚く責めてゐる（第五章）。之は、猶太の法律でも、ロマの法律でも共に禁ずる所であつた。この場合、われらは、パウロの叱責の嚴しさより察して、この男は、多分まだ父なる人が生きてゐるにも拘はらずその不在中、繼母と結婚したものであらうと考へる事ができる。

第七章には、パウロは、コリントより來りし手紙に含まれた質問に移る。第一の質問は結



婚に關するものであつた。大體として、パウロは婚姻よりも獨身主義を勝れりとした様に見える。結婚に反對する彼の忠言が、目の前にキリスト再臨を控えてゐた爲であるなどといふ説明は殆ど不要である。個人の貞潔を重んずる彼の言葉は、結婚の誓約を神聖化する上に、又、既婚未婚に不拘、淫蕩なるコリント市内に見る事もできなかつた、婦人に對しての尊敬を増す上に、重大な結果を齎らしたに違ひない。

第八章より第十章にかけて、彼は、コリントの人々の惑ひし、偶像に供へられし肉を食する問題を取り上げる。パウロは答へて、キリスト教の自由は、偶像に供へられたる物を食ふ事を許す(第八章)しかし彼自身は決して、使徒たるの自由の權を利用したることなしと説く(第九章)。されば、コリントの信者は、唯消極的に、許されたる範圍を守るに汲々たる許りでなく、如何にせば尤も有効に他を助け得べきかといふ精神によつて導かるべしと教へてゐる(第十章)。

第十一章より第十四章は、コリント教會員の禮拜その他儀式に關する問題を取り扱ふ。十一の二—十六に、彼は、コリントの婦人が、キリストに由る自由を履き違へて尋常の整ひたる頭覆ひを用ひなかつたり、しとやかな舉止を失へりと聞いて、遺憾に思ふ旨を表はしてゐる。面覆ウヰレなしに、公けの集りて、婦人が祈禱し、預言する事を責めつつ、パウロは曰ふ「さういふ風習は世にないが故に、神の教會も亦、かかる問題の習慣を採用すべきに非ず。」と。同じ件りでパウロは又婦人達が、主の聖餐にあたつて、無秩序なる事をたしなめてゐる(十一の十七—廿四)。

第十二章は、種々の「靈の賜物」を議する所で、當時、信者達は、屢々靈に満たされ過ぎて熱狂の餘り、我を忘れた状態に陥る者が多くあつたらしい。「方言を語る」といふ事は、恰もギリシャのアポロの女預言者どもが御神託を宣ぶると稱して、怪しき聲を發した様子と餘り違はぬ風で、コリントに於いても行はれたらしい。パウロはこの様な、意味もわからぬ方言を語る事を以て、御靈の賜物の中でも最も劣等のものとした(廿八節)。この様に、彼自ら餘り感心しない、靈の賜物の目錄に對して、われらは、到る所、彼が推賞して惜しまなかつた、御靈の果の表を掲げざるを得ない——愛・喜悅・平和・寛容・仁慈・善良・忠信・柔和・節制即ち夫れである(ガラテヤ書五の廿二)。此の秀でたる道に對して、彼は、御靈



の果の第一の上に、第十三章の美はしき小詩を捧げてゐる、

たとへ我預言するの力あり、

又すべての奥義と

すべての知識とに達するとも……………

愛なくば

數ふるに足らず」。

第十四章には、御靈の果に關する問題に歸り、預言、即ち誰にも分るキリスト教の獎勵や説教を以て、遙かに方言に勝れりと爲す（十四の一―廿五）。彼は一定の方針を施いて、すべて集りに出席して、何かの番にあたる人は、決して自分丈のためでなしに、出席者全部の啓發になる様心掛くべき事を教へた（十四の廿六―四〇）。

最後に第十五章では、復活に關する疑問に答へて、復活の肉體についてその性質を述べ、最後復活の榮光を、目に睹る様に描き出だして、本文を結ぶ。第十六章は追伸の形で、エルサレム救恤金募集について語り、アジャ諸教會、殊にアクラとブリスキラよりの挨拶を送つ

て、筆を擱いてゐる。

（四）コリント後書を通讀してゐると、少し考へのある讀者であつたならば、誰でも、語調文意の變化に驚かされるであらう。第一より九章までの間には、パウロは終始一貫、コリントの形勢が非常に悦ばしく、満足の旨を語つてゐる。特に第七章では、テトスとその齋らし歸つた好きしらせによつて、非常な安心と慰安を得た事を語る。第九節に彼は曰ふ「わが喜ぶは、汝らの憂ひしが故にあらず、憂ひて悔い改めに至りし故なり」と。更に曰く「汝ら、かの事につきては全く潔き事を表せり。……この故に我らは慰安を得たり……テトス……汝ら皆從順なりし事を知れり……われ凡ての事に汝らに就きて心強きを喜ぶ。」と。

所が、第十章より第十三章は急轉して、非常に激しい罵りの言葉で満ち／＼してゐる。それは、憤怒と詰責で、びり／＼と痛む様である。この部分を、研究すればする程、之は到底初めの九章と同時に書かれたものではない事が分つてくる。之はごうしても、他の書簡に屬する部分で、後に、パウロの書簡を寫しとる人か、又はその蒐集者が、誤つてここに挿入したものとしか受け取れない。それが正しいとして、後書七の十六なる「我は、凡ての事に、汝



らにつきて心強きを喜ぶ」を讀みたる後、第十章より第十三章の部分にある、正義の怒りと、身を刺す様な皮肉とを讀み比べ見よ、

「我らを肉に従ひて歩む如く思ふ者あれば、かかる者に對しては雄々しく爲んと思へど、願ふ所は、我が汝らに逢ふ時、かく勇ましくせざらん事なり。……彼らは言ふ、その書は重く、かつ強し、されどその逢ふ時の容貌は弱く、言は鄙しと、……かくの如き人は思ふべし、我らが離れをる時送る書の言葉の如く、逢ふ時の行爲も亦然るを……サタンも己を光の御使に扮ふ……彼らへブル人なるか、我も然り……二三の證人の口によりて凡ての事髓めらるべし……われすでに告げられた、今離れをりて、三度汝らに逢ひし時の如く、前に罪を犯したる者と、その他の凡ての人々とに豫じめ告ぐ、我れ復いたらば決して宥さじ……われ離れをりて、之らの事を書き贈るは汝らに逢ふ時、主の我に賜ひたる權威に従ひて嚴しくせざらんがためなり。」

此の激しい詰責の手紙は、パウロの性格の力と、コリントで闘はねばならなかつた戦ひの如何に重大なものであつたかを知るに、屈強の手がかりを與へる。が一體この書簡はいつ書

かれたものであらう。色々の點より按ずれば、之はコリント後書第一章に含まるゝ書簡より、以前に書かれたといふ事は確かである。それに関する三つの有力な證據は次の如くである。

(a) コリント後書二の四にパウロは曰ふ「われ大いなる患難と心の悲哀とにより、多くの涙をもて汝らに書き贈れり」と。ここにパウロの指す書簡とは必ずや、後書十一十三に見る如き、敵を責める激しい、鋭いものであつたに違ひない。彼は、後書一七の間に幾度も、此の前の手紙について語り、ある一つの場合には、そういふ手紙を送つた事を後悔するところへ云つてゐる。「われ書を以て汝らを憂ひしめ前には悔いたれども今は喜ぶ云々……」(後書七の八)。

(b) 今一つ證據は、後書二の五十一と、七の十二に表はれてゐる、パウロを怒らしめし者は、前書の第五章にパウロより誠しめられし者と同一の者であり得ない點に在る。然しパウロは、二の九やその他の箇所、後者に關して一書を認めたといふ事を、明かに云つてゐる。二の五、八、及び七の十二よりして、この者は、個人的にパウロを怒らし、パウロに反對したといふ事は殆ど疑の餘地はない様である。



(c)最後に、今一つ、この書の在つた證據は、パウロが、コリント前書を書いた時テモテを派遣し、その時、四の十七と、十六の十とに彼の名を擧げてゐる事である。然し、後書七の六、その他の箇所によると、コリントより歸つて、パウロに復命した者はテモテに非ずして、テトスとなつてゐる。してみると、どう見ても、テトスこそは、問題の書簡を携へて行つた男であつたに違ひない。

結局、コリント後書といふものは、一つのまごまつた書簡ではなくして、幾つかの書簡集か、或は、色々の書簡の斷片を集めたものである。すでに本書に述べてある様に、パウロの弟子達は、パウロの没後、彼の書簡が、未だ存在してゐるうちに、蒐集して置く事の必要を、深く感じて來たらしい。數多の教會では、パウロより與へられた書簡を、すべて保存してゐない所もあつた。ピリピ書を讀むと、全部失くなつたか、一部失くなつたか、ともかく、さういふ行衛不明の書に對する引照が表はれてゐる。ある教會では、ある書簡は全體保存し、或手紙は一部丈残した所もあつた。ともかくも、パウロのお弟子中のある特志家が、師の没後、遺稿蒐集の目的でコリントを訪れ、一つの長い書簡を發見した。それは丁度一卷のバビ

ラス巻紙を満たす位の長さのものであつたらしい。でこの書簡を寫し取つた後、彼は巻紙を收めて、「コリントの書第一」とでも銘打つたものであらう。それから、他の短かい書簡や、斷片を、彼が最善と思ふ様式に並べて、すつかり、第二のバピラス巻紙に書き了へた。そしてこの巻物に「コリントの書第二」と記した。

此の「コリントの書第二」の卷には、恐らく、四つか五つの書簡の斷片若くは全體が含まれてゐる事になつた。前に注意した様に、「六の十四—七の一」はコリント前書よりも前に書かれ、不倫の行爲ありしキリスト信者に對する分離主義者に忠言を與へたものである。第十章—第十三章は、コリント前書を送つて後、全コリント教會をあげて反パウロ黨たらしめ、教會を奪ひ取らんとする局外者の一派を撃退せんがために送られし、激しい詰責の手紙の一部分である。第一章より第七章は、前記の數節を除いては、すべて教會が靜謐に歸し、危機も去つたので、パウロは満足と慰安とを得てその歡喜の情を表はしたものである。この部分は、マケドニヤで、テトスの到着後書かれた(二の十二、十三、七の五)。あとには第八章と第九章が残る。之らは聖徒のために寄附金募集をなす事に關したものであるが、二章共、



とても一時に書かれたものではあるまい。第九章第一節には、前に何の説明もない様な問題が紹介されてゐる。この寄附勸説の二書は、相前後してマケドニヤより發せられたものらしい(八の一、九の二)。それは二書共に、アカヤがすでに一年前に、最初の寄附を爲した事に言ひ及んでゐるので判断される(八の十、九の二)。

そこで、パウロとコリント教會との間に取り交はされた文通を總括すると次の様になる、(一)パウロよりコリント人に與へた、分離主義の書簡(コリント後書六の十四—七の一)。之はコリント前書五の九にその事が記されてゐる。多分紀元五四年頃エペソより發せられしならむ。

(二)コリント教會よりパウロに宛てし書簡、コリント前書七の一に引照さる。紀元五五年の初め頃書かる。婚姻、偶像への供物の食否如何等に關する質問を含めり

(三)パウロの返簡……今日の、コリント前書、第十六章八節に在る如く、紀元五五年の春、エペソにて書かる。教會内の四派の争を叱責し、前の質問に答ふ。

(四)コリント教會員に宛てし、はげしきパウロの詰責狀(コリント後書第十章より第十三

章)。後書二の四、九、七の八に記さる。紀元五五年の五旬節前、エペソを辭せんとする頃に書かる。

(五)和解の書、(コリント後書一の一—六の十三、七の二—十六)。紀元五五の夏マケドニヤにて書く(後書七の五)。

(六)寄附金募集に關する、短簡なる二書(コリンと後書、第八章及び第九章)。二つ共、多分紀元五五年、マケドニヤにて書かれしならむ。

## 二 マケドニヤ經由コリント迄

前に、パウロは、エペソより船でコリントに渡り、更にマケドニヤの諸教會を再訪問しようとして計畫した事が在つた。この計畫は、コリント後書一の十六に示された如く、コリント教會内の軋轢が目を追うて強くなつて來た爲に、實行不可能となつて了つた。そこでパウロは、酷しい叱責の手紙を送つた方が賢明だと考へた。この手紙は、聖徒のための寄附金募集に關係して(コリント後書十二の十八)、既にコリントを訪れたことのあるテトスの手によつて運ばれた(コリント後七の六—八)。それからパウロは少なからず不安の念に驅られながら、



マケドニヤを指して北上の旅についた。トロアスについた時、未だテトスが歸つて來てゐなかつたのを知るや、パウロは、或は、コリントの教會が、彼の忠言を拒けて了つたのではないかと危ぶみ出した（後書二の十二、十三、七の六）。一寸の間丈、彼は、その様な嚴しい手紙を送つた事を後悔してもみた（七の八）。

海を越えて、マケドニヤに達するや、彼はテトスよりコリント教會が再び堅き忠誠と、調和に歸つたといふ好き報告を受けとつた。彼の機嫌は恢復した。そこで、早速コリント教會員に向けて、彼の満足を表す手紙を送つた後、彼はマケドニヤの町々を廻りて、長く待ち焦れてゐた信者達と再會の悦びをわかし許りでなく、同時に、強い奨励と勇氣を與へた。

ルカは此際、聖徒への献金について何事をも語らないが、パウロ自身、書簡中に表はした引照によれば、彼のマケドニヤ旅行の主なる目的の一つは、實にこの寄附募集にあつた事が分る。コリント後書に含まれし二書簡（第八章、第九章）は、殆ど相前後して此時分に書かれたものであるが、パウロの心中に、この事が如何に重大な位置を占めてゐたかを物語るものである。多分この大袈裟な寄附募集の源は、かつて、エルサレム會議で、使徒達がパウロ

に、エルサレムの貧しき者を顧みん事を願つた事に基づいたものであらう。（ガラテヤ書二の十）。尤も、この寄附を募つたパウロの目的は決して、貧者を救済する丈ではなく、同時に異邦人と猶太人のキリスト信者を、大きく結び付けようとするに在つた。パウロが色々高調した中で、一番繁く、一番大きい力を置いたものは總ての信者と、總ての國民とをキリストに因りて統一せん事で在つた。パウロは彼の國家、猶太民族を愛した、が同時に又大きい世界觀をも有してゐた。この二つが別れ〜になるといふ事はパウロの考へ能はぬ所であつた。むしろ彼は全身を捧げて、異邦人に猶太人を、猶太人には異邦人を了解せしめようと力めたのである。従つて、總て、彼の教會にとつて、この兄弟の愛に基づいた、統一の運動に参加する事は、最大の義務であつた。

パウロが、數ヶ所で彼の教會はすべて、この目的のために義務を盡しつつあると述べてゐるのは決して偶然ではない。（一）コリント前書十六の一、に彼はガラテヤの諸教會の事を述べてゐる。多分テモテはガラテヤに生れ故郷があつた故に、同地方の寄附金は、彼が運んだものであらう。（二）マケドニヤでは、寄附募集の件に責任を負ふ者が任命されてゐた事



は、コリント後書八の十九に記されてある。パウロは又、マケドニヤに於ける寄附募集の事を、ロマ書十五の廿六に記す。コリント後書八の二、三には、マケドニヤの人々が、彼らの方以上に、寄附を惜しまなかつた寛大な氣持を、賞揚してゐる。(三)アカヤの寄附殊にコリントの事は、ロマ書十五の廿六、コリント前書十六の一、二、同後書九の二に記されてゐる。この地方の寄附の事は、テトスが責任者であつた事は、コリント後書八の六に、パウロの云ふ所で分る。(四)エペソよりの寄附については、どこにも明かな手がかりはないが、使徒行傳廿一の廿九に在る。エペソ人ツロピモがエルサレムに現はれた理由は、明かに、エペソの寄附金を持参したものであらう。ただクプロ丈が省略されてゐる。然しここは、先に、パウロがバルナバに委した所であつた。

この寄附募集は、パウロのマケドニヤに於ける主なる使命であつた許りでなく又、エルサレム上りの主なる動機であつた。パウロに惡意を持つ者共は、この事をいい機として、パウロは、寄附金を名として、私利を貪ぼりつつありとした、そのために、パウロは極度に注意して、一切自ら金錢に觸れぬ事とした。コリント前書十六の二に依れば、パウロは、彼が出

席してゐる前では、献金をせぬ事を悦ぶとさへ述べてゐる。同じく十六の三には、パウロは決して自分の手で、金に觸れぬと云つてゐる。パウロはこの様にして、諸教會よりの救恤金を運ぶ代表者の頭としてエルサレムに上る事により、彼がエルサレム使徒より離れて獨立の行動をとる爲に生じた、不快の感じを除去し、同時に、エルサレムの猶太人的のキリスト信者達に、すべて信者の群は、一つの大きいなる世界的同胞の愛によつて統一され相互に忠誠なべき事を、明かに、實例を以て了解せしめ得るであらうと信じた。

マケドニヤの寄附募集を了へた後、パウロは、最後の長い訪問をするために、コリントに向つた。コリント前書十六の六は之を記して、パウロはその冬をコリントに暮さん計畫であつたと云ふ。彼がギリシヤで三ヶ月を送つたといふルカの記事は、この記事と一致してゐる。この冬の間、それは紀元五五年より五六年にまたがる冬であつたが、パウロは舊友ガヨスの家に客となつた。ガヨスの名は、ロマ十六の廿三にも出され、又コリント前書一の十四によれば、パウロが自ら洗禮を授けた一人であつたといふ。この冬のコリント滞留は、教會が彼の忠言に従つて、黨派の争を止め、キリスト信者の兄弟愛によつて和氣霽々たる間に働いた



事故、必ずや、熱誠と、喜悅と満足に満ちたものであつたらうと察せられる。

### 三 ロマの信者に與へし書簡

コリントに於ける此冬の滞在中、パウロがロマを見たいと思つた望みは、自然に強められた。船舶は絶えず、世界の都ロマに向けてコリントの港より出て行つた。時にアクロ・コリントの高い頂に登つては、西方に開くる灣を見下しつつ、この方向に福音を傳ふる可能性を考へ、思は更に大海の涯なるスペインの岸にまでも馳せたであらう（ロマ書十五の廿四、廿八）。然しながら後ろを振り返へつては、地中海の他の端なるエルサレムに於けるキリスト教團體の事を考へ、更に幾多の苦心を以て募りたる救恤金の始末について思をめぐらしたに違ひない。（十五の廿五、卅一）。

ロマ書第十五章の後半は、パウロの計畫の宏大きさを物語るものである。彼が、その様に簡單に口にする旅路——コリントよりエルサレムに、更にローマに歸りて、スペインまで——は少くとも四千哩の旅であつた。もしかりに、スペインまで行つた後、タルソの家か、アンテオケに歸るとすれば、最小限に見つてもその距離は殆ど七千哩になるであらう。當時

に行はれた遅々たる旅行より考ふるに、それは二十世紀に世界を一周する旅行よりも遙かに、苦心を重ねた上に、長い時間を要する旅であつた。

近き將來に大急ぎでロマを訪れようといふ考を捨てて、今パウロは第二の良策をとつた。彼は代書人を備つて來て、ガヨスの家の自室で、毎朝少時間、仕事を始むる前に、手紙を書き取らせて、とう／＼首都にある信者に向けて長い手紙を書き上げた。まづ彼は、數年來、彼らの許を訪れようと願つてゐたが、今丁度マケドニヤ、アカヤの寄附金募集を済ましたので、どうしても、第一の務めは西に行く代りに、之を以てエルサレムに赴かねばならぬ立場に在る事を説明した。この寄附金に附した重大な意義と、ロマの信者も、少くとも心の中では同じ同情心を以てこの舉を賛すべきであるといふ彼の氣持は、この金が、エルサレムで快く受け入れらるる様、彼らの祈禱を乞ふた所によく表はれてゐる。

本書をものした理由は、一部分、彼が、ロマに非常に近い所まで來てをつた事にもより、又ロマの教會も、その中に、パウロが訪れない前に、猶太系の人々のために、福音の解釋が狭義になされはしないかを怖れて警告を發したといふのも一理がある。然しながら主なる理



由は、彼は獨特の先見の明により、此行エルサレムに着いた折もしかすれば、敵意を含む猶太人のために陥いれられて、生きて相見る機が永久に來ない様な事もやあらんかと慮つて、本書を草したのであつた。

今本書の梗概を述べんか、初めの各章に於いてパウロは罪と犯罪との普遍性を描き出だしてゐる。律法によらぬ異邦人の中にも（第一章）、又は律法を有つ猶太人の間にも（この一―三の廿）、人間はそのなす功績によつて「救ひ」を得ることは出來ない。第三章廿一節より始まり、初めの八章の終り迄に、彼は、イエスによつて啓示せられたる正義の新しき道を教へる。第七章にはパウロ自身罪と闘ひし經驗を語り、第八章には、最後に彼が勝ち得た勝利と、總ての人々も、キリストの御靈により之を得る事が可能なる事を語り聞かせる。「わが欲する所の善は之を爲さず、却つて、欲せぬ所の惡は之を爲すなり……キリスト・イエスにある生命の御靈、われを罪と死の法より解放せり。」と。第九章——第十一章は、イエスを斥けたる、神の選民の運命に關する問題を取り扱ふ。しかも彼は熱誠なる希望、へむしろそれは希望よりも正にかくあるべしと信する確信といつた方可ならむを以て、彼らも亦異邦

人と同じ基礎の上に、神の國に立ち歸り共に受け容れられん事を述べてゐる。最後に、第二章より第十五章に於いて彼は、キリストの精神を、ロマの信者の日常生活に適用すべき實際的教訓を與へんとしてゐる。

ロマ信者に宛てしこの書簡は、パウロの書簡中尤も、人格的色彩の少ないものである。むしろ書簡と云ふよりも、論文と呼ばれるべきであらう。然しそれは全く、パウロの内なる魂の表現である。第七章に彼は、若き頃の彼自身の内生活の苦惱を語り、第九章には急轉直下、もし國家が救はるるならば、彼の一身は永久に滅びても、満足なりといふ悲痛の叫びを發してゐる。第十五章には、彼の生涯に抱きし、最大の抱負を語つてゐるのである。されば、本書の中には、パウロの偉大なる性格の三大要素を現はしてゐる事が分る。即ち、彼の魂の深さと純潔さ、同胞の幸福に對する絶對的献身、及びその抱負の遠大さである。

ロマ書は、第十五章の終りを以て、祝禱と「アーメン」によつて結ばれる。第十六章は紹介狀の短い手紙で、後來、例のパウロの遺稿蒐集の折、長い書簡と同じ巻紙の上に寫し取られたものらしい。之はパウロが彼自身のもと呼び得る程親密な教會に向けて書かれたもの



に違ひない、その證據には第十九節にパウロは「我なんぢらの爲に喜べり」といふ言葉を發してゐる。手紙の行先は、本文を読み出だせば直ちに判斷できる。プリスキラとアリラは、之まで吾らの知れる範圍では未だエペソに留つてゐた、筈である。してみると、彼らへの挨拶を含む手紙は、十中八九まで、エペソの市に發送せられたと考へられるのが至當である。次の挨拶はエパネットで、之も「ア ज्याの初穂」といふ句より推せばエペソ人である事が明かとなる。二句先に、パウロは彼と「共なりし囚人」にも敬意を表してゐる。彼らとの親交は多分、彼がエペソで投獄されたといふ時始められたものであらう。

パウロの書簡のごにも、この様に挨拶の句の澤山に出て來る所はない。エペソの三年間に彼の援助をしてくれた人々の事は、パウロはかくもよく記憶してゐたと見えて、いざ手紙を書き始むるや、その數を制限する事さへできなかつたらしい。之は極めて小さい紙片ではあるが、パウロが到る所に結んだ美しい友情の發露を知る上に此上もないよき觀察の材料を與へる。試みに、パウロが全く未知のエペソの市に來たとき、深い同情と忍耐を以て彼の世話をした、彼の善良なる婦人を思ひ見よ、パウロは感謝の餘り終には彼女の事を「母」と呼

び做すに至つたので在る（第十三節）。

#### 四 コリントよりエルサレムに

コリントより直接、船路を辿つて東方に向はんとするパウロの計畫は、猶太人の反パウロ熱が益々狂暴の度を加へ、遂には手段を選ばず、彼を亡き者にせんとさへするに至つたので、急に變更される事となつた。先にエペソに於いてもパウロは、海路コリントに渡り、それからマケドニヤに赴き、同地の二重訪問を避けようとした。その時彼の計畫が變更された様に、今やパウロは再びマケドニヤを通ることとなつた。道中、パウロの伴をした七人の者は、多分諸教會より寄附金を運ぶ命を受けた代表者達であつたらしい、パウロとルカをピリピに残して一足先きにトロアスに渡つた。この人々はトロアス以後はエルサレムまでパウロと一所に旅したと思はれる。使徒行傳廿の四に「ア ज्याまで」とある句は、恐らく原本の句ではないであらう。その中二人の名は、パウロと共に、バレスチナで見出された。

「我等」といふ代名詞が、再び、廿の五に不意に出て來る事は意味深重である。パウロの一行は、彼に隨つて進んだ（廿の四）。ピリピでは急に語勢が變り、そこを船出したのは「我



等」である。一步先にトロアスを出た供の一行は「我等を」待ち受けてゐた。この物語の中に三つ程、餘程の正確さを以て、前後の關係説明の暗示が含まれてゐる。(一)多分ルカはピリビでパウロと合し、一所にエルサレムへの旅に上つた、といふ事(二)ルカがいよくパウロの伴をしてエルサレムに赴かうと決心する迄に、少し時が立つたので、ここまで来たパウロの一行、即ち諸教會の代表者達は、一足先に船出して、トロアスで「我等を」待つ様になつたものらしい。ルカがパウロと共に旅に出ようとは全然、思つてゐなかつたとし、又パウロがコリントより直接船出して、この醫者のルカの仲間を持つ事ができなくて、従つて、現今キリスト教の世界が使徒行傳を有つ事ができなかつたとしたら、どんなものであらう。(三)何れにせよ、ここにルカは再び彼の日記の抜萃を用ひ始めた。代名詞「我ら」は、カイザリヤの獄中記事を除いて、以後使徒行傳中、物語りの残りの部分の殆んど全部に及んでゐる(廿の五—十五、一の一—十八、廿七の一—廿八の十六)。ルカは旅行中の日々の出来事は詳細に、規則正しく日誌に記入して置いたと見えて、船の寄つた地名など、サモスと云ふ様な殆ど何ら必要もないものまで保存してゐる(廿の十五)。

ルカによつてその日誌に記録された事件の一つは、トロアスに於ける一青年の事で、パウロの話が餘り長くなつたので睡氣を催した。恐らく膝の上に抱いた孫達にでも話す様に、ルカは、パウロが長い話しをして眞夜中にまでも至り、まだ飽きもせず話しをつづけたので、とうとう、若物は、グツスリ眠つて了つたといふ有様を物語つてゐる。然しながら、此話にも眞面目な點は含まれた。若者は窓から落ちてたしかに死んで了つた。ルカは醫者であつたにもかかはらず、この若者は死せりと云つてゐる(九節)。そしてその物語りはパウロはエリヤが列王記略十七の廿一に、寡婦の息子の生命をとり返した様に、この若者を死より生き返らしたといふ事を意味してゐる。

パウロはトロアスより陸路約二十哩、アソスに出て再び彼の船に合した。船が屢々方々に立ち寄つた事は、勿論荷物の積み上げ、積み下しに因つたであらうが、今日の汽船の旅によく似てゐる。例へば、今日スミルナに碇泊する殆どすべての汽船は、旅客がエベソの廢墟を訪れて歸つて来るまで十分間に合ふ位は泊つてゐる。同様にパウロの時代にも、ミレトスでは、尤も彼の乗船が何時出帆するか正確に知る事ができなかつたので、その附近を去る事は



欲しなかつたか、十分の時間があつて、エペソの長老達を迎へにやり、彼らと別離の言葉を交す丈の時は十分にあつた。

パウロがエペソに立ち寄らないで、通過して行く船を選んだ理由の一つは、たしかに、あの様な大騒擾を起して未だ間もないのに、再びエペソにその姿を出だしては、再び面倒を惹き起しはしないかといふ懸念もあつたらうが、主としてそれは、豫期しなかつたマケドニアの再度の旅が、彼の旅程を非常に遅延せしめて了つた事に存した。彼は是非五旬節迄にはエルサレムに着きたいと願つてゐた。この日は單に猶太人の一大祝日許りでなく、聖靈の火が人々の上に注がれためでたい祝日であつた事は使徒行傳第二章に委しい。それは又、特に異邦人教會よりの救恤金を猶太系信者に贈るに尤も好都合の時であつた。

ミレトスに於ける訣別はエペソを訪問したよりも却つてよくパウロの目的に副ふた。パウロの主なる願は、エペソの信者が彼と彼の福音にいつまでも忠誠ならん事であつた。彼らは、訣別の、辭をきいてパウロがもしエルサレムで迫害される様な目に合はされても、それはパウロの敗北を意味せず、却つて彼の目的を撓まず到達せしむるものであるといふことが了解

されたであらう。たとへ彼らが、再びパウロの顔を見る事はなくつても、パウロの個人的働き又は彼らのために總ての自己を捨てて献身的に盡した精神を忘れる事はできなかつた。彼の最後の言葉は他のどこにも記されてゐないイエスの言葉を保存したものであつた「與ふるは、受くるよりも幸福なり。」

パウロと其一行がだん／＼東に近づくにあたり、クプロの島を遙かに眺めて過ぎ行く時、パウロはきつとルカを顧みて、島の山々を指し、バルナバと初めて、そこに傳道した話など語り聞かせたであらう。後になつても、ルカの日記にある「クプロの島影」といふ様な言葉はパウロの異邦人傳道旅行の始め終りを想ひ起さしめるものであつた。

ツロに着いた一行は、七日間船を待つて、再び航海をつづけねばならなかつた。ここでパウロは、猶太人の反パウロ熱が益々高くなりつつある事を警告された。然しながら、再びパウロは、イエスが前に例を示されし如く、只エルサレムへと側目もふらずつき進んだ。航海はトレマイで終り、旅の残りは陸路を辿らねばならなかつた。ただ一と晩をすごした後、翌日一行はカイザリヤまで來た。間もなく、ここで二ケ年を獄で過す運命の下にあつたパウロ



は、彼の身邊の危機に關する最後の警告を受けた。だん／＼エルサレムに近づくにつれて、信者の仲間達は、益々迫る前途の危険を告げた。然しパウロは動搖しなかつた。數日の後、いよいよエルサレムに向ふ爪先上りの坂道にかかつた。道路はロマの政府によつてよく舗かれてあつたとはいへ、距離は一日の馬上の旅には、少し長すぎた。その夜はクプロの舊き弟子マナソンの家に一泊した。「舊き」の語よりして、マナソンは、パウロの第一回傳道の折に、悔い改めた人であつたらしく思はれる。ここに再び、始めと終りが互に近づいて來た。パウロはマナソンに向ひ、彼が島を出でて以來、起つたすべての出來事の一般的方向をば、物語る事もできた。翌朝、再び旅をつづけて終に一行は、エルサレムに到着した。それは恐らく五旬節に僅か數日前であつたであらう。

参 考 書

1. Ramsay, *St. Paul the Traveller*, pp. 283-303.
2. Kent, *Work and Teachings of the Apostles*, pp. 151-55; 185-90.

3. Gilbert, *Student's Life of Paul*, pp. 157-74.
4. Conybeare and Howson, *Life and Epistles of St. Paul*, chaps. XVII-XX.
5. Farrar, *Life and Work of St. Paul*, pp. chap. XXXIV.
6. Bible for Home and School, "Acts," pp. 187-200.
7. McGiffert, *A History of Christianity in the Apostolic Age*, pp. 290-337.
8. Cone, *Paul*, pp. 107-27; 138-42.
9. Bacon, *The Story of St. Paul*, 182-85; 266-97.
10. Burton, *Handbook of the Life of the Apostle Paul*, pp. 59-78.
11. Goodspeed, *Story of the New Testament*, pp. 14-34.
12. Moffatt, *Introduction to the Literature of the New Testament*, pp. 108-49.



## 第十一章 就縛と上告

- 一 エルサレムに於いて就縛  
使徒行傳廿一の十七—廿三の卅五。
- 二 カイザリヤの二年間  
使徒行傳廿四の一—廿七。
- 三 ロマ皇帝に上告す  
使徒行傳廿五の一—廿六の卅二。
- 四 航海と難破  
使徒行傳廿七の一—廿八の十五。



一 エルサレムに於いて就縛

使徒行傳第廿一章—廿五章の記事に表はれた事件を知るためには、當時の形勢を形造つた各要素と、其がパウロ及び彼のエルサレム訪問に及ぼした影響とを心に留むる必要がある。

その主なる要素は六つよりなり、(一)パウロ自身、(二)エルサレムの使徒達、(三)エルサレム信者内部の律法派、(四)非キリスト教徒猶太人、(五)異邦人のキリスト教、(六)ローマ官憲であつた。

(一)パウロのエルサレム訪問の目的は、前にも述べた通り、キリスト教徒の統一を保ち又之を設立するためで、この目的のためには彼は自らの身邊に如何なる危害を加へらるることも意としなかつた。彼の恐れた點は、キリスト教が猶太人のみの團體となつて、キリスト教よりも猶太教に近くなつたり又その反對に、異邦人の團體は舊約聖書や、イエス直接の使徒より受くる深い信仰を失はむことであつた。この二つの枝は一方だけでは立ち行かない。パウロは出来るならこの二つを一所にまとめ様と決心した。これパウロが、彼の諸教會より喜捨された金を、自ら携へ行かむとした理由に他ならない。勿論パウロはこの結合によつて、



異邦人が猶太の律法主義を遵守する必要は決してないと考へた。然しこの點は此度の訪問には持ち上らなかつた。それは既にエルサレム會議、アンテオケ、ガラテヤ及びコリントの事件で解決されてをつたのである。四人の誓願ある者が潔めをなした事は（使徒行傳廿一の廿四）、之ら儀式について異邦人が全然自由である事とは後にも説明される通り何の關係もなかつた。この訪問は、すべての信者を、ユダヤ人も異邦人も共にキリストによる實際的兄弟の愛によつて調和させんためであつた。

(二)ヤコブによつて代表された「柱と思はるゝ使徒達」は大體パウロの異邦人傳道並びに特に此度のエルサレム訪問には十分の同情を有つた。ルカの語る所によれば、パウロが「異邦人のうちに神の行ひ給ひし事を一々告げた」時、彼らは皆「神を崇めた」と云ふ。明かにヤコブは、律法を基とせざる異邦人の悔い改めをも快く受け入れた。然し教會内には今一つの派があつて、其の立場も亦考慮に入れねばならなかつた。

(三)エルサレム教會内の律法派は今度も亦、數年前のエルサレム會議の折と同じく、形勢を險惡ならしめた。「ガラテヤ二、使徒行傳十五參照」。此度の問題は異邦人の割禮問題で

はなく、猶太人の律法遵守に對するパウロの態度が中心となされた。多分之らの律法派は、非常に多數で、又深くパウロを疑つてゐたために他の教會員をも唆かしてパウロが苦心して集めて來た、寄附金をも快く受けさせなかつた。ルカは此點について、金が受け入れられたとも、又異邦人教會に對する感謝の意が何らかの形で表はされたとも何とも言及してゐない。之はパウロがロマ書第十五の三〇、卅一に云ふ所の、「もしかすると彼の志までも受け入れられないかも知らぬ」といふ怖れを抱いた事が決して一片の想像でなしに、實際の原因を有してゐた事を證明するものである。

使徒達はユダヤ人と異邦人との友情を結ばむとするパウロの目的を助けむとして一つの手段を講じた。それによるとパウロは律法派の人々の氣を和ぐるために、「誓願のために潔めをなす四人の者ども」を助くればよいのであつた。多分この四人は此の儀式を掌ごつて貰ふ爲めの費用に差し支ふる程貧しい人達であつたらしい。この事は數年以前にパウロがテトスに割禮を施す様、乞はれた事に酷似するもので、何れにせよ使徒達の信仰そのものに關した事ではなく教會内律法派の争ひより餘儀なくされた（ガラテヤ二の一〇一〇）。そこで使



徒達はパウロが律法に拘はらず異邦人をキリスト信者たらしむる事は決してユダヤ系信者に律法を無視せよといふ意味でない事を十分に了解させる様に希つた（使徒行傳廿一の廿一）。此の要求はパウロ自身快く應じ得るものであつた。一體パウロは猶太人をして律法の遵守を怠らしめ様などといふ考を抱いた事はなかつた。又彼らはキリスト信者といふよりもむしろユダヤ教に近かつたとはいへ、矢張りキリスト信者の團體に屬するので、パウロが今、一致調和せしめ様とする仲間の一つに含まれてゐるのである。そこでパウロはこの潔めの式に加はる事を快諾した。第廿四節の終りに「汝も律法を守りて正しく歩みをする事を知らん」とルカがヤコブの言をそのまま記したるは必ずしもパウロが常に律法を守つたといふ證據に根ざしたのではなかつた。その理由はアンテオケで律法の末義を守らむために、ペテロが信者の友情をまでも犠牲に供した時、彼が甚く面責したのでも判る。第廿五節も亦異邦人に關する律法上の制限で、アンテオケ事件に關聯して、エルサレム會議で決せられ各異邦人教會に送られた回狀の言葉を心にとめて讀む必要がある。それは明白に猶太國內又は猶太人が多數を占むる地方の異邦人に與へられた制限であつたに違ひない。これ丈の了解を以てこの物語

りを讀めばパウロが苦もなく、使徒達の好意ある忠言に従つた事が了解される。然しながら之程深く考慮され又快諾された計畫もそれが非キリスト教猶太人との間に、とり返しのつかぬ衝突をつくらふとは誰も氣が付かなかつた。

(四)もしパウロが神殿の内で發見されなかつたならば、之らの非キリスト教猶太人は、何の反感も起さなかつたであらう。が一般に猶太人はパウロの異邦人傳道には強い反感を有つてをつた。彼らの意見では、パウロはロマ領至る所の都會で、多くの猶太人や「神を畏れる者ども」をば猶太教會堂より奪ひ去つてその上「人は律法に依らずして救はる」などといふ大それた宣言をなす者であつた。實際之ら外國各地に移住してゐた猶太人より見る時、パウロは彼らと競争の宗教を打ち建てて、異邦人をエホバ禮拜に導かむとする彼らの努力を、覆へす者としか考へられなかつた。従つてエルサレムの騒動がアジヤの猶太人によつて指揮されたのは當り前の事で、パウロはその地方で最近三年間に亘つて有力な傳道を續けて來た計りであつた。之らの人々がエルサレムの猶太人を煽つて、パウロは神聖なる神殿の内部にエペソの異邦人キリスト信者ツロピモを引き入れたと稱へた。



(五)異邦人のキリスト信者達はパウロ程、猶太人憎悪の的とはならなかつた。がパウロは彼の祖國の宗教に裏切つた者として一層憎まれたのである。パレスチナより移住したる猶太人らが異邦人キリスト信者にとつた態度は主として「嫉妬」に起因するものであつた(「使徒行傳十七の五」)。キリスト教徒が猶太人に迫害された形跡もない事はなく(テサロニケ前二の十四)又はキリスト信者が正しいならば、猶太人はすべて亡びなくてはならぬなどといふ強い感情も現れてゐる(ピリピ一の二八)。然し之らはエルサレに現はれたツロビモの姿が齎らした程激しい反感は起さなかつた。ツビモが神殿の内部に居たといふ事は、猶太人を極度まで憤怒に導き、彼を以て、神聖なる神の宮及び禮拜の崇嚴を亂す首敵にして同時に神殿に關する猶太民族本來の特權を偽はる者として憎んだ。

(六)羅馬の官憲は二つの理由によつてパウロに正當にして且つ自由な待遇を與へた。第一は羅馬政府は領内のすべての宗教に對してはすべて寛容の態度をとるといふ遠慮と周到な意見を有した。猶太人は特にこの點に於いては寛大に取り扱はれてゐた。第二にパウロは生れながらの羅馬市民であつた爲めに必要な場合にはいつでも羅馬官憲の保護を仰ぐ事が出

來たので、地方の迫害より免るを得た。使徒行傳には、記者のルカが特にこの點に興味を抱いてパウロとその同志の人々に對して羅馬官憲がいつも寛大で親切なりし事を描き、官憲がいつもパウロ及びその一味に好意を寄せてゐた事を物語つてゐる。

エルサレム神殿内の騒動は主としてパウロに向けて發せられ、彼が神聖なるべき神殿の内廷に異邦人ツロビモを引き入れた點に批難が集中した。當時内廷への出入を禁じた制札が數年前發見されて今はコンスタンチノブル博物館に藏せられてゐる。その寫しが諸所の米國博物館にも保持されてある(例へばハスケル博物館シカゴ大學)。その石は高さ二呎、廣さ三呎刻まれたる文句は次の様な意味のものである。

「異邦人はこの柵の以内、至聖所の境界線以内に這入るべからず。

もしそこに發見せられたる者は、その結果に對して自ら責任を負ふものなり(そは死を意呼す)。」

この石碑の上に残つてゐる傷痕は多分羅馬兵の戦斧でつけられたものであらふか。モムゼンの羅馬史には、之れが戦斧の痕とすれば、それは確かに紀元七十年テトスの羅馬兵がエルサ



レムを掠奪した時にこの制文が牆に墮つて傷つけられたものであらふと記されてある。もし兵卒どもがその怒りをこの石に洩らさうと試みたとすれば、きつとそれは猶太人の宗教そのものの如く頑固なものであつた事を知つたであらふ。石の厚さは一呎を少し越えてゐる。

ロマの衛兵どもが、ステパノと同じ運命に陥らむとしたパウロの急を救つた。彼らは猶太國の末期頃は特に市内の出來事について注意深くなつてをつた。駐屯所が神殿の境内なるアントニオ塔にあつたので境内の騒ぎは一々手に取る様に聞きつけられた。この場合ルシヤスは殊に迅速に行動したらしい、といふのは最近に暴動を鎮定した折「エヂプト人」として知られたその首魁をば取り逃した経験があつたから（使徒行傳廿一の卅八）。然し捕へて見ると狂氣じみた猶太人の叛徒の代りに、それはギリシヤ言葉を以て彼に話しかける事のできる、而もパレスチナ住人でなくして「卑しからぬ市（即ちタルソ）の住人」であつた。そこでルシヤスは直ぐにパウロの願ひを容れて民衆に向つて演説する事を許した。

パウロの言葉は、その真剣さのみでも人々を感動させるものがある。然し彼の悔改の経験は彼にとつてこそ意味深きものであつたが、激昂しきつた反對者にとつては大して感動を與へなかつた。

猶太教の眞の精神は、詩篇の作者達や、舊約の預言者の人々が尤も崇高に又秀拔に表はしてゐるが、ここに集つた猶太人の代表者はその高尚な方面を代表せずして、後世改惡された猶太教内の律法の末義に拘泥する輩で、恰も預言者達の使命を拒否した輩に酷似してゐた。彼らはパウロが古への預言者の眞の後繼者にして同時に猶太國民最上の習慣を保存する人である事が判らなかつた。

パウロの演説が群衆の騷擾を鎮め得なかつたのでルシヤスは、多分彼自身パウロのアラメク語の演説が判らなかつたせいであらふ、パウロを笞刑にして、何故に群衆を騒がしたかその理由を自由せしめ様とした。この時パウロはかの有名な言葉「然し余はロマ市民なり」といふ語を發したのである。

すべて宗教上の裁判は「サンヘドリン」の審問に廻されるのが當時の習慣であつた。もし「サンヘドリン」がパウロを死に當るものと判決すれば、その次は死刑執行についてロマ官憲の許可を受くる事であつた。然しパウロは巧みにその場の形勢を扱つたので「サンヘドリ



ン」法廷に於いて有罪の決定を受くることを免れた。

丁度パウロが辯解を始めた時、ルカの記録によれば（使徒行傳廿三の二）大祭司は下役をしてパウロの國を打たしめ様とした。之は多少疑はしいがヨセファスの説明によりこの大祭司アナニヤが後日猶太人の手に非業の死を遂げたことと思ひ合せると、それは有つたらしいことである。

多分パウロは嘗つては「サンヘドリン」の役員の一入であつたかも知れない（使徒行傳廿六の十）。彼はこの委員會に於いて意見の相違などの存在することをよく知つてゐた。「兄弟たちよ、われはパリサイ人なり」といふ彼の言葉と、同じく死者の復活に言及せる言葉がサンヘドリン會議のパリサイ人とサドカイ人とを分裂せしめた。この騒ぎに驚ろいて、急いでその原因を除かむと、ルシヤスがパウロを城中に連れ歸らむと決定した有様が手に取る様に看取せられる。

然しパウロの敵手は尙執拗であつた。彼らはもし猶太教の中心であるエルサレムで、パウロを亡くする事ができなかつたならば、他所ではその機會の一層少ない事を十分に知つてゐ

た。暴動に失敗し、サンヘドリンの審問に失敗を重ねた彼らの最後の頼みは暗殺の計よりなかつた。盟約を立てて人を暗殺する様なやり方はエルサレムの末期には極めて普通であつた。然しパウロは市中に多くの知己を有つてゐた。パウロの姉妹の子といふのは按ずるにキリスト信者ではなかつたので、こゝにいふ隠謀を知る機會が餘計にあつて、ロマの隊長に報告したものであらふ。

ルシヤスは反パウロ熱の容易ならぬ形勢に打たれて政略上パウロを他に移す事の必要を悟つた。そこで彼は通例ロマ官憲代表に附すると同じ様な嚴重な護送の準備をした。七十の騎兵、四百の歩兵は、夜私かにパウロを護衛してカイザリヤなる、ロマより派遣されたるユダヤ地方總督の許に赴いた。

## 二 カイザリヤの二年間

カイザリヤはパウロがそこで監禁された時より百年前までは、名もない村落であつたが、ヘロデ大王によつて再興されて美麗な都市となつた。ヘロデはその町にカイザル・アウグストの名に因んだ名を付け、神殿を造つて皇帝崇拜の的とした。エルサレムよりカイザリヤに



至る通路は巨大な石で巧みに敷きつめられて、今日も尙丘陵傳ひに辿られる。カイザリヤはエルサレムの玄關口にあたるロマの港で、紀元六年後は猶太地方總督の邸宅が設けられた。ユーセビヤスが有名な教會史を著した頃在つた大圖書館はすでにパウロの時代から建築を始められたものであらふ。

ユダヤ總督ペリクスは紀元五二年頃皇帝クロデオによつて任命された。彼とその兄弟とはロマなるクロデオ家の奴隸であつた。タシタスの云ふ所によればペリクスは總督の務めに在る時も、奴隸の根性で人を治めたとある。猶太總督中一番能率の上らない總督であつた事も事實である。彼は如何なる場合にも賄賂をとる事を忘れなかつた。或ひは又猶太人が何か騒動を起しそうな狀況をみると、私かに、それを物にしては、かねて目星しい者を捕へて死刑に處しその財産を自分の所有にしたりした。

ペリクスの第一の妻はアントニオ・クレオパトラの娘であつた。その後妻ドルシラ（使徒行傳廿四の廿四）は美人の評の高い猶太人でペリクスがその先夫より奪つた女であつた。不幸にして此女は紀元七九年ヴェスヴィオ火山の噴火に包まれて死んだ。

ペリクスの法廷で、辯護士テルトロは、でたらめに、かゝる場合總督の前に訴ふるに適當な様な事實許りを並べた。パウロの答へは、この訴へに對しては決定的の辯駁で又飽くまでも、正義を要求した堂々たるもので非常に強い印象を與へた。爲にペリクスがパウロの無罪ならん事を欲したといふ様な事は考へられないが、彼がパウロを救つていくらかの自由を與へた點については二つの理由が存した。（一）はパウロのロマ市民權、（二）パウロの辯論中、貧民救助のため寄附金を持ち歸つた事に言及したためである。

（一）パウロがロマ市民としての自信ある態度はペリクスの注意を惹いたに違ひなかつた。今迄彼の前に引き出された囚人どもは皆一樣に見苦しい聲を立てては、色々哀願した事が當時のバピラス文書に書き残されてある。今ここに立つた人はタルソの住民で、エルサレム神殿内では怒り狂ふ群衆に向つてさへその勇氣を示した。「サンヘドリン」では死罪の宣告を受けんとする際に尙沈勇と機智とを失はずして靜かに復活に關する問題を叩きつけて罪の宣告をなす機會を失した。却つて彼は十分の自信を以てロマ地方總督の面前に立ち、彼の新信仰について公然と語る機會を得し事を悦ぶかの様に見えた。ペリクスは命じてパウロに恩



典を與へた。「ペリクス懼れて」なる聖書の言葉はペリクスが、パウロとその福音を聞いて、心中に純な尊敬の念を有した印しではなからふか。

(一)使徒行傳廿四の十七に引用された「施濟」を持ち來りしと云ふのは使徒行傳中此問題に就いて此處にただ一回丈記されてある。それがペリクスの耳に特別の意味を以て響いたのも想像に難くない。彼より見ればパウロなる男は、ロマ領内至る所に知人を有して、彼らは悦んでパウロの爲に金錢を捧ぐる事を辭せないのであつた。そこで吾人は「友の事ふるをも禁せざらしむ(廿四の廿三)」といふ特典を、ペリクスがパウロに與へた動機について多少の疑ひの餘地あるを否み得ない。少くともペリクスは、この特典を與ふる代りに、それらの寄附金を自分のものにし様といふ野心があつたらしく思はれる。マケドニヤ、アカイヤ地方で集められた寄附金がもしカイザリヤ宮殿に住む「聖徒の首」のために集められたとしたならば何といふ結構な事であらふ。ペリクスの心は全く金によつて占められたのであつた。

パウロは制限された自由の裡に、ここで二年間を過したが、それは非常に活動的で又強い感化をその周圍に與へた。ここに注意すべき事は使徒行傳物語り中、例の「われら」といふ

代名詞がパウロのカイザリヤ出發の時よりまた表はれて來る事である(廿七の一)。多分ルカは、エルサレムで寄附金の分配を終つた後、直ぐマケドニヤに歸つたであらふ。然らずとすれば、彼はエルサレム、ガリラヤさてはアンテオケ邊りで、使徒達と親交を結び、イエスの生涯や行に就いて色々材料を集めたに違ひない。パウロは例に依つて暫くも靜止せず訪ひ來る友をとらへては倦まず道を説き又前後の策をめぐらした。ガラテヤ、アジヤの遠きより贈物を携え來る信者もあれば、又は教へを乞ふために、訪れる者もあつたであらう。惜しむらくは、數多のパウロ書簡が失くなつて今は之らの詳細を知る由もない。時にパウロは、白浪の碎くる城壁の石階に立つては遙かに西方を望んで、アジヤ、マケドニヤ、アカイヤにある、思ひ出多き各教會の事をしのび、更に思は、未だ訪れぬロマ、スペインの涯にまでも馳せたであらふ。

### 三 ロマ皇帝に上告

パウロは長い間總督の更代を待ち望んでゐた。如何なる總督でもペリクスよりは善いに違ひない。パウロはその時の來る事を豫知してゐたのかも知れない。終に時が來て皇帝はペリ



クスに辭職を命じた。もし彼の兄弟バラスの執り成しがなかつたならば、ペリクスは非常な辱めを受けて追放の憂き目を見せられたであらふ。幸ひにしてバラスは、その頃富み昌えて、ロマで有力な一人となつてゐたために、ペリクスの急を救ふことができた。

ペリクスの解任とフェスト就任の日附は今日も尙かなり議論の的とされてゐる。吾人の計算によれば、「ガリオの銘」よりしてパウロがエルサレムに到着したのは紀元五六年の時となる。偶然にも、之は使徒行傳廿四の十にパウロの云つた言、即ちペリクスは紀元五二年に任命され、その時すでに「年久しく」任にあつたといふのに符合する。さてパウロの監禁が二年つづいた所より判斷してフェストの任命は恐らく紀元五八年に起つた事の様である (Hastings, Dictionary of the Bible, art, "Chronology")。

フェストが地方總督の椅子についた時、尤も緊急を要した事件はパウロの問題であつた。折からカイザリヤに下つて來た猶太人らが彼らの訴狀を出した。そこでフェストは新任勿々の際として出来る丈猶太人と妥協する事の利を考へた。彼が猶太人の願を容れて、パウロをエルサレムに送り還さんとする命を出さんとした刹那パウロはとう／＼「我はカイザルに上告

せん」との力強い言葉を發した。

パウロの上告には三つの理由があつた。第一に彼は丁度第二十五章第三節にある様に、途中で彼を暗殺し様とする計略のひそむ事を秘密に聞知してゐた。多分此度のしらせは「姉妹の子」よりでなく、平常パウロを訪れる事を許されてゐた友人の誰かに聞いたであらふ。第二に彼はエルサレムの審問に連れて行かれる事の危険を知つてゐた。又エルサレム末期の一斑精神状態や周圍の形勢をも知つてゐた。更にロマ領の各地に移住してゐる猶太人の團體よりエルサレムに向けて、新しいキリスト教の信仰がユダヤ教よりも盛んで、猶太人會堂よりその優越權をも、信者をも又その候補者もすべて奪ひつつあるといふ報告されてある事も知つてゐた。

第三番目の大事な理由はパウロが、一日も早く首都ロマで福音を説きたいといふ矢も楯もたまたぬ希望であつた。ロマを見たいとは彼の宿願であつた。今彼は、その受けてゐる刑罰をば此の最大の目的を果たす方便に使つた。自由の身の際に造つて置いた計畫をば、彼は實にその入牢中に達成したのである。



パウロが上告した皇帝はネロであつた。正義以外の事物に關するネロの評判は世の熟知する所である。吾人はもし之がネロの前であつたクロデオか又はアウグストであつたならば、此の際どんな裁きをしたであらふかと考へざるを得ない。必ずパウロは 로마に着くと直ちに審問せられて、「猶太に歸るべからず」といふ條件位で速やかに釋放せられたであらふ。尤もネロの治世の初期は、その後期の様に亂脈ではなかつたのでパウロはかなり公平にして自由な待遇を受けた。然しネロの晩年を知る者の見方によればパウロの前途は餘りめでたいものではなかつた。

フェストを惑はした次の問題はパウロに就いて 로마に送るべき其の筋への公報であつた。この點に關して彼はアグリッパ王の意見を求めた。アグリッパはヘロデ大王の孫にあたりその領地はヨルダン河の東方で北の方はダマスコまでも擴がつてゐた。そして彼自らは猶太人といふよりもむしろ羅馬人であつた。猶太の首都エルサレムの破壊後三十年迄國を治めた（紀元五〇年——紀元一〇〇年の間）。

アグリッパが新總督フェストを訪れたのはただ社交上の儀禮にすぎなかつたらしい。元來

アグリッパは猶太人と羅馬人との間に在つて双方の偏見も理想もよく知つてゐたために一種の仲介者の役に立つてゐたので、機を見るに敏なるフェストは、この訪問を利用してパウロに對する意見を聞かうとしたのであつた。

アグリッパ王の前で試みたパウロの辯明は實に力強いものであつた。パウロはアグリッパが猶太の理想の多くを尙ぶ人であり、物の見方も國際的で抱括的な事を知つてゐた。實際パウロがアグリッパを彼の福音に従はしめんと試みたとしても、それは全然不可能ではなかつた（使徒行傳廿六の廿八）。少くともパウロは、彼の受けた迫害は、猶太人の狹義な國家的偏見が、彼の自由にして世界的福音に反對したためのものであるといふ事を明かにした點に於いては十分の成功であつた。

フェストは 로마宛の報告書を作成する時にアグリッパの言葉「この人カイザルに上訴せざりしならば釋さるべかりしなり」といふ句をそのまま引用したかも知れない。パウロは航海中も 로마に到着した後もかなり寛大に取り扱はれた。

#### 四 航海と難破



カイザリヤより航海の記事は再び第一人稱復數で、多分ルカが毎日書きつけた航海日記そのまま此所に書き移したものであらふ。使徒行傳中、その長さに比しては一番詳細な記述である。記事の文體も亦古代文學中異彩を放つもので、機關も羅針盤もなかつた時代の長航海に従事する水夫達の海上生活が手に取る様に描かれてゐる。之は今日の海洋航行記事と比べても遜色はないであらふ。ルカ以外パウロにはアリストタルコといふ同伴者があつた。之はエペソでパウロと一所に群集に捕へられた人でコロサイ書四の一〇にパウロは彼の事を「我と共に囚人となりし」と書いてゐる。百卒長ユリヤスはローマ人として恥づかしからぬ型の男であつたらしい。「アウグスト隊」に屬する事は何人によらず名譽の事であつた。

東北より強い嵐が來たために、エヂプトやパレスチナより西に向ふ通常の航路は、先づ北の方小アジアの海岸に針路をとり、そこより西方に轉じた。シドンについた時、ユリヤスは、パウロにキリスト教徒の許を訪ふ事を許し、やがて船は地中海の東北の隅で捷徑をとつてクプロの風下を走る事となつた。ミラの海岸に着いた時ユリヤスはイタリヤ直航の船を發見した。それはアレキサンドリヤよりの小麥を運送する船であつた。この荷の他に、船には水夫、

旅客を合して二七六名の乗り組み人があつた。ミラを離れると間もなく風向の都合で、多島の海の岩の多い間を風に逆つて航海するよりも、西南の方クレテ島に針路を向けた方が安全である事がわかつた。

ルカの考へによれば、時すでに航海の季を過ぎかかつてゐたので、クレテ島の南海岸で一番早く着いた港に冬ごもりしたがいいと思つた。夜と晝とが同じ長さである「贖罪の斷食日」もすでに過ぎた。パウロの試みた「よき港より先に航海をつづけられない様に」といふ忠告は、長い間の經驗に本づいたものであつた。……「破船に遭ひし事三度にして、一晝夜海に在りき（コリント後書十一の廿五）……然しながら預言者の聲は「南風徐ろに吹く」時は人々に省みられない事が多い。船人らは次の港まで今一と航海と決定した。

二週日の間、彼らは太陽も星の光りも仰ぎみる事ができなかつた。この間彼らは帆を右舷に縮めて、東北の疾風が彼らをアフリカ海岸に吹き流さぬ様と、頼りない望みの裡に戦々慄々として航海をつづけた。この大暴風の裡に、泰然としてパウロが一同を勵ます「畏るるな」といふ言葉のみが唯一の落ちついたものであつた。



船の打ちあげられたマルタ島の海岸はシシリーの南約六十海里にして、今も尙「聖パウロ灣」と呼ばれてゐる。ここも亦冬を越すに都合のいい場所ではなかつた。ルカの日記は三月の島ごもりの後、彼らが美しいナポリ灣に達しイタリアの春の麗かなる最中ポテオリに上陸した時に感じた押へきれぬ歡喜を巧みに反映してゐる。

ポテオリの兄弟たちの多くは、未だパウロに會つた事もなかつたが、心の底よりパウロを歓迎して七日間もそこに引きとめた親切な有様は、當時世界中に散在したキリスト教信者のもつ兄弟の愛をハツキリと表はしてゐる。之らの信者達は彼の必要を満たし、又パウロが過ぐる數ヶ月若しくは數年間の出來事を物語りした話にも熱心に傾聴したであらふ。ここより直ちに使者を立ててロマに送り、その信者の群にパウロの來着を報じた。そのために、パウロとその一行はロマの都まで陸路百三十哩の旅路の途中三分の一の所で、迎ひに出て來たロマの代表者に迎へられて非常な悦びと望みを感じた。

#### 参 考 會

1. Ramsay, St. Paul the Traveller, pp. 303-43
2. Kent, Work and Teachings of the Apostles, pp. 205-9; 216-20.
3. Gilbert, Student's Life of Paul pp. 175-215.
4. Conybeare and Howson, Life and Epistles of St. Paul, chaps. XXI-XXIII.
5. Farrar, Life and Work of St. Paul, chaps. XI, XIII, XIII.
6. Bible for Home and School, "Acts," pp. 201-53.
7. McGiffert, A History of Christianity in the Apostolic Age, pp. 338-62.
8. Cone, Paul the Man, the Missionary, and the Teacher, pp. 135-38; 143-44.
9. Bacon, The Story of St. Paul, pp. 186-214.



## 第十二章 ロマにて

### 一 ロマの二年間

使徒行傳廿八の十六―卅一。

### 二 ビリビ教會への書翰

ビリビ書。

### 三 獄中書翰

ピレモン書、コロサイ書、エペソ書。

### 四 戦の終り

ロマ十五の廿四―廿八。テモテ前一の一―三。テトス一の二―五、三の十二、十三。テモテ後一の十二、四の一―廿二。

### 五 基督教内に占むるパウロの位置



## 一 ロマの二年間

パウロの二年間のロマ生活について、ルカの残した僅かの記録は、彼が時々、キリスト信者でない猶太人と會合した事である。かういふ都會に到着すると先づ第一に猶太人を説くのがパウロの習慣であつた。ロマには猶太人の部落が強固に根を下してゐたので、パウロは特別の努力を以て、彼らをキリスト教に近づけ様としたに違ひない。その上ロマの猶太人は、パウロ反對について、猶太より何らの通知も受けてゐなかつたので、第一回の集りには、パウロは多少成功の餘地を見出だした。然し少數の悔改者を得た後、彼はここでも亦異邦人の間にその傳道の方角を轉じて行つた。

パウロがフェスト及びアグリッパの面前で試みた辯明は、ロマへの報告を、彼に有利に導いたに違ひなかつた。同時に護送の責任を負つた百卒長が航海中、難船の苦を嘗めた時分、一同を勵ましたパウロの態度に深く感動して、パウロに有利な報告をした事も、彼がロマで寛大な取り扱ひを受ける助けとなつたであらう。二ケ年の間、唯一人の護衛兵つきで、自費で借り入れた家に住ひつつパウロは全力を注いでロマ教會の建設に盡したので、後日ロマ教



會は世界有数のキリスト教の中心社會となつた。

恰もパウロと時を同じくして、ロマには哲學者セネカも住んでをつた。セネカもパウロも共に正義のためにネロの忌諱に觸れて不慮の死を遂げた點はよく似てゐた。然し一方に於いてセネカは皇帝ネロの友であつたが、パウロは之と反對に一般貧しき人々の友であつた。ネロを善に導く事は全然望みなき務めであつたが、人々の家庭の内に神の靈を導き入れる事はパウロにとつては、すこぶる望み多い事で、實際に於いて多くの成功を遂げた。初代キリスト教會はパウロとセネカとが親しい友で、幾度も私信の往復があつたなどと想像する事を悦んだ様に見えるが、今日残つてゐる「パウロとセネカの書簡」は全く後世の模造に過ぎない。今日ロマを訪れて筈窟（カタコーム）の地下道を、幾哩となく歩いた人は、第二世紀後、數百年に亘つて、キリスト信者達が世の迫害を物ともせず、地下を用ひて集りの場所とした、活き活きとした信仰の活動を容易に描き見る事が出来る。壁上には古くエデンの園より、ヨナと魚の冒險に至るまでの舊約物語りが無數に描かれてある。その側には又、イエスの誕生物語り、イエス數千人を養ひ給ふ圖、神秘的な魚の象徴、その他種々の物語りなども描かれて

ゐる。すべて之らはパウロの活動の何物かを語り傳へるものである。カタコームは外部から少しも見えないが、内部の廣さと、その方々に別たれた支脈とは限りないものがあつた。罪に打ち克つ歡喜、新生の誕生、訓道に餓え渴く者に神の言葉を説き聞かす悦び、神の子にして救世主としてのイエス・キリスト——パウロが描き出した之らの巧みな繪畫はロマの地下バイに擴がつた陰鬱なカタコームの中に、僅かに信仰の光りをつなぎ得た、健氣な人々の心に新たなる光明を點じ更にその信仰を美化せしめずには措かなかつたであらう。

## 二 ビリビの教會に宛てた書簡

ロマに於ける長期の監禁の間に、パウロが許された一つの特典は、自由に手紙を書く事と、又自由に手紙を受け取る事であつた。自らマケドニヤ、ア ज्याの諸教會を訪問する事は出来なかつたが、彼は個人的の用件や、福音の誤つた解釋や、誤つた應用を防ぐ特別の注意などは思ふままに書き送る事ができた。その返事として之ら諸地方の教會よりは、悔ひ改めた人々の信仰生活の進歩を聞かされ或は又特志の信者達の贈つてくれた、心をこめた金や物品に思はぬ喜悅を感じさせられた。



特にピリビ教會よりの贈り物はパウロの心を悦ばしめた。之に對する感謝の手紙は、まだ彼が縲<sup>ヤハメ</sup>に在る時に書いたものである（ピリビ書一の十三、十七）。多くの學者達は、ここにパウロの云ふ縲<sup>ヤハメ</sup>とはロマに於ける入牢中であると主張する（一の十三、四の廿二參照）。前章に述べた通り、之はピリビ教會員より受け取つた第四回目の贈物であつた。第一回と第二回の分はピリビ四の十六に、第三回の分は、コリント後書十一の九（ピリビ四の十五比較）に書かれてある。之ら四つの贈物を受け取つた毎に、パウロは必ず禮狀を出した様に見える。従つて現在のピリビ書の内容が單にその禮狀ではない所より判斷すれば、之は第五回目頃の書簡であつたらうと考へられる。第四回目の贈り物は既に届いてゐた。それを運んで來た使者のエバフロデトは「死ぬるばかり」の病に罹つた（二の廿七）。恐らく此の男は、パウロの手助けとしてかなり長い間一所に停る豫定で派遣されたものであつたらしい。然し病氣の故に一旦ピリビに歸つた方が上策に見えた。ピリビ書は、彼が歸郷の時に携えて行つた證明書であつた。

パウロとピリビ人との間に、文通のあつた事に關する證據はまだ他にも在る。ピリビの人

々はパウロより直接にエバフロデトが病に罹つた事を聞き、エバフロデトも亦ピリビの人々がすでに彼の病氣の噂を知つてをる事を聞いた。そこで彼はピリビの人々が案じてゐるはしないかと心配した事が「ピリビ書二の廿六」に出でゐる。

今日のピリビ書なるものは、一つのまとまつた手紙でなしに、數多の斷片を含むものといふ推定が下されてゐる。第三章第二節などの如きは、論旨が急に變じてゐる。「終りに云はん、わが兄弟よ」の一句（三の一）は、今われらが見る通り、手紙の中頃の言葉であるが、四の八にも亦「終りに言はん、兄弟よ」と出でゐる。ポリカールは第一世紀の初め頃、ピリビの教會に書を送つて（第三章）パウロのピリビ教會に送つた「書簡」に言及してゐる。一體ここに用ひられたる「書簡」といふ字はギリシヤ語の復數の形であるが、それはギリシヤ語學上、必ずしも復數を意味しない。ポリカールの書きぶりより察すれば、彼は「パウロの書簡」の一つのみならず、その他にも目を通した様に考へられる。

左にピリビ書の内容の概要を述べてみよう。

一と通りの挨拶と、信者達が、福音の教へに忠實である事に満足の意を表したる後（一の



一―十一)、パウロはピリピの人々に、彼自身の消息を語り(一の十二―廿六)、キリストの信者として相應しき生活をなす様、一同を勵ます(一の廿七―二の十八)。彼の望みは一旦テモテを遣したる後、間もなく自身ピリピを訪れむと願つてゐたが、今は都合によりエバフロデトを送らんとしてゐる。エバフロデトの病は非常に重態であつた(二の十九―三十)。次ぎに第三章第一節よりは一とくくりを與へる實際的獎勵に始まつて、急にその調子が改まり、猶太教律法派に對する警告(三の二―十一)と、唯信論者の教へ即ち信する者は既に救はれてゐるので、その上特に信者としての努力をなすとか、又は倫理の教を守るなどの要なしと云ふ様な教へに對して一同を戒しめてゐる(三の十二―四の一)。ここで更に一段落に見える獎勵の辭を與へて、彼は、エバフロデトの手を通して受け取つた贈り物に心よりの謝意を表はし(四の十一―廿)、最後に挨拶と祝禱を以て擱筆してゐる(四の廿一―廿三)。

一體この手紙を見ると、ピリピの教會にはガラテヤ地方やコリントの諸教會に起つた様な黨派の争ひなどといふ忌はしい問題はなかつた様であるが、といつて決して之らの諸教會宛の書簡に比して興味が少ないわけではない。却つてピリピ教會はパウロの造りあげた教會中

でも一番パウロに忠實であつた丈に、本書を讀む時には、パウロの個性や、パウロの説いた教訓などの個人的方面を知る上には、一番面白い材料を含んでゐる事がわかる。

### 三 ビレモン書、コロサイ書、エペソ書

ある時、パウロは三つ程の手紙を一度に出した。ビレモン書(特にその第十節)をばコロサイ書と併せ讀むと、直ぐにこの二つの手紙が、同じ時オネシモに托して發送された事がわかる。又コロサイ書四の七とエペソ書六の廿一とを比較すると、偶然にこの二つを同一の書簡として了ふ。双方の場合共に、テキコはパウロと共に在つた事が明記されてある。その上この事は、二書の内容が殆ど同一であり、又書いた人と、讀者の兩方を描き出す當時の形勢が酷似してゐる事によつて、益々その推定の眞なる事が證明される。

三書共に、パウロの繹綫の事に言及してゐる(ビレモン一、十三、コロサイ四の十八、エペソ三の一、四の一)。

若しパウロがエペソで投獄されたとすれば、ピリピ書と共に、三書が同市より發送されたといふ推定が可能であるが、今日學者の一般の説は、書かれた時と場所とをロマの獄中生活



に歸する様に見受けられる。

一、ビレモン書は純粹な個人的書簡であつた。ビレモンはコロサイの住民で、明かに相當の才能と勢力とを有してゐた事が、單に奴隸を持つてゐた許りでなく、コロサイの教會の爲にその住宅を開放した事によつて知られる。その奴隸の一人、オネシモが逃走した。パウロはこのオネシモを送還し様としたのである。「オネシモ」と云ふ名は「益ある者」といふ意味を持つ。パウロはその書中に、果してこの逃亡した男が「益ある者」であるか、どうかを質問してゐる（第十一節）。

パウロはオネシモを悔い改めに導き、再び益ある者となし、逃亡によつてビレモンに蒙らしめた損害をすべて償ふ様に命じて、ビレモンの許に送り返した。ビレモンは本書を手にして「以後、オネシモを奴隸の如くせず、愛する兄弟の如くせん」ことを願ふ所を讀んだ時には、さすがに、この酷しいキリスト教の訓へにたぢろいたであらふ。然し彼はパウロの如き人よりこの様な個人的手紙を受けとつた名譽を感じ（十九節）、更に間もなくパウロが自ら彼の許を訪れるといふので、十分の満足を感じた（廿二節）。

二、コロサイに在るビレモンの邸宅は、キリスト教徒の集會場として用ひられた（ビレモン書二）。そこでパウロは個人的手紙を書くと同時に、この教會とコロサイに住む信者全體に宛て、もう一つの手紙を書き添えた。前よりパウロは此處の信者の信仰を亂す様な「教へ」の在る事を聞いてゐたし、その形勢も仲々容易ならぬものがあつたので、パウロは彼の代理として、共に働いてゐたテキコを遣はす事にした（コロサイ四の七）。パウロに委細を報告した人は多分コロサイの人エバfrasだつたらしい。彼はパウロが之らの書簡を書いた時はその側に居つた。エバfrasはエペソではパウロと共に傳道に力めた人で、後コロサイで傳道した（一の六、七）。筆を執りながら、パウロは屢々この男に質問しては、書中に用ひ様とする事柄の正確ならむ事を期した。

コロサイでパウロの福音の邪魔となつてをつた「教」といふのは、この町の地理上の關係に負ふ所が多かつた。コロサイの町は小アジアの内地を貫く大道に位し、東西文明思想交流の中心をなしてをつた。ここには前にも述べた通り各種の密教が盛んで、各宗共に「神々の力と交はる」點に重きを置いた。その影響を受けて、コロサイのキリスト信者は、神との靈



交による神秘的宗教的法悦をば、單にキリストとの靈交によつて得る許りでなく、同時に之はキリストと同等若しくはキリストよりも偉大なる神々との靈交によつても得らるるものであるといふ、思想に巻き込まれて了つてゐた。

之ら密教の中には又、一種の禁欲主義の教訓も含まれてゐた。「手にて捫り、味ひ、又觸るる勿れ」といふ事が本書第二章に述べてある通り、密教の儀令に含まれた禁令であつた。この宗教上の複雑な形勢に加へて、すべてを猶太教化せむとする運動が現はれたので一層、當時の人心を迷はしめた。尤も猶太教中のある教へは、之ら禁欲的の教訓と深い關係があつたのかも知れない。割禮、安息日、新月の祭り、祝祭日、斷食期間の遵守などは皆パウロの書簡中に引用されてゐる。

パウロの傳道方針は決して、之らを以てキリスト教信仰に反對する無價値の教義であるとして攻撃するのではなかつた。彼の態度はむしろ調和的であつた。コロサイの人々に對しても、彼はすべて、コロサイの信者達の立場、又その使ひ慣れた言葉、その考へ方に従つて、キリストの偉大なる事を説明した。一體キリスト教その物が、各世紀を通して、哲學的にも

又宗教的にも絶えず、他の思想運動と相接觸しては、盲目的にそれらを排斥したり、丸呑みにしたりせず、注意深く、選擇、解釋及び折衷しては、相一致して進歩して來たのである。

パウロは、コロサイの人々の常用語を借りて「キリストの裡に、神の満ち足れる徳は、悉く形をなして宿れり」と云つた。割禮については「汝らキリストに在りて、手をもてせざる割禮を受けたり」と喝破してゐる。密教の中で尤も人目を惹いた「淨め」の表徴的な儀禮について(本書第一章参照)パウロは説明して、キリスト教の洗禮は、キリストと共に葬られ、又信仰に依りキリストと共に甦る事を表はすと云つた。祭りや、月朔の遵守は、キリスト教信仰の影である。キリストに於いて、すべての人は完全と、統一とを見出だす。之こそ完全な「神秘」である。知慧のすべての寶は皆キリストの裡に在り。ギリシヤ人はその哲學を誇り、猶太人は「割禮」を有つ、されどキリストに於いては、ギリシヤ人と猶太人と、割禮と無割禮と、又夷狄、スクテヤ人、奴隸と自主との別ちある事なく、キリストは萬のものにして又、萬のものの中に在し給ふ。

書中、パウロは、まづ挨拶の後(コロサイ一の一、二)、直ちに個人的感謝の辭(一の三



一八)、及び信者達が、キリストの最上の地位を完全に了解する様に祈り(一の九—廿三)、再び、彼が福音の爲めに忍びし患難を語り聞かせ(一の廿四—廿九)、又彼が特にコロサイ人らの幸福を希ふ赴きを述べて信者一同の心を惹いて行く。(二の二—七)。次ぎに彼の筆は、尤も重大な戒告として表はれ、哲學的の論議や、猶太教化せむとする運動に迷はされて、最も重要なキリストの信仰を奪はれぬ様にと注意した(二の八—廿三)。更に彼は、その教へを實際生活に適用して、日常諸方面の生活に於いて、一同益々向上の生活を送る様に勵まし(三の一—四の六)、終りの頁は、同勞者に對するパウロ自身の個人的關係を表はす、興味深い引照で満たされてゐる(四の七—十八)。

テキコ(四の七)は、この書簡と、エペソ宛書簡(六の二)とを携へて來た人である。オネシモを「汝らの中の一人」と書いてある記事によつて、オネシモの主人ピレモンはコロサイに住む人で、その住宅で信者達が集つた場合、奴隷のオネシモは「奴隷より解放」又は「キリストにより償はる」などと云ふ言葉を漏れ聞いたであらふといふ様な事を推定する事ができる。オネシモは之を聞いて一人で都合のいい様な判断を下し、もし大使徒パウロにす

がつたならば、彼を奴隷の境遇より解放してくれるであらふといふ様に考へたものであらふ。アリスタルコ、マルコ、エバfras、ルカは皆、われらにも熟知された名である(ピレモン廿三、廿四参照)。アルキボ(四の十七、ピレモンの二)はピレモンの家に在つた教會の指導者で、多分ピレモンの子であつたかも知れない。

特に興味有る事は、コロサイ四の十六に在るパウロの言「此の書を、汝らの中にて讀みたらば、之をラオデキヤ人の教會にも讀ませ、汝らは又ラオデキヤより來る書を讀め」といふ箇所である。コロサイは約六哩離れてをつた。パウロがこの二つの教會に、同時に二通の書簡を書き送つたといふ事は不自然ではないが、問題は、一體ラオデキヤ宛の書簡はどうなつたかといふ點に歸する。

三、エペソ書を見て、第一に讀者の注意を惹く事實は、第一章第一節にある「エペソに在る」といふ句の不定な點であらう。此の句は二つの最古の原本には見出されない。その上パウロは、エペソには他の何處よりも長く費やしたとは云ふ者の、此の書簡は全く個人性を缺いた、どことなしに物足らぬ恨みがある。ある箇所によると、パウロはまるで、見た事もな



い人々に書いてゐるのではないかと思はせる節もある。例へば、エペソ書一の十五「汝らの間に在る、主イエスの信仰を聞いて」と云ふ所などは、極めてよそ／＼しい言ひ廻しぶりである（三の二参照）。此の書簡がコロサイ四の十六に云ふラオデキヤ宛書簡であらうといふ事も全然誤りではあるまい。第二世紀にマーシオンはその選んだ聖書中、この「ラオデキヤ」に宛てたパウロの書簡を載せてゐる。それは明かに、今日我らの有するエペソ書の位置を占むるもので、オリヂンも亦その事に言及してゐる。

ラオデキヤ宛の書簡に、どうして「エペソ書」と云ふ名稱が付けられたかといふ問題は大きな困難なものではない。多分パウロは此の書簡はラオデキヤよりコロサイに發せられた許りでなく、コロサイの十六に、彼自ら曰ふ様、ア ज्याの諸教會にも廻付せられむことを欲したであらふ。書中、個人的色彩の少ない點なども、本書が廻付狀の性質をもつてゐた事に符合してゐる。従つてこの書簡は、廻りめぐつて最後には主府のエペソに來り、そこで保存せられた。そこでパウロの遺書を編集しつつあつた人が、本書を見て直ちにエペソ宛の書簡と解したか、或は又地方の諸教會に宛てたものである事はわかつたが、之にア ज्याの主府にあ

る教會エペソの名をとつて本書の名稱としても差し支へないものと解釋したものであらふ。本書は大體の組み立てがコロサイ書に類似してゐる許りでなく、その内容に至つては殆ど同じである（エペソ書五の廿二—六の九及びコロサイ書三の十八—四の一とを比較参照）。まづ第一章に、一と通り賞讃と謝禮の辭を述べたる後、第二章には、信者達が未信者時代の有様と、今や信者となつて一同力を協せて一つの大きいなる神の宮即ちキリストに據る一つの團體を建設しつつある有様との對照を示してゐる。第三章には、キリストにつける奧義を敍し、彼らが、かねて求めつつある「神の満ち足れる様」をキリストの裡に見いださむ事を祈り、第四章には、彼らが色々の惡にからまる舊生活をすてて新生活に入らむ事を奨め、第五章、第六章に進んでは、信者達がそれぞれ自らの場所に於いて、眞面目なキリスト教的生活を送らむ事を望んでゐる。

エペソ書が、餘りコロサイ書に似てゐるので多くの人々が、その純粹さを疑つたり、或は又後世、小ア ज्या地方の哲學、宗教を熟知した記者がコロサイ書に眞似て書いたものだなどと考へたりした。然しパウロは二つの同じ様な手紙を、近い所に在つたコロサイ、エペソ地



方の教會に送らなかつたと断定する様な理由はどこにもない。ある學者は本書二通の文體には、パウロの他の書簡にない語句がある點を擧げて、パウロの作であるか否かを疑ふ者もある。然し、内容と思想は全然パウロのもので、彼は、讀者達によく了解させる爲めに、彼らの熟知した語句と、思想の内容を借りて彼自身を發表したので、語句の用法の違ひは、作者がパウロでないといふ理由には薄弱である。

エペソ書内の物の見方はコロサイ書よりもずつと廣い。コロサイに於ける福音の誤用は、エペソ書の中には、唯キリストの最上の主權を認めぬ教へに對する一般的警告を與へんとする動機となつたに過ぎない。神の永遠の計畫即ち總ての時代を通じて神はキリストに因り萬づの事を成就し給ふと説く時、パウロの心には、諸この争論と偽はりの教義とは問題にする程の價值を有たなかつた。人類がすべて、測り知る可からざるキリストによる富を有ち、知識の知る能はざるキリストの愛を知り、すべて神に滿てるものの滿たしめられん事こそ、パウロの祈りであつた。すべて信者が、國境を越えて、一つの大きい團體を造る時、それこそキリストの體で在つて、神はそれを通して、永遠の昔より、その光りある救ひの道を啓示

せむと計畫し給ふたのである。

#### 四 戦ひの終り

最後に、パウロは年來の宿願であつた、スペインの傳道旅行を實現し得たであらうか否かとの興味ある問題が残る(ロマ書十五の廿四)。不幸にして、吾人は、ロマに於ける二年間の生活以後のパウロの生涯を語る何らの材料を有しない。多くの學者は、使徒行傳記者の沈黙より推して、パウロは、ロマの禁錮生活を名残りとして此世に生存しなかつたと結論してゐる。然しこの結論を受け容れる前に、パウロは尙生き長らへて傳道に従つたといふ説を裏付ける左の數點を考慮に入れる事は頗る興味ある問題である。

(一)ロマ書第十五章に表はれた、激刺たるパウロの抱負に就いてはもう何ら議論の餘地は無い。然し使徒行傳中に幾度となく表はれてゐる事實、乃ちパウロがロマ官憲より極めて寛大に取り扱はれたといふ點よりして、吾らは、パウロは、その抱負を實現し得たものと想像し得る様に考へられる。

(二)ロマのクレメントは、第一世紀の末に、コリント教會に書を送つて、十分確かな言葉



を以てパウロは「全世界に正義を教へ、西方の尤も遠方の涯までも達した」と記してゐる。クレメントは親しくパウロのロマに於ける晩年を知つてゐたか、そうでないとすればパウロを知つてゐた人々とは直接交はつてゐたに違ひない。してみると彼の上記の言「西方の尤も遠方の涯（クレメント、コリント前書第五章）」は彼が現に住ひ、且つ本書を書いた世界の中心ロマを指すとはどうしても考へられない。

(三)使徒行傳一の一にルカはルカ福音書を指して第一（前の書ではない）の書と云つて（勿論十分正確ではないが）、少くとも彼は三つの書物を著はすつもりであつた事が仄かされてゐる。この第三の著といふものが今日多くの臆測の材料となつてゐるのである。かりにルカの第三の著があるとすると、使徒行傳の終末が急に擱筆された理由に説明がつく様である。それは又一般にユルセビヤスの、パウロはネロの十三年目に死せりといふ記事、又は同書の、パウロはネロの虐殺の下に死せりといふ記事と一致してゐるとも信せられてゐる。

(四)牧會書簡より引き出さるる議論には、それ程重い權威は無い。その理由は、この書簡は、全體として、又は部分的にも、その純粹さが學者によつて疑はれてゐるからである。然

しその記者といへども、自ら史的存在を信じない使徒の作として、こゝにいふものを徒らに書き残したのではあるまい。ともかくもこの書簡は、パウロが第一回のロマの獄中生活よりは解放されたといふ初代教會の傳説を反映するものである（特にテモテ後書四の十六、十七參照）。

(五)最後にムラトリヤン聖典が今一つの證據を提供する。之は第二世紀後半に集められた新約聖書の目録である。使徒行傳に關して述ぶる伴りに、使徒行傳はペテロの死とロマよりスペインに至るパウロの旅行を記してゐない點を指摘してゐる。之によつてみれば、著者は、パウロのスペイン旅行をば、全然史的事實として疑つてゐない事が推定される。

若しルカが第三の書を著はしたとすれば——ムラトリヤン聖典がこの第三書を指すと解釋する事は無理ではない——多分それは使徒行傳の敘述に等しく、始めの半分をあげて、ペテロの殉教を含む猶太系キリスト教の有力な人々の經驗を語り、後半はパウロの、その後の傳道旅行と殉教談に費やしたであらう。

かりに牧會書簡が純粹なものと假定して、パウロ晩年の旅行記を按ずると次の様になる。



先づロマに到つたパウロは、すぐ其處で放免されて、唯、猶太よりの追放人としてロマに留まる可き條件丈附せられる。そこで彼はスペインへの旅に上つた。スペインの海岸地方に暫く傳道した後再びロマに歸つて、更に、前に組織した各地の教會を巡廻した。途中、約に従つてピレモンをも訪れた。エペソにはテモテを残して教會の任を與へ、マケドニヤに渡り、そこでテモテ前書を認めた。マケドニヤを経てクレテの傳道に向ひ、途すがらトロアス、ミレトス、にも立ち寄つた。クレテに福音を植えつけ、ここにテトスを残してコリントを訪ね、ここよりテトス書を送つた。コリントより陸路北の方ニコポリスに出で、とうとう、反對派の手に捕へられた。ここよりロマに送られ、死する少し前にテモテ後書を書いた。

然し直接資料のない事、教會書簡の純粹さが疑はれてゐるといふ點が、右の様な推定に對して致命的な反對となるのである。主なる資料としては上記ロマのクレメントの記した所あるのみである。

然しながらパウロの最期の場所と時日に關しては今日殆ど議論の餘地はない様である。彼は、ロマでネロ帝の下に、多分紀元六一年頃死んだといふ事が凡そ正確と見做されてゐる。

ロマのクレメント、ロマのカイウスは共にパウロの殉教はロマであつたと曰ふ。オリヂンも亦ユーセビヤスも共にパウロの死はロマで、ネロの時代とする。ユーセビヤスによるとパウロは斬首された事になつてゐる。

パウロは最後まで「その眼くらまず、又その自然の力衰へず」と云はるる記事は正しいものであらう。テモテ後書四の七、八の記事は、確かに最期まで衰へなかつた、パウロの精神力の表はれである。

「われ善き戰鬥をたたかひ、走る可き道程を果し、信仰を守れり。今より後、義の冠冕わが爲に備はれり。かの日に至りて、正しき審判主なる主、これを我に賜はん、嘗に我のみならず、すべてその顯現を慕ふ者にも賜ふべし」

##### 五 基督教内に占むるパウロの位置

パウロがダマスコ途上で悔い改めに導かれた時、基督教は未だ猶太教の一宗派に過ぎなかつた。その死する時、それは實に全世界の宗教であつた。異邦人に福音を傳へた人は他にもあつたが、それらは、パウロの著しい成功に比しては殆どその影をひそめざるを得なかつた。



恰もアメリカがその大なる理想の共和政治の抱負を以つて、全世界にその立場を確立した如く、パウロの力ある指導によつて、初代基督教徒の運動は遂に國際的友誼を唱ふる運動にまで發展した。彼はキリストの宗教をば、後日、ローマ帝國最上の宗教として公認せしむるに至るまで導いたのであつた。

パウロの力は一部分彼の説く福音その物に含まれたが同時に亦、それを解釋し、一般化した彼自身の人格の力強さに因る所が多くあつた。

彼の使命の背景や基礎は、全然舊約聖書に含まれた猶太の宗教であつた。パウロの説く所は父なる唯一の神に就いてであつた。彼の主張である所の、宇宙に唯一の神よりなしといふ教義はストアイク哲學の稍々不明瞭な哲學的單神教や、エピクロス派の不徹底な多神教當時の國教であつた墮落した多神教又は各密教の説く萬神廟などと比較すると截然たる對照を爲した。パウロによれば、以上の宗教又は、古い時代の猶太教の一神教は皆時代遅れの思想でその代りに、天地を創り、すべての人事を掌どり給ふ唯一の神ありとした（テサロニケ前一の九、十、コリント前八の六）。パウロの熱烈なる單一神教は、燃え上る焰の様で、恰もイ

ザヤの諷刺（イザヤ四十の十八以下、四四の十二—廿）が當時の偶像崇拜を焼きつくしてつたかの如き勢があつた。

パウロは猶太教の一神崇拜の教へをばイエスが死より甦らされた神の子、救ひ主にして、唯一の神の啓示者であると云ふキリスト教の信仰によつて再び意義あらしめた。元來メシヤ思想と云ふものは猶太獨特のものであつた。ギリシヤ言葉とその思想の形式に従つてパウロは十字架につけられたる者を描くに、死より甦つて神の右の座に上げられ、神と人類との中介者にして、その靈を通して人類の心に宿り、人類をば自らと共に神と共なる生活にまで引き上ぐる神の愛の啓示者であるとなした。それは實に全世界の求めつつあつた救ひの道であつたのである。パウロの教へによつて彼らは、救主を發見し、新生活に入り、人事百般の出來事の上に、より完き神の啓示を望む事ができる様になつた。

初代キリスト教會に於ける盛んなる傳道熱の潮に、門を開いたのは、實にパウロの力強い實際的な世界主義であつた。パウロがすべて統一と總和を愛した事が一民族のみの占有する一神の教へを押し擴めて、全世界に對する唯一神とならしめ、イブラエルのみに對するエホ



バの愛をば全世界の民族に對する神の愛と化せしめた。彼は宣言して、宗教は儀式や、律法の遵守のみに非ずとした。猶太教の律法組織に對してパウロは靈の宗教を打ち樹てた。洗禮や、聖餐式、その他キリスト教の諸儀式も、それは神の前に功績を得る儀式にあらずして、單に靈によりてキリストに交はり、キリストの靈に満たさるる助けとなる一つの象徴に過ぎなかつた。靈こそパウロの生涯に於いて、すべての原動力であつた。猶太教の儀式一點張りの専制國家の代りに、パウロは愛に因る自治を基とする靈のデモクラシイを創めた。

猶太教會堂に集まる者共には、平常聞き慣らされた「メシヤ王國」の出現を説きつつ、パウロは次の様な明瞭な、差異の點をあげた。即ちメシヤはイエスであつて、その足下に治めらるる國は猶太教のそれよりも更に廣く、世界的のものであると曰ふのである。パウロは猶太人のみが神の啓示の持主で、十二の王座に座しつつ、世界の民を裁く特權を有つ者であるとはしなかつた。割禮も無割禮も共に何ら宗教的意義をもつ者ではない、ギリシヤ人も亦「夷狄」も共に兄弟である。ロマ帝國內に於ける異人種の接觸は恐らく有史以來、今日の合衆國以外に比を見る事のできぬ程複雑であつた。ギリシヤ人、夷狄、スクテヤ人、ユダヤ人、

ロマ人、之らはすべて、奴隸と自主と、男と女との區別なく、キリストによりて一つなりと喝破した。

猶太系教會はイエスを救世主として受け容れはしたものの、その救ひをば狭い律法の制限の下に置いたために、一般に教を説く事も、ひろく信者を求める事もできなかつた。一方パウロはイエスの裡に、神の子、神の啓示者である信仰を見出だし、彼と交はる事によつて正義の道を得、律法の死文に従ふ事を全然不要なりとして全世界の民に救ひの希望の門を開いた。パウロと共にキリスト教は世界的宗教となつた。猶太系キリスト教は漸次その力を失つて終に亡びパウロの解釋の下に進んだキリスト教は世界を風靡した。そして今も尙風靡しつつある。

神秘を主とする色々の密教も亦亡びた。その代りとしてパウロの神秘宗教（もしそういふ事が正しいとすれば）が勝利を獲た。その理由は簡單である。地方的、國家的の色彩及び死法の儀禮を超越した自由、世界に唯一の神の愛、人種の區別なき一般禮拜、世界萬民が神の國に於いては兄弟の愛によつて共同生活を營むといふ生き活きとした彼の説教は、人々の心



を動かさずになかつたのである。

パウロがすべての調和と統一を愛したことは彼の異邦人傳道計畫の全體に亘つても視はれる。彼の心中にはロマ中の隅々までも見透しがついてゐて、キリストをして直接その全部に福音を説かしめんと欲した。彼はエベソに於ける最初の悔改者を呼ぶに單に「エベソ」と云はずして「アジャの初穂」といつた。ある人がアテネで悔い改めた時も、アテネの市の名を呼ばずに「アカヤの初めの果」と呼んだ。遠いスペインさへも忘れはしなかつた。

イエスの世界主義は又内的のものであつた。パウロのそれは外部的にひろげられた。イエスはその愛をば世の「糟」にまでも示して、一般に愛の價値を教へられた。彼の前には取税人も、娼婦もなく、ユダヤ人とユダヤ人でない人々の差もなく、シロフェニキヤの婦人もロマ百卒長も共にその愛に浴した。イエスの世界主義はその實現をパウロにまつ所となつた。パウロは死ぬ前に、地理的にロマ帝國の全部に福音を宣べる事はできなかつたが、彼の企てた不朽の旅行經驗は容易に彼の目的の總量を語るものである。

地上の空間と歴史上の時間とが、パウロの遠大な靈の旅に相交錯してゐる。心理學上のす

べての範疇が彼の裡に見出される。即ち空間はその高さとも廣さとももち、時は現在未來のすべての出來事を以てそこに見出される。天使も、權威ある者も、未知のものにして新たに造られたる者も、あらゆるものは、彼の裡にある生と死、夢幻の實と虚の兩極端の間に介在してゐる（ロマ八の卅八、卅九）。

イエスとパウロの關係について色々議論はあるが、尤も妥當な見方は左の様なものであらう。すべて心の奥深く靜かに世界的福音を有りたいとならば、彼はまづ書齋の靜寂な空氣の裡にイエスを見出だすであらふ。換言すれば彼は、浮世離れた私室に於いて福音を説くイエスと共に生きねばならぬ。然しながら、若し直接外國傳道の旅路に立たむとするか或は社會問題、社會苦の研究に身を委ねむと欲するか、人類の間に神の國を實現して祝福されたデモクラツシイを齎らさむ事を望むか、更に進んでは愛國の心と人類愛とを結びつけむと欲するならば、彼をして「卑しからぬ市の市民」わがタルソのパウロを求めねばならぬ。彼こそは「救主」に關する簡單なる猶太の教へをば全世界の人類に救を齎らす便りとなし又自ら宣教のために訪れない土地の存する限りは「ギリシヤ人にも夷狄の者にも」債務ありとなし、



最後に如何なる犠牲を拂つてもロマに傳道の手を延ばさんと決心してをつた。かかる熱心なる傳道者は須らくパウロを先達として進む可きである。

参 考 書

1. Ramsay, St. Paul the Traveller, pp. 344-62.
2. Kent, Work and Teachings of the Apostles, pp. 220-23; 231-37.
3. Gilbert, Student's Life of Paul, pp. 216-32.
4. Conybeare and Howson, Life and Epistles of St. Paul, chaps. XXIV—XXVII.
5. Farrar, Life and Work of St. Paul, chap. IVII.
6. Bible for Home and School, "Acts," pp. 253-58.
7. Megiffert, A History of Christianity in the Apostolic Age, pp. 362-423
8. Cone, Paul the Man, the Missionary and the Teacher, pp. 144-45.
9. Bacon, The Story of St. Paul, pp. 214-26; 298-380.

10. Burton, Handbook of the Life of the Apostle Paul, pp. 79-100.
11. Goodspeed, Story of the New Testament, pp. 35-48.
12. Moffstt, Introduction to the Literature of the New Testament, pp. 149-76.



補遺 I 年代表

パウロの履歴(紀元後) ロマ史(紀元後)

- 一四—三七……………テイペリオ皇帝
- 二六—三六……………ピラト猶太地方代官
- 二九……………イエス十字架につけらる
- 三五……………パウロ悔改む(行傳九)
- 三七—四一……………カリギユラ皇帝
- 三八……………パウロ、エルサレム訪問(行傳九の廿六)
- 三八—四七……………パウロ、シリヤ、キリキヤに赴く
- 四一—五四……………クロデオ皇帝(行傳十一の廿八)
- 四四……………ヘロデ、アグリツバ第一世の死(行傳十二の廿三)、  
エルサレム救濟訪問(行傳十一の廿、十二の廿五)
- 四六……………



- 四七―四八……………第一回外國傳道旅行（行傳、十三、十四章）
- 四八……………エルサレム會議（ガラテヤ二の一―十、行傳十五章）
- 四九―五二……………第二回外國傳道旅行（行傳十五の卅六―十八の廿二）
- 四九……………猶太人、ローマより追放さる（行傳十八の二）
- 五〇（年の始め）……………パウロ、コリントに入る
- 五〇……………テサロニケ書前後書
- 五一（夏）……………ガリオ地方總督
- 五二……………ガラテヤ書
- 五二―五六……………第三回外國傳道旅行（行傳廿三―廿一の十五）
- 五二―五五……………エペソの三年間
- 五四―六八……………ネロ皇帝
- 五五……………コリント前後書
- 五六……………ロマ書

- 五六……………エルサレム到着
- 五六―五八……………カイザリヤの獄中生活（行傳廿四の廿七）
- 五八……………<sup>フエリクス被免</sup>フエスト代る……………（行傳廿四の廿七）
- 五九……………パウロ、ロマに入る（行傳廿八の十六）
- 五九―六一……………ロマにて、ピリピ書、ビレモン書、コロサイ書、エペソ書
- 六四……………ネロの基督教徒迫害
- 六一（又は六四）……………パウロの殉教
- 六六……………猶太人、ロマに宣戦す
- 七〇……………エルサレムの滅亡

（附記、以上の日附は、Hastings, Dictionary of the Bible 論文 Chronology by Turner に因る。同じく本書に掲げし、ガリオの地方總督任命日付の所を参照せられよ。）



## 補遺 II 参考者

パウロ傳研究に關する無數の書籍中より、重複、混雜を避けて、最小限度で而も必要を満たす丈の参考書を選び出すことは甚だ困難である。

ここでは、各章の終りに、すでに掲げられたもの以外に、少し許り特殊研究用の書籍が加へられてゐる。各章の終りの「参考書」は、其都度、必要な箇所を順序に従つて並べられたものである。

### パウロの傳記に關する参考書

- Bacon, B. W. *The Story of St Paul*, 1904.  
Baring-Gould, S. *A Study of St. Paul*, London, 1897.  
Burton, E. D. *Handbook of the Life of the Apostle Paul* (5th ed.), 1906  
" " *Records and Letters of the Apostolic Age*, 1895.  
Cone, O. *Paul the Man, the Missionary, and the Teacher*, 1898.

Conybeare and Howson, *Life and Epistles of St. Paul* (many editions).

Farrar, F. W. *Life and Work of St. Paul*, 1880.

Gilbert, G. H. *Student's Life of Paul*, 1899.

" " *A Short History of Christianity in the Apostolic Age*, 1906.

Kent, C. F. *Work and Teachings of the Apostles*, 1916.

McGiffert, A. C. *A History of Christianity in the Apostolic Age* (2d ed.), 1910.

Ramsay, W. M. *St. Paul the Traveller*, 1896.

Stalker, J. *Life of St. Paul*, 1889.

Weizsacker, C. *The Apostolic Age in the Christian Church* (2d ed.), 1899.

Wood, Eleanor D. *Life and Ministry of Paul the Apostle*, 1912.

Among the many Lives of Paul written in popular conversational style a recent good one is;

Mathews, Basil. *Paul the Dawnless* (illustrated). Revell, 1916.



For boys there is a very fine little sketch by Rufus M. Jones,  
St. Paul the Hero. Macmillan, 1917.

パウロの経歴の概観

Burton, E. D. Handbook of the Life of the Apostle Paul.

Glog, P. J. Introduction to the Pauline Epistles, 1874.

Godet, F. L. Introduction to the New Testament, 1894-99.

Goodspeed. E. J. Story of the New Testament, 1916.

Julicher. A. Introduction to the New Testament, 1904.

Luke, K. Earlier Epistles of St. Paul (2d. ed.), 1914.

Moffatt, J. Introduction to the Literature of the New Testament, 1911.

使徒行傳の概観

Chase, F. H. The Credibility of the Book of the Acts of the Apostles, 1902.

Harnack, A. Acts of the Apostles, 1909.

..... Luke the Physician, 1907

註 録 輯

Bible for Home and School ("Acts," Gilbert, 1908).

Century Bible ("Acts," Bartlett, 1901).

Expositor's Greek Testament ("Acts," Knowling, 1900).

Rackham, R. B. The Acts of the Apostles, 1901.

For detailed study of Paul's epistles: International Critical Commentary.

パウロの経歴の概観

Bruce, A. B. St. Paul's Conception of Christianity, 1898.

Deissmann, A. St. Paul, a study in Social and Religious History, 1912.

Gardner. P. Religious Experience of St. Paul. London, 1911.

Gould, E. P. Biblical Theology of the New Testament, 1900.

Matheson, G. Spiritual Development of St. Paul, 1890.

Moffatt, J. Paul and Paulinism, 1910.



Ramsay, W. M. *The Teaching of Paul in Terms of the Present Day*, 1913  
Sabatier, A. *The Apostle Paul* (7th ed.), 1908.  
Stevens, G. B. *The Pauline Theology* (3d ed.), 1911.

希臘羅馬の世界に於ける民情

Angus, S. *Environment of Early Christianity*, 1915.  
Arnold, W. *The Roman System of Provincial Administration* (2d. ed.), 1906.  
Case, S. J. *Evolution of Early Christianity*, 1914.  
Clemen, C. *Christianity and Its Non-Jewish Sources*, 1912.  
Cobern, C. M. *The New Archeological Discoveries* (popular style), 1917  
Cumont, F. *Oriental Religions in Roman Paganism*, 1911'  
Deissmann, A. *Light from the Ancient East*, 1910.  
Dill, S. *Roman Society from Nero to Marcus Aurelius*, 1905.  
Fowler. W. W. *Social Life at Rome in the Age of Cicero*, 1909.

|  
∞  
|

..... The Religious Experience of the Roman People, 1911.  
....., *The Roman Festivals*, 1899.

Tucker, T. G. *Life in the Roman World of Nero and St. Paul*, 1910.  
その他特殊の問題に關する

Dobschutz, E. V. *Christian Life in the Primitive Church*.  
Milligan, G. *Selections from the Greek Papyri*. Cambridge, 1910.  
(with translations and notes).

Ramsay, W. M. *The Cities of St. Paul*, 1907.

Ramsay, W. M. *Luke the Physician and Other Studies*, 1908.

Hastings, Dictionary of the Bible (in 5 vols.). Articles on "Chronology of the New Testament," "Acts," "Antioch," and other cities of Paul's activity, on each of the epistles, and all minor subjects.

Hastings, Dictionary of the Apostolic Church (in 2 vols.), 1916-18.

|  
∞  
|



### 補遺 Ⅲ 特別研究題目

各章を終る毎に、特別に問題を撰んで、クラスの討論、講義の題とし、或は各自に研究せしめて、發表せしむるなどは尤も望ましい研究方法である。

#### 第一章

新約聖書研究に新生命を興ふるパピラス文書の研究、

Deissmann, *Light from the Ancient East*, chap. III.

Robinson, B. W., *Biblical World*, XLIV (1914) 403 ff.

アウグストよりネロに至るロマ皇帝の性格研究

大英百科全書、ロマ史(何れの作にても可)。

#### 第二章

使徒行傳は果して信するに足る史傳なりや。

Ramsay, *St. Paul the Traveller*, pp. 383-90;

Bible for Home and School, "Acts," pp. 1-22;

Kent, *Work and Teachings of the Apostles*, pp. 1-8;

Chase, *The Credibility of Acts*; Harnack, *Luke the Physician*;

Harnack, *Acts of the Apostles*; Hobart, *Medical Language of St. Luke*,

ガマリエラについて。

Baring-Gould: *Hastings*

#### 第三章

パウロ悔改の経験を、使徒行傳中の三記事によりて詳細に比較せよ。(第九、廿二、廿六章)

パウロ生涯の出来事の年代研究

Hastings, art. "Chronology"; Burton, *Records and Letters*, pp. 201-7;

Gilbert, *Student's Life of Paul*, Appendix.

#### 第四章



アンテオケ及びアンテオケ教會の歴史

Hastings, Art. "Antioch".

ダマスコ及びキリキヤについて

Hastings.

### 第五章

クプロの島について

Hastings.

小アジアの地理研究。地圖を描きて第一回外國傳道の跡を辿れ、

Ramsay, 'The Cities of St. Paul.'

### 第六章

ガラテヤ書第二章と、使徒行傳第十一、十五章との比較、

Ramsay, St. Paul the Traveller, pp. 40-60, 152-77; Gilbert, pp. 87-106; McGiffert,

Agostolic Age, 170-72.

ガラテヤ地方に於ける猶太律法派

Burton, Handbook; Hastings, "Galatians".

### 第七章

北ガラテヤ説 (Gilbert) 及び南ガラテヤ説 (Ramsay) の大要を述べよ

ルカの傳記 Hastings; マケドニヤにつきて Hastings.

### 第八章

アカヤ、アテンス、コリントの研究 Hastings テサロニケ前後書、ガラテヤ書の大要を記せ、 Burton, Hastings.

パウロ第二回傳道旅行の地圖を描け

### 第九章

コリント、エペソに於ける初代基督信者の生活を記せ、 Dobschütz.

キリシヤ的宗教につきて、 Case, pp. 284-330.

### 第十章



コリント前後書の梗概を記せ、 Burton, Hastings. ロマ書の梗概を記せ、 Barton, Hastings. 第三回傳道旅行の地圖を作れ、

#### 第十一章

ヘロデ、アグリッパ二世の傳、 Britannica; Schürer, History of Jewish People.

古代の航海、 Smith, Voyage and Shipwreck of St. Paul.

#### 第十二章

獄中書簡の一なるエペソ書の著者について、

B. W. Robinson, Journal of Biblical Literature, XXIX (1910) 181 ff

Hastings in Expository times XXII (January 1911)

ピリピ書ピレモン書、コロサイ書、エペソ書の梗概を述べて、 Burton, Hastings.

### 補遺 IV パウロ傳の概括

パウロ傳研究の法としては、各自が、新約聖書をどだるとして、本書の説く色々な注意、参考書を用ひて、各々自らパウロ傳を書いてみるに越した事は無い。

次の表は、その様な研究の一つの見本として試みられたものである。

一、猶太人及び彼らの各地移住、散在

(一)パウロ前、二世紀間の猶太人史

(二)散在、移住の範圍、彼らの自由主義

(三)敬虔なるギリシヤ人

二、ロマ帝國内の宗教

(一)一般社會生活

(二)諸密教

(三)皇帝崇拜



三、キリスト教に向ふ、世界の準備

(一)政治上

(二)社會上

(三)宗教上

四、パウロの少年時代

(一)タルソの市

(二)パウロの家族

イ、猶太的

ロ、羅馬的

ハ、「サウロ」の名につきて

(三)學校教育、商賣を習ふ

五、猶太人としてのパウロの生活

(一)初めてエルサレム神殿を拜す

(二)ガマリエルの性格

(三)タルソ歸省、及び結婚

(四)猶太宗教の高尙なる側

六、パウロをして將來の事業に適當ならしめた性質

(一)家族及び肉體上の特徴

(二)彼の性格内の對照點

(三)肉の刺

七、悔改に導きし感化

(一)彼の宗教的性質

(二)ステパノ殉教の感化

(三)キリスト教の迫害

八、悔改

(一)パウロの書簡に表はれし物語り



(二)使徒行傳の物語り

(三)アナニヤ

九、悔改の意義

(一)パウロの個人的變化

(二)「神の救ひ」の擴大されし計畫

(三)使徒たるの資格

十、悔改後の隠遁

(一)アラビヤ

(二)ダマスコの説教と避難

(三)エルサレム、スリヤ、キリキヤ

十一、アンテオケに於けるパウロ

(一)アンテオケ教會の起源

(二)バルナバがパウロを訪ねし理由

(三)バルナバとの一年間

(四)エルサレム訪問

十二、クプロ島の傳道

(一)バルナバ及びパウロの献身

(二)サラミス

(三)バボス

十三、南小アジアに於ける福音

(一)アンテオケ

(二)イコニオム

(三)ルステラ、デルベ

(四)第一回外國傳道旅行の地圖と梗概

十四、エルサレム會議

(一)會議の原因



- (二) 猶太教宣傳派の論旨
  - (三) 使徒達の、對パウロ態度の變化
  - (四) 書き物にされた報告書
- 十五、ペテロのアンテオケ訪問
- (一) ペテロの最初の考へ
  - (二) ペテロの躊躇
  - (三) パウロ公衆の前にてペテロを叱責す
  - (四) 宣言
- 十六、マケドニヤよりの召し
- (一) アンテオケよりトロアスに
  - (二) マケドニヤよりの人
  - (三) 使徒行傳中の「我ら」の部分
  - (四) ビリビの經驗

- 十七、テサロニケ、ベレヤ
- (一) テサロニケの占むる重要な位置
  - (二) パウロの事業
    - イ、テサロニケ前書の記事
    - ロ、使徒行傳記事
  - (三) テサロニケ出立
  - (四) ベレヤに入る
- 十八、アテンス
- (一) アテンス訪問の目的
  - (二) 「知られぬ神」
  - (三) パウロの演説とその結果
- 十九、コリント
- (一) コリント市の自然の利



(二) コリントの十八ヶ月

(三) ガリオの任期とその性格

(四) コリントを出でてエペソを訪ふ

(五) 第二回外國傳道旅行の地圖と梗概

廿、テサロニケ教會に宛てし二書簡

(一) テサロニケ前書を送りし動機

(二) 同書の内容

(三) 後書を送りし動機

(四) 後書の内容

廿一、ガラテヤ書

(一) ガラテヤ人とは誰なるか

(二) 本書を送りし動機

(三) 内容

廿二、エペソ

(一) アンテオケよりエペソに

(二) エペソの市

(三) バブテスマのヨハネの弟子ら

(四) 三年間の傳道と結果

(五) 出立

廿三、パウロとコリント教會との交通

(一) 分離派に對する書簡

(二) コリント前書の動機

(三) 激しい詰責の手紙

(四) コリント後書の内容

廿四、エペソよりエルサレムに

(一) マケドニヤ



(二) 寄附金募集

(三) コリントの冬

(四) コリントよりエルサレムに

(五) 第三回外國傳道旅行の地圖と梗概

廿五、ロマ書

(一) 書かれし場所、時とその動機

(二) 内容の梗概

廿六、エルサレム、カイザリヤに於けるパウロ

(一) パウロの訪問に對する色々の態度

(二) 就縛

(三) パウロの辯護演説

(四) 地方總督の許に護送さる

(五) カイザリヤの二年間

廿七、ロマへの航海

(一) パウロ上告の理由

(二) 航海と難波

(三) ロマの二年間

廿八、獄中書簡

(一) ビリビ書、動機と内容

(二) ビレモン書、動機と内容

(三) コロサイ書、動機と内容

(四) エペソ書、動機と内容

廿九、スペインへの旅

(一) ルカの第三著書の證跡

(二) 旅行の日程

(三) 收會書簡



(四) ロマに於ける終焉  
卅、パウロの教へ

(一) 猶太教との差異

(二) キリストに關するパウロの思想

(三) パウロの成し遂げし事蹟

# 補遺

大正十四年十二月十日印刷  
大正十四年十二月十五日發賣

定價貳圓

本 刻  
不 許

譯 者 國 友 忠 雄

發行者 東京市神田區通神保町二番地  
小 川 鐵 之 介

印刷者 東京市牛込區早稻田鶴卷町三〇八  
石 原 勘 一 郎

東京市神田區通神保町二番地

發行所

文川堂書店



文川堂書店發行圖書

- |        |              |          |
|--------|--------------|----------|
| 小泉 鐵著  | ゴールノアノア      | 定價金貳圓五十錢 |
| 青山學院用  | 學生用讚美歌       | 定價金貳拾錢   |
| 塚本與三郎著 | 青山の學風        | 定價金壹圓五十錢 |
| 同      | 小供第三教育論      | 定價金壹圓二十錢 |
| 佐藤祐作譯編 | 泰西偉人の言葉 友に贈る | 定價金 壹 圓  |